

には、萱草といふ草を、籬をして澤山植ゑてある。花の色がくつきりして、重なり合つて咲いて居るのは、かういふ、しかつめらしい所の庭には、うづりがよい。漏刻司などは、すぐ傍で、鐘の音も、いつもより耳近く聞えるのを、見たがつて、若い女房が二十人あまり、その方へ馳け出して、鐘樓に上つた。此方から見ると、薄鈍の裳だの、唐衣だの、同じ色の單衣襲だの、紅の袴だのを着て、立つて居る様子が、天人とも言へないけれども、空から下りたやうに見える。同じ若さでも、上臈は上り得ないで、羨しさうに見上げて居るのも、おもしろい。日が暮れてからは、暗まざれに、年かさの女房たちまで一緒くたに、陣へ見物に出て来て、戯

色の單衣襲、紅の袴どもを着て上り立たるは、甚天人などこそ得言まじけれど、空より下たるにやとぞ見る。同じ若さなれど、押し上られたる人は得交らで、羨し氣に瞰たるも興し。日暮て關紛にぞ、過したる人々皆立ち交りて、陣へ物見に出で来て、戯れ騒ぎ、笑も有めりしを、「斯は爲ぬ事なり。上達部の着座給ふ椅子などに、女房ども上り、上官などの居る床子を皆打ち伏し損ひたり」など、苦しがる者もあれど、聞も入ず。屋の甚古くて瓦葺なればにやあらん、暑さの世に知れば、御簾の外に夜も臥たるも、古き所なれば、蜈蚣といふもの日一日墜ちかゝり、蜂の巢の大にて、附き集りたるなど、甚恐き。殿上人日毎に參り、夜も居明し物言を聞て、「豈料りきや、太政官の地。今や歌舞の場とならん事を」と、誦し出たりし人こそ、興しかりしか。秋に成にたれど、一面涼からぬ風の、所がらなんめり。有繫に虫の聲などは聞たり。八日ぞ還啓せ給ば、七夕祭などにて、例より近う見るは、

程の狭ければなんめり。

言をいつてきやつくと笑ふのもあるらしく、「いけませんねえ。上達部のおつきになる椅子などに、女房達が上つたり、上官が坐る床子を、皆な引くり返して、こはしたりして」などと、迷惑がる宿直人もあるけれども、平氣なもので、古ぼけた家で、瓦葺のせいか、ひどく暑いから、夜も御簾の外に寢て居る。(何しろ)古い建物だから、蜈蚣といふものが一日中頭の上に落つて來たり、大きな蜂の巢に、蜂が一杯取つ附て居たりして、全く恐ろしい。殿上人は目がな一日入り込んで居たり、夜は夜つびて咄して、居たりするのを、「豈料りきや、太政官の地の、今や歌舞の場とならん事を」と誦し出した人が、おもしろかつた。秋に成たけれど、

御服 中宮の御父道隆は長徳元年四月十日の薨去なれば、その年の六月は御喪服なり、一周忌にて服忌終る。○御はらひ 六月、十二月の晦日に贖物を出して禊を修め、罪と穢らひを去る、又百官、東文部の被所に集り被をうく。○官のつかさ 太政官廳なり。○あいたん所 政治を執る正廳に對して、衆議以上の人の食事する所なり。○かはらぶき 檜皮葺の殿作りにはあらず役所なれば粗雑なるなり。○くわんざう わすれ草ともいふ、春の頃長き葉を養生し、秋長葉の先に枝を分ちて鬼百合の如き紅黄色に黒紫の斑點ある花を開く。○ときづかさ 朝所の前にある陰陽寮の中の漏刻司をいふ、漏刻は水時計なり時を計る器。漏壺(銅)の蓋に孔あり筒を挿し立つ(漏箭)筒の幹に四十八の刻みあり(漏刻)さて他壺より水もり滴りて入り、その水の溜るに隨ひ筒次第に上りて刻みあらはる。一晝夜四十八刻にして一時を四刻とす。陰陽寮の官、守辰丁を率ゑ漏刻の節を伺ひ、時に鼓を撃ち、刻に鐘をうたしむ(時刻はたとへば寅の一點の寅は時、一點二點三點四點は刻なり)。○躰にびの 中宮に仕ふるなれば同じく喪服をつけたるなり。○押し上げられたる 拙き詞なれど上位に押し上げられたる人、即ち上臈の女房をいふなるべし。○すぐしたる 年長の女房をいふ。盛過などいふに同じ。○陣 太政官廳の政務を見る所。○苦しがる者 官廳の宿直の下衆なり。○あに料りきや 古き句にてはなく、實況を新に誦し出でたりしなり。○かたへ涼しき 「半分涼しき」なり古今集に凡河内躬恒「夏と秋と往きかふ空の通路は、かたへ涼しき風や吹くらむ」とあるによりていへり。○七夕祭 七月七日の夜、天上の牽牛星と織女星と烏鵲が翼を延べて橋とせる處にて逢ふといふ支那の傳説に據りて祭をなす。庭に机を立て物を供へ香を焚き五色の糸を竿にかけ(ねがひの糸

些とも涼しくならないのは、場所がわるいのだらう。さすがに虫の聲などは聞えた。八日にお還りになるので、今夜七夕祭などをするが、いつもより星が近くに見えるのは、場所が狭いせいだらう。

宰相中將齊信が、宣方の中將と一緒にお上りになつたから、皆な(房)が出て、お咄などして居る時、ついてもなく清「明日はどんな詩をお吟じになりませう」といつたら、一寸考へてすぐ、宰相「人間の四月を」とお答へになつたのは、誠におもしろい。前の事を覚えて居て言ふことは、おもしろいけれども、女とちがつて、男は、自分の詠んだ歌でも、うろ覚えなものなのに、

全く感心した。中の人も(御簾の)外の人も、何だか分らなさうだつたのは、もつともだ。

この三月の晦日に、細殿の一の口に、殿上人が多勢立つて居たのが、何時の間にか、段々減つて、頭中將(齊)と源中將(方)と、六位が一人残つて種々な咄をし、經を誦たり、歌を歌つたりして居る中に「(あ)すつかり明けてしまつた。歸らう」とて、「露は別の涙なるべし」といふ事を、頭中將が吟じ出したさつたら、源中將も一しよに面白く誦じなかつた。清「大層手廻しよいよ七夕ですこと」といつたら、ひどく悔しがつて、頭「曉の別の事を、ひよいと思ひ出したから、言つて、やり

此のやよひつひもり

といふ)又槐の葉に文字を記して水に流しなすと○例より 清涼殿その他の殿舎にてなすよりは、天に近く思はるゝの意。

宰相中將(齊)宣方中將と参り給るに、人々出て物など言に、序次も無く、清「明日は如何なる詩をか」と言に、些「思ひ廻し、滞も無く、齊「人間の四月をこそは」と答へ給る、甚う興くこそ。過たる事なれど心得て言は、興き中にも、女房などこそ、然様の失念は爲ね、男は然もあらず、詠たる歌をだに生記憶なるを、實に興し。内なる人も外なる人も、心得ずと思たるぞ、道理なるや。

宣方 左大臣源重信の次男○明日は この詞ありて答へに「人間の四月」とあるを見れば三月の晦日の事を記せるなり、四月は道隆薨去の追憶深き月なり○人間の四

月、この頃人々の愛誦せる白氏文集に「人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無處所、不知轉入此中來」云々と追憶に適合したる詩を答へたる即妙なり。

此の三月晦日、廊の一の口に、殿上人數多立りしを、漸う入り失などして、只頭中將(齊)、源中將(方)六位一人残つて、万の事言ひ、經誦み、歌、歌ひなどするに、明け果ぬなり。歸なんとて、齊「露は別の涙なるべし」と言ふ事を、頭中將打ち出し給れば、源中將(方)、諸共に甚興う誦じたるに、清「急たる七夕かな」と言を、甚う憾がりて、齊「曉の別の筋の、偶と覺つる隨に言て、佗しうもある事かな。惣て此の邊にては、斯る事思ひ廻さず言は、口惜きぞかし」など言て、余り明くなりしかば、齊「葛城の神、今ぞ術なき」とて、分て在にしを、七夕の折、此の事を言ひ出ばやと思しかど、宰相に成り給にしかば、必しも如何でかは、其の程に見付などもせん。文書で主殿可して遣など思し程に、七

損つた。一たいこの邊では、かういふ事は、よつほど考へて言はないと、しくじる」など、言て(居る中に)余り明るくなつたので、頭「葛城の神は、もうだめだ」と露を分けて歸りなかつたのを、七夕の時に言ひ出さうと思つたけれど、宰相になりなかつたから、何も急ぐ事ではない、その中きつと出會すだらう。でも、いつそ、手紙にして主殿司に持たせてやらうかなど、考へて居る中に、七日に参内なかつたから、嬉くて、あの晩の事を言ひ出したら、きつとお分りになるだらう。でも、突然で、何だつけなど、不審なやつたら、言つて上げやうなどと、散々考へて、言つたら、些とも、まごつかず、すぐに御返事なかつたには、ほんとう

日に参り給りしかば、嬉くて、其の夜の事など言ひ出ば、心もぞ得給ふ。漫に偶然言たらば、奇しなどや打ち傾き給ん。然ば其には、有し事言んとてなるに、露遲滞で答へ給りしかば、實に甚う興しかりき。日頃疾と思ひ侍しに、我が心ながら好事しと覺しに、如何で然將た、思ひ設たる如に宣ひけん。諸共に憾がり言し源中將(方)は、思も寄で居たるに、齊往し曉の詞答めらるゝは知ぬか」と宣ふにぞ、宣實に實に」と笑める、わろしかし。人と物いふを基になして、近う語らひなどしつるをば、「手ゆるしてけり」「けちさしつ」など言ひ、男は「手受ん」などいふ事を、人には知せず、此の君(齊)と心得て言を、何事ぞ、何事ぞと源中將(方)は添ひ付て問ど、言ねば、彼の君(方)に「仍是れ宣へ」と怨られて、親子中なれば聞せてけり。甚敢なく近う成ぬるをば、「押し毀ちの程ぞ」など言に、我も知にけると、疾か知れんとて、特と呼び出て、宣基盤侍りや。魔も打んと思は如何。手は許し給んや。

に感心してしまつた。月來、早く言はうと、一生懸命覺えて待つて居るのも、自分ながら随分物好きな骨折だと思つたのに、どうしてあんなに待ち設けたやうに、被仰れたんだらう。一緒に悔しがつて、あんなに言つた中將(源)さんは氣づかずに居なざるのを、齊あの、そら、曉の詞をたしなめられた事」と被仰つたんで、宣「あゝ、さうか」とお笑ひなまつた。このお人は頭が悪い。男子と咄をするのを、基の詞(隠語)にして、親しく言ひ交すのを、「手許してけり。」「結さした」など、言ひ、男は、「手受をしやう」など、いふのを、誰にも知せず、二人の中だけの隠語にして居たのを、宣「何の事だ、何

頭中將と同一基なり。勿思し分そ」と言に、清然のみあらば、定石なくや」と答しを、彼の君(齊)に語り聞ければ、齊嬉しく言たるよ」と喜び給し。仍過たる事忘ぬ人は、甚興し。宰相に成り給しを、帝の御前にて、清詩を甚興う誦し侍しものを、「蕭會稽の古廟をも過にし」なども誰か言ひ侍んとする。暫時ならでも侍へかし。口惜きに「など申しかば、甚う笑せ給て、帝「然なん言とて、爲じかし」など、仰られしも可笑し。然ど成り給にしかば、誠に淋々しかりしに、源中將(方)劣すと思て趣致立ち歩くに、宰相中將(齊)の御上を言ひ出て清「未だ三十の期に及ず」といふ詩を、他人には似ず興う誦し給ふ」など言ば、宣「何どか其に劣ん。勝りてこそ爲め」とて詠に、清「更に悪くもあらず」と言ば、宣「佗しの事や。如何で彼が如に誦せで」など宣ふ。清「三十の期といふ所なん、惣て甚う愛嬌付きたりし」など言ば、憾がりて笑ひ歩くに、陣に着き給りける折に、分て呼び出て、宣「斯なん言ふ。仍其處教

の事だ」と源中將(宣)が追ひ回してききたがるけれども、言はなかつたら、あの(齊)に、「なぜ隠すのです、是非聞かせて」とせがまれて、仲よしの事だから聞かせてしまった。よせばよいのに。逢ふ日が間近になつたのを、「おしこぼちの時だ」などいふと、自分も知つて居るといふ事を早く知らせやうと思つて、わざ／＼(私を)呼び出して、宣「基盤がありますか。私も打ちたいと思ひますがいかゞでせう。手をお許しなさるか。頭中將と同じ位の基盤です。御同様にどうか」と言ふから清「そんなに、彼方にも此方にもは、定目がないではありませんか」と返事をした。あの方(齊)に咄したら、齊「甘い事を言つた」とお喜びになつた。や

へ給へ」と言ければ、笑て教けるも知ぬに、局の許にて、甚く巧く似せて詠に、奇くて、清「此は誰ぞ」と問ば、笑聲になりて、宣「甚き事聞ん。斯う斯う、昨日陣に着たりしに問ひ問たるに、先づ似たるなんめり。誰ぞ」と、憎からぬ氣色にて問ひ給ふは」と言ふも、特と然習ひ給けん可笑ければ、是だに聞ば、出て物など言ふを、宣「宰相中將(齊)の徳見る事、其方に向て拜むべし」など言ふ。下に在ながら、「上に」など言するに、是を打ち出れば、「實に在り」など言ふ。御前に「斯く」など申ば、笑せ給ふ。内裏の御物忌なる日、右近曹官光何とかやいふ者して、墨紙に書て越せたるを見れば、宣「參せんとするを、今日は御物忌にてなん。『三十の期に及ず』は如何」と言たれば、返事に、清「其の期は過ぬらん。朱買臣が妻を教けん年にはしも」と書て遣たりしを、又憾がりて、主上の御前にも奏しければ、宮の御方に渡せ給て、宣「如何で斯る事は知しぞ。『四十九に成ける年こそ、然は誠めけれ』とて、

つばり前の事を忘れない人は、誠にもしろい。

宰相になりなさる時分に、主上の御前で清「詩を大變おもしろく吟じましたものを『蕭會稽の古廟を過ぎし』なども、もう外に吟じ人は御坐いません。せめて、もう些との間、これまで通りで、お出になればよい」と申したらば、大層お笑ひになつて、帝「(清少が)さう言ふなら、宰相には、しないで置かうか」と、被仰つたのも、おもしろい。(でも)とう／＼おなりなされたから、全くつまらないのに、源中將(宣)が、まけない氣になつて、えらぶつて歩くから、宰相中將(齊)の事を言ひ出して、清「未だ三十の期に及ばず」といふ詩を、人とはちがつて、おもしろく

「宣方は、『佗しう言れにたり』と言めるわ」と笑せ給しこそ、物狂しかりける君かなと覺しか。

この前の條と同じなり○細殿の一口 弘徽殿の細殿なるべしその第一の入口なり二の口、三の口などありて出入する處○露は別れの 菅原道真の菅家文章に「七月七日代三午女惜晩更、各分二字應制」と題して、「年不三再秋夜五更、料知 靈配曉來情、露應三別 涙珠空落、雲是殘粧未成」云々の詩あるを、ふと言ひしなり○かづらきの神 形の醜きを耻ぢ、夜のみ田で、石橋を渡せしといふ傳説あるをいへり○宰相に 頭中將より昇進せしなり、藏人頭の如く宮中に日勤はなきなり「なり給ひにしかば」の下に「日毎には殿上に出られぬ」の意こもりたり、(齊信が頭より宰相になりしは長徳二年四月廿四日)○打かたぶき 首をかして案ずるさまなり○思ひ侍りし これにては人にいふ詞となる「思ひし」にてよろしかるべし、誤寫にもや○近う語らひ 男女の接近したるを隠語にていふなり「手ゆるす」は基にていふ詞○けちさしつ 園基に駄目を詰むるをいふ詞、終局に近き時のわざなれば、男女の終に接近し了りし事にいひしなるべし。誠に今の世の「モガ」にもあるかな○手うけむ 女の方にて男に許すを「手ゆるす」といふに對して男の方にては「手受けん」といふなるべし○おしこぼち 園基の石を雙方にて取り片づくるをいふ。終局のわざなれば男女のいよ／＼逢ふ時にたとへいへり、「あへなく」は「とう／＼」な ○いつしか 「はやく」なり○さだめ 園基にいふ定石(定目)なり節操を「さだめ」といふにかけたなり○せう會稽の云々 本朝文粹の大江朝綱の交友序に「蕭會稽之過古廟一記 結異代之友、張僕射之重、新才二推爲忘年之友」蕭會稽は梁の會稽の長吏、尤をいふ。都を巡りて吳の季札の廟に至りこれを祀りて

お吟じになつた」といふと、宣「まける
ものですか、あれより上手に吟じて見
ませう」と吟じるので、清「まあ聞い
て居られる」と言ふと、宣「あゝ〜
情ない。何でも、あれのやうに吟じな
くちやあ」など、言ひなされる。清「三
十の期といふ處が、たまらなくよかつ
た」など、言ふと、悔しがつて咄して
は、笑ひ歩く中に、陣の座に着きなさ
つた時、わざ／＼宰相(齊)を呼出して、
宣「清少が斯んな事を言ふ。その處
を一寸教へて」と言つたので、笑つて

教へなかつたといふ事を、此方では知らないのに、部屋の處へ来て、すつかり似せて吟じるので、不思議に思つて、
清「どなた？」ときくと、笑ひ聲で宣「白状しますよ。かう／＼で、昨日宰相が陣に着きなかつた時、きいたんで、や
つと似たと見える。どなた？とやさしくお聞きになる處で見ると」と言ふ。わざ／＼そんなに、習ひなかつたのが可笑
いから、それを聞くと、出て咄したりすると、宣「宰相中將の有がたい事は。あつちを向いて拜まう」など、いふ。
局（やま）に居ても、「お上に」など、逢ひたくない人の時は言はせるのだけれども、それを吟じなされると、「ほんとうは居

古人に交り結びたるをいふ。次句は張(氏)僕射(官名)が新き才人を重じて忘年
の交り(孔融が五十才にして二十才の禰衡と交りし故事)をなせし事なり○しはし
ならでも かくては「しはしならで永く」の意となる、「しはしなりとも」ならば
「今しばらくにても」にて意通ず○なざじかし これも、「なすまい」の意となる。
「なざじか」ならば「なすまいか」にて意通ず、下の「し」文字を強めの「し」と見るも
無理なり、衍文なるべし○いまだ三十の期に及ばず 本朝文粹に源英明の「見三二
毛」の詩に、「顔回周賢者、未至三十三、潘岳骨名士、早著秋興詩、彼皆少於我、
可喜始見運」とあるをいへり、英明は三十五歳にして始めて白髮の生ぜざるを
見、顔回は賢者なれども三十歳にして死し、潘岳は美少年なれども三十二才にして白
髮を見し、それよりおそき自身を喜ぶの意○習ひ給ひけん この下に「が」の意あ
り○さうくわん 右近衛の四等官なる將曹をいふ、主典を音便にていふなり、いづ
れの官も皆カミ、スケ、ジヨウ、サクワンなり將、佐、尉、主典、守、介、様、
目（サクワン）の如く、女官ならば尙、侍、典、侍、掌、侍、女嬪(サクワンに當るべし)
の如し。

らつしやいます」など、取次の者が言ひ直すのを、宮様にお咄し申したら、お笑ひになつた。

禁中の御物忌の日に、右近のさうくわん（光何と）かといふ者に、疊紙に書いたのを、持たせてよこしたのを見たら、宣「参
らうと思ふが、今日は御物忌で(参れません)」三十の期に及ばず」はどうです、甘いものでせう」と言つてあつたか
ら、返事に、清「それはもう過ぎたでせう。朱買臣が妻君を教へたお年なんぞせう」と書いてやつたら、又口悔がつて、
上様にも申上げたらしい。宮様の處へお出でになつて 主上「清少は、どうして、こんな事まで知つて居るだらう。『朱
買臣は四十九になつた年に、妻君を教訓したんだのに、ひどい事を言はれた』とこぼして居た」とお笑ひになつた。そ
んな事まで申上げるとは、氣狂ひじみた人だと思つた。

弘徽殿といふのは、閑院左大將の女御
の事だ。その方の處に、うちふしとい
ふ者の女で、左京といつて御奉公して
居たのを、源中將(方宣)が、親しくして
愛して居るなど、皆なが評判して笑
つて居た時分、宮様が職へお出ましに
なつた處へ上つて、源「時々、御宿
直を致す筈で御坐いますが、女房が余
り無愛想なので、ついお無沙汰を致し

弘徽殿とは、閑院左大將の女御(子義)とぞ聞る、其の御方に、うち
ふしといふ者の女、左京とて侍けるを、源中將(方宣)語ひて思
ふなど、人々笑ふ頃、宮(子定)の職に在いに参りて、宣「時々、御
宿直など仕う奉るべけれど、然べき様に女房など待遇し給ねば、
甚宮仕疎畧に候ふ。宿直所をだに賜りたらんは、甚う忠實に候
なん」など言ひ居給つれば、人々「實に」など言ふ程に、清「實に
人は、打ち臥し休む所のあるこそ好けれ。然る邊には繁く参り給

ます。宿直所さへ下さいましたら、一生懸命御奉公を致しますが」など言ひなさるので、皆なが、「ほんに御尤もだ」など言ふ。私も、「ほんに誰でも、打臥し休む所が必要だ。(だから)それのある所へは繁々お出でなさるけれども、此方へは滅多とお出でなさらない」と言つたら、「もう何にも申ません。味方だと思つて居るのに、人の噂を事實の如に被仰る」など、むきになつて怨みなさる。清「まあ、へんだ。何を申上げて？。何にもお氣に障るやうな事は、言はないつもりだが」などいひながら、傍の人をつくと、女房「何でもない事をお怒りなさるには、何か仔細があるに違ひない」と、きやつくと笑ふので、宣「これも、

なるものを」と應答たりとて、宣「惣て物聞じ。方人と頼み聞れば、人の言ひ古したる如に取り做し給ふ」など甚う真面目立て怨み給ふ。清「噫奇し。如何なる事をか聞つる。更に聞き留め給ふ事なし」など言ふ。傍なる人を引き動せば、女房「然べき事もなきを、憤り出で給ふ理由こそあらめ」とて、大聲に笑に、宣「是も彼の言せ給ならん」とて、甚不快と思ひ。清「更に然様の事をなん言ひ侍ぬ。人の言だに憎きものを」と言て、引き入にしかば、後にも仍「宣人に耻がましき事言ひ付たる」と恨て、宣「殿上人の、笑ふとて、言ひ出たるなり」と宣へば、清「然ては一人を恨み給べくもあらざんめる、奇し」など言ば、その後は絶て止み給にけり。

閑院左大將の女御 閑院左大將藤原公季の女にて一條帝の女御義子をいふ。長徳二年入内、長保二年從三位、寛弘二年從二位となる。万壽三年尼となり天喜元年閏七月薨す年八十〇うちふし 婦人の名なり(空五倍子か)岩越、檜垣、宮木などの類にて下衆女の呼び名なり〇笑ふ 源中將宣方は醍醐天皇の曾孫、左大臣重信の子なるに下衆女の娘に近付きたるを笑ふなり〇御宿直など 中宮に縁ある人は宿直等をなすなり宣方の妹は中宮の御弟隆家の妻なり〇もてなし給はねば まことは打臥の方

あなたが言はせるんだらう」と、腹を立てゝ居る。清「決してそんな事は申しません。人が言ふのさへ憎らしい位ですもの」と、言つて引込んでしまつたけれども、いつまでも、宣「見ともない事を、いひつけた」と怨んで、宣「(あれは、)殿上人が、(皆なに)笑はせやうと、言ひ出した事だ。(事實ではない)」と言ひなさるから、清「それなら、(私)一人を、お恨みなさるには當らないのに、ひどい」と言つたら、その後、(左京と切れてしまひなかつた。

に通ふにより、なたへは宿直もせぬを、女房のおあしらひに、かこつくるなり〇人女房たちなり。

昔憶はれて、そのくせ役に立たないもの(は)、

縷網縁の疊が古くなつて、(縁の切地に)節が出たの。唐繪の屏風が汚れて、表の損じたの、藤のかまつた松の木の枯れたの。地摺の裳の、縹返つたの。繪かきが、首になつたの。几帳の帷の、古びたの。帽額の切の、きれてなくなつたの。七尺の鬘の毛が、赤くなつたの。蒲萄染の織物の色の、白ばけたの。道樂者

昔憶えて不用なるもの

昔憶て不用なるもの、

縷網縁の疊の古て節出で來たる。唐繪の屏風の黒み、表損れたる。藤倚りたる松の木枯たる。地摺の裳の花返りたる。繪師の眼盲き。帳の帷子の古ぬる。帽額の無くなりぬる。七尺の鬘の赤く成たる。蒲萄染の織物の灰返りたる。好色の老い類れたる。趣致き家の木立焼たる。池など依然あれど、浮萍水草茂りて。うげん 縷網の意、染色の名なり、諸色の間條の色と色との界を「ばかし」に染めたるもの。縷網の最上品なり〇ふりて 一本「破れて」〇黒み 流布本、この字なし、ある方よければ一本に從ふ〇からゑ 唐人の書きたる繪。又それのやうにかき

の、老い朽ちたの。しやれた家の、庭木の
焼けたの。池などは、昔のまゝながら、
浮草や水草が、一杯生へたまゝなの。
はりていたみ易ければ遊には切れ損じて殆どなくなるといふ。七尺のかづら 源氏産生の巻に末摘花が自身の髪を落したるをとりあ
つめて、かづらにしたるが九尺余りにて、いと美しとあり(かづらは今のかもどなり)かづらの髪を古びて赤くなる事。今もある事な
り、折角長くても赤くなりては用に立たぬなり○えびぞめのおりもの 経紅に、緑紫の糸にておりたるもの(ぶだう色)○灰返り
古くなりて表白みたるさま。

頼もしげのないもの(は)。

気が短くて薄情なの。聲が減多と夜來
ないの。六位の藏人の白髪頭。出たら
めを言ふ人間が、生意氣に、頼もしさ
うな顔つきをして、人の大事を引うけ
たの。はじめに勝つ双六。六七十から
八十位の年よりが、永く煩つて居るの。
風が吹くのに、帆を上げた船(も、素
人眼には、危なつかしい)。

たる繪。珍重したるなるべし、大和繪に對していふ○地すり 白絹に縹色にて、もや
うをかきたるをいふ。后宮のは桐に風嵐など○花返り 花色のもやうの縹めたるこ
と○几帳のかたびら 几帳、帳台等は元來貴族の用うるものなるに、そのかたびら
の古びたるは見るしかるべし○もかう みすの上に垂れたる横長き、れ、物にさ
たる繪。珍重したるなるべし、大和繪に對していふ○地すり 白絹に縹色にて、もや
うをかきたるをいふ。后宮のは桐に風嵐など○花返り 花色のもやうの縹めたるこ
と○几帳のかたびら 几帳、帳台等は元來貴族の用うるものなるに、そのかたびら
の古びたるは見るしかるべし○もかう みすの上に垂れたる横長き、れ、物にさ

頼もしげなきもの、

心短くて人忘れ勝なる。聲の夜離勝なる。六位の頭白き。虚言
する人の、有繋に人の事爲し顔に、大事領承たる。一番に勝つ双
六。六七八十なる人の心地悪うして、日來に成ぬる。風吹くに
帆上たる船。

心みじかくて 一本「心みじかくて人忘れ勝なる聲の夜がれ勝ちなる」と續きあれ
ど、人忘れ勝の性質ならずとも、夜がれ勝なる聲は頼もしげなければ、これは流布本
の別々なるをとれり、「心みじかく」は思ひ直す事なく腹立ち易きなり、人わすれ勝
は情薄きさま○夜がれ かれは「離れ」なり來ぬ夜をいふ○頭白き 若くば、圓司
に昇進するすべあるなれども、老いては、そのたのみもなきなり。

引かへて、法華經を不斷經(に讀むの
は、頼もしげ)。

近くて遠いもの(は)。

禁裏の近所の祭。仲のわるい兄弟、親
類の中。鞍馬の九十九折といふ道。十
二月の晦日(と)、正月一日との間。

經は不斷經。

不斷經 僧侶を請じて晝夜間斷なく、よまするなり。

近くて遠きもの、

宮の近傍の祭。思ぬ兄弟、親族の中。鞍馬の九曲といふ道。十二
月の晦日、正月朔日の間。

宮のほとり 禁裏近くに祭ありても、宮女は心のまゝに見に出でられれば遠きに同
じかるべし○つゞら折 幾曲にもなり居る道、すぐ上に見えてもまはりゆくは遠
きなり。

遠くて近いもの(は)。

極樂。船の道。男女の中。

遠くて近きもの、

極樂。船の道。男女の中。

極樂 阿彌陀經に「從是西方過十万億土、有世界名曰極樂、其土有佛號阿彌
陀」とあり又觀無量壽經「阿彌陀佛去此不遠」とありて佛を念すれば直ちに到り
得るといへり○船のみち 遠き路も船にて一直線にゆけば近きなり○男女の中 昔
も今もある事なり。

經は不斷經 近くて遠きもの

遠くて近きもの

井戸は、堀かねの井(といふ名が、おもしろい)。走井は、(方々にあるけれど)逢阪にあるのが、おもしろい。山の井(は)、何だつて、さう浅い例に引ばられ出したのだらう。飛鳥井は「みもひも寒し」と、譽めてあるのが、おもしろい。玉の井。少將の井。櫻井。后町の井。千ぐわんの井(など、おもしろい)。

の山より湧きいで、寒暑に増減なく甘味なれば、夏は往來の人、渴を渡ぐの便とすといふ、あふ阪の關の清水に影見えて、今や曳くらん望月の駒(貫之)○山の井 万葉集に葛城王を陸奥へ遣はされし時、國司のしざまおろそかなりとて王の御氣色あしかりしかば采女なりける女、土器とりて「あさか山影さへ見ゆる山の井の、浅き心はわが思はなくに」と、とりなせし事あるにより、後世山の井といへば淺きために歌によむ例となりたり「さしも」の上に「何故」の意こもりたり○飛鳥井 大和飛鳥村飛鳥坐神社の社前にあり。催馬樂に「飛鳥井に宿りはすべし、おけ、かげもよし、みもひも、うまし」(さむし、とも)みまくさもよし「おけ」は馬をそこにつなぐ事。みもひは水を容る、器の盆より轉じて水の事を御もひといへるにて水の清冽なるをたへ御珠もよしといへるなり)○玉の井 山城水無村井堤里の中なる玉井寺の庭中にあり○少將井 烏丸通、大炊御門の南、惟喬親王の家にあり井といふ○櫻井 大和櫻井村にあり○后町の井 常樂殿の異名を后町といふ、そこより承香殿へゆく廊のわきにある井。清澄なる水のよし○せんぐわんの井 一本には「千ぐわんの井」とあり、他本「ちぬきの井」、在處不明。

堀かねの井。走井は、逢阪なるが興しき。山の井、然しも淺き例に成り初けん。飛鳥井、水も氷も寒しと譽たるこそ興しけれ。玉の井。少將井。櫻井。后町井。千貫井。

ほりかねの井 武藏にあり。貫之「はるん」と思ひこそやれ武藏野の、ほりかねの井に野寺ありてふ」又、後に俊成卿「むさしの、堀かねの井もあるものを、うれしく水の近づきにけり」などあり、貫之の歌などによりて名高かりしなるべし○走井 今いふ吹き井戸なり○あふ阪なる 近江の逢阪にある、いはゆる關の清水なり。後ろ

受領は、

紀伊守、和泉(の守)がよ。

受領は、

紀伊守、和泉。

受領 受けをさむる事。國守をいふ、但し守、遙任にて京にありて任國に往かね時は權守受領となり、中下國にて權守なく國守遙任又は兼任なる時は介、受領となる、(何の守といふ名義のみにて都に在りて任國へは赴かねが多かりしなり)○紀伊守 紀伊國は古名「木國」なり「伊」はそへていふ語。紀伊の和歌浦、和泉の高師濱など、歌枕に知りたる風光明媚の地を好もしく思ひしなるべし。

宿官の權守は、

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

宿官の權守は、

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

やどりのつかさ 宿官は職原抄に「殿上六位藏人叙位時預け爵者、即任權守」とありて六位藏人その他(外記、史、式部丞、民部丞、檢非違使判官等)の叙爵して受領となるまで、(巡の來る間)まづ諸國の守介の權官に任するをいふ○下野 この國も以下列記せる國も皆上國なり。清少の、何故この國々を撰みしか知るに由なし。

大夫は

式部大夫。左衛門大夫。史大夫などがよい。六位の藏人は、大夫を望むべきでもない。とても、そんな處は、及ばぬ望みだ。叙爵されて、何の大夫とか權守

大夫は、

式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人、思ひ懸べき事にもあらず。叙爵得て、何の大夫權守などいふ人の、板屋狭き家持りて、又小檜垣など新くし、車宿

受領は やどりのつかさの 大夫は

とかいふ人が、板屋根などの小さい家を持つて、それに小檜垣などを新規につけ、車宿りに車をこくと入れ、狭い庭先に木をふやして、牛をそこに繋がせ、草などやらせて居るのが、いや味だ。庭をやたらに掃除して、紫草の紐で伊豫簾をかけ廻し、布障子など張つて住んで、夜になると、「門のしまりをしつかりしろ」など、言ひつけて居るのは、もう出世のゆきどまりらしくていやだ。親だとか舅だとかの家ならば申分なし、でなくとも、をぢとか兄とかのあきがらの家もない人は、よん所なく懇意な仲よしの受領が、任國へ往つて、あき家になつて居るとか、でなければ、女院とか宮腹とかで、家を幾つも持つて居る方を借りて住んだりし

に車引き立て、前近く木多くして、牛繫せて草など飼ふところ、甚憎けれ。庭甚清げにて、紫草して、伊豫簾掛け渡して、布障子張て住たる。夜は「門強く鎖せ」など、事行ひたる。甚う生先なく、厭し。親の家、舅は勿論なり、伯父兄などの住ぬ家、其の然べき人の無らんは、自然。睦しう打ち知たる受領の、國へ行て空虚なる。然すば女院、宮腹などの屋敷多あるに、官待ち出て後、疾と好き所探ね出て、住たるこそ好けれ。

式部大夫 式部省は「ノリノツカサ」といひ、卿を親王の任とす、國家の典章禮儀を統べ、六位以下の文官の奏任奏授の事を掌る。大丞正六位下なれども五位に叙せられて、なほ丞たる者を式部大夫といふ。「タユフ」は五位の稱なり「ダイア」とよむは長官の義、○左衛門大夫 これも大尉は從六位下の官たるを五位に叙せらるればかくいふ○史大夫 太政官の文書勘例を掌り、諸司諸國の庶務を取扱ふものに左右大小史八人あり左右大史は正六位上の官なるが五位に叙せらるればかくいふ○思ひかくべきことにもあらず 六位なれども藏人は殿上を許され高貴の御身近く宮中に奉仕するを、五位に昇進すれば、現職を去り殿上を下る、例なれば望む事にてはあるまじとなり○檜垣 檜を深くわりたるを網代に組みて張りたる垣○前ちかく 家の前近くなり○紫草 紫色の草をつけて○布障子 布張の障子なり障子の義にて板にても布張にてもいふ、(今は紙にて張りたる明り障子ののみいふこと

て、役についてから、ゆつくりよい家を探して住むのがよい。

女の一人住みの家などは、たゞひどく荒れて、築地などもまんぞくでなく、池には水草が茂り、庭なども草ぼうぼうといふほどではなくとも、所々に、砂子の中から青い草が見えたりして、淋しげに荒れた處に、趣きがある。いやに氣を利かせて、手入れをよくし、門を頑丈にしたりしてきちんとしてあるのは、却てひどくいやなものだ。

禁中の女房の里などでも、兩親揃つて居るのは誠によい。人の出入が多く、奥の方にいろ／＼の聲がしたり、馬の音がしたりして喧しいけれど、(それが

となりたれども)○門強くさせ 成上りて盜賊の用心厳しきさまなり○事行ひ 家に命令するさま。

女の獨住む家などは、唯甚う荒て、築土なども全からず。池などのある所は、水草居、庭などもいと、蓬茂りなどこそ爲ねども、所々砂の中より青き草見え、淋し氣なるこそ趣致なれ。もの賢氣に無難に修理して、門甚う固め、際々しきは、甚可厭覺れ。

宮仕人の里なども、親ども二人あるは好し。人繁く出で入り、奥の方に、數多々々の聲多く聞え、馬の音して騒きまであれど、悲し。然ど、忍ても、現れても、自然、「出で給けるを知で」とも、「又何時か參り給ふ」なども言に差し覗く。懸想たる人は、「如何

よい。引かへ、両親のないのは悲しい。内緒で訪ねて来る男でも、表向き来る男でも、男「いつお退りになつたか存じませんで」とか、「今度はいつお上りになりますか」などと言ひに、一寸尋ねる。懸想人でもあると、「まあお入りなさい」と門をあけたりするのを、家主がうるさうに、けんのおんさうに、夜中まで来ずとも思ふらしい様子が、誠に憎い。家主「大門はしめたか」など、家の者にきかせるると門守「まだお客が居られますから」などと、催促らしく返事をする、家主「お客が歸つたら、早く門をしめる。この頃は、盗人が非常に多い」など、言つて居るのを氣持わるく聞いて居る人もある。その客の供の者たちが、しよつち

は」と門開などするを、可厭騒う危げに、夜半までなど思たる氣色甚憎し。家主「大御門は鎖つや」など問すれば、門守「未だ人の在れば」など生防し氣に思て答るに、家主「人出で給なば、疾く鎖せ。此の頃は盗人甚多り」など言たる甚煩しう、打ち聞く人だにあり。此の人の供なる者們、此の客今や出ると絶す差し覗て、氣色見る者們を笑べかんめり、眞似打するも聞ては、如何に甚ど厳しう言ひ答ん。甚色に出て言ぬも、思ふ心なき人は、必來などやする。然ど、剛なる方は、「夜更ぬ。御門も危かんなる」と言て去るもあり。實正に、志、殊なる人は、「疾」など數度追ひ遣はるれど、仍居明せば、度々歩くに、明ぬべき氣色を珍に思て、門守「甚き御門を、今宵らいさうと開け擴て」と聞え言て、味氣なく、曉にぞ鎖なる。如何憎き。親添ぬるは仍こそあれ。況て實ならぬは、如何に思らんとさへ憚しうて。兄の家なども、實に聞には然ぞあらん。夜半曉ともなく、門甚嚴重もなく、何の宮、内

いては、客が歸るかと窺ふ家の者の様子を、笑つて居るらしい。口眞似などするのを、家主の方できいたら余計に、嘸やかましくがみ／＼言ふだらう。氣色にこそ見せずとも、よく／＼な懸想人でよもなければ、夜中になど來はしない。でも、一通りのつき合の人は、「夜が更けた。御門の用心がわるいでせう」と、歸つてしまふのもある。特別の關係の人は、「もうお歸りなされ」など幾度も追出されても、剛情に曉方まで居ると、門番が、幾度も覗きに來て、夜が明けかゝるのに、珍しい長居の客だと思つて門守「大事な御門を、今夜はまあ明けつ放しにしてしまつた」と聞こえよがしに言ひながら、曉方しめて居る。ほんとうに憎らしい。親が居たら嘸心配するだらう。まして繼母でもあつたら何と思ふだらうと、氣まりがわるくて。兄の家などでも、やつぱり居にくからう。(それとは、ちがひ、宮中などでは)夜中でも曉でも、門などの制限がなく、どの宮様だとか、殿上人などが、訪ねて來たりして、格子なども上げたまんま、冬の夜を語り明して、歸つたあとまで、じつと見出して居るのがおもしろい。在明などは一層おもしろい。

裏邊の殿們なる人の、出會などして、格子なども開ながら、冬の夜を居明して、人の出ぬる後も、見出したるこそ興しけれ。有明などは、況て興し。笛など吹て出ぬるを、我は急ても寢れず人の上なども言ひ、歌など語り聞く隨に、寢入ぬるこそ興しけれ。

かなし この上に「無きは」の意あるべし「とがもなし」とある書もあれど、この方よろしかるべし〇されど なくともよき句なり、この句を生かすには上の「悲し」を他本の如く「とがなし」として、されどの下に「親のなきは」と入れて見るべきなり、いづれにてもよろしかるべし〇ぬすびと この頃は盜賊横行し禁中にまで入りて狼籍せるさま諸書に見ゆ、紫式部日記にも女房の衣をはがれ裸體にてふるへ居たる記事あり〇すくよかなる 單なる交はりの人をいふ〇らいさう 「亂散」などの和めたる言ひ方が、さらすば誤寫も交れるか、とにかく「あけひろげて」の意なり〇夜なか曉ともなく こゝよりは清少の願望理想を記せるなるべし。

笛など吹きながら歸つたのを、此方はすぐにも眠れず、友だちとその人たちの噂をしたり、歌の事を咄し合つたりしながら、いつか寝入つたのが、おもしろかつた。

雪が余まり積らず、薄すらと降つたのなどは、誠におもしろい。又、澤山降り積つた夕方から、端近の所で、氣の合つた二三人と、火桶のまはりで咄して居る中に、暗くなつた。火もともさないが、雪の光りで一たいに眞白く明るいので、火箸で灰をいちりながら、おもしろい事や、しやれた事を、咄し合つて居るのが面白い。宵も過ぎたらうと思ふ時分に、履の音が近く聞えるから、變だと思つてのぞいたら、かういふ時に、ひよつこりと来る人だつた。「今日の雪をどう御覽になつたかと思ひながら何だかぐづ／＼して、

雪の甚高くはあらで、薄らかに降たるなどは、甚こそ興しけれ。又雪の甚高く降り積たる夕暮より、端近う同じ趣味なる人二三人ばかり、火桶中に据て、物語などする程に、暗う成ぬれば、此方には火も燈さぬに、大方雪の光甚白う見たるに、火箸して灰など掻き弄て、哀なるも可笑きも言ひ合はる程に、宵も過ぎぬらんと思ふ程に、履の音近う聞れば、奇しと見出したるに、時々斯様の折、意なく見る人なりけり。今日の雪を如何にと思ひ聞ながら、何でふ事に障り、其處に暮しつるよしなど言ふ。「今日來ん人を」などやうの筋をぞ言らんかし。晝より有つる事どもを打ち初て、万の事を言ひ笑ひ、圓座差し出したれど、片方の足は、下ながらあるに、鐘の音の聞るまでに成ぬれど、内にも外にも言ふ

どこそこ暮してしまつて」など言ふ。「今日來む人を」などいふ故事を言ふらしい。晝間あつた事を初めとして、いろ／＼の事を咄しては笑ひ、圓坐を差し出したけれど、片足は地につけたまゝで、鐘の音が聞える時分まで、内からも外からも、咄が盡きない。しばらく明けの時分に、かへりかけて

「雪、何の山に滿てり」と吟じたのは、おもしろい事だつた。女ばかりだつたら、夜明しまでは、しなかつたらうに、いつよりも咄がはずんで、風流咄など、し合つたのがおもしろかつた。

村上の御代に、雪が非常に高く積つたのを、様器にお盛らせになり、梅の花

村上の御時

事どもは飽すぞ覺る。味爽の程に歸るとて、「雪何の山に滿り」と打ち誦じたるは、甚興しきものなり。女の限しては、然も得居明さざらましを、徒なるよりは、甚興しう、好たる有様などを言ひ合せたる。

今日來ん人を 拾遺集に平兼盛「山里は雪ふりつみて路もなし、今日來む人をあはれとは見む」(かういふ雪の日に尋ねて來る人を好きと思はう) ○わらうた 藁或は蒲、藁などの莖葉にて渦の如く圓く平たく組みたる褥 ○雪何の山にみどり 期詠集にある唐の謝觀の賦に、「曉入三梁王之苑 雪滿三群山、夜登三度公之樓 月明千里」とある「群山」を知り親に言はず故らに「何の山」といへるなり。

村上の御時、雪の甚高う降たりけるを、様器に盛せ給て、梅花を挿て、月甚明きに 村是に歌詠め。如何言べき」と、兵衛藏人に

をさして、月が非常に明るい晩に、「これに歌を詠め。何と言ふか」と兵衛藏人におやりになつたらば、兵衛雪月花の時」と申上げたので、大層御賞美なされた。村上「歌などよむよりも、斯ういふやうに。場合に合つた事をいふのが、中々六かしいものだ」と被仰つた。(又)同じ人(兵衛藏人)を御供で、誰も殿上に居ない時に、おたゝずみになつて居らつしやると、炭櫃から煙が立つたので、村「あれは何の煙か、見て参れ」と仰せになつたらば、見て歸つて来て、兵「わたつみのおきにこがるゝ物見れば、あまの釣してかへるなりけり」

(海の沖の方がこがれて居るものを何かと見ましたらば、あまが釣してかへるので御座いました)と申上げたのがおもしろかつた。蛙が炭櫃(圍爐裏)に飛び込んで焦げて居たのだつた。

給たりければ、兵「雪月花の時」と奏したりけるこそ、甚う愛させ給けれ。村「歌など詠んには普通なり。斯う折に合たる事なん言ひ難き」とこそ仰られけれ。同じ人を御供にて、殿上に人侍はざりける程、イませ在すに、炭櫃の煙の立ければ、村「彼は何の煙ぞ。見て来」と仰られければ、見て歸り参りて、
「大海の沖にこがるゝ物見れば、蟻の釣してかへるなりけり」と奏しけるこそ、興しけれ。蛙の飛び入て焦るゝなりけり。

機器 本様として作らしむる器なればいふといふ、物を盛る器の名。「しろかれの機器、瑠璃の御杯」など、つゞけいへり○兵衛の藏人 兵衛は呼名にて藏人は女藏人の略なり○雪月花の時 白氏文集の寄、殿協律といふ詩に「琴詩酒友皆拙、我、雪月花時最憶君」の句あるを御答へにせるなり○おき 沖に煙(起火の畧、灰中の炭)をかけ、「潜がるゝ」に「焦がるゝ」をかけ、「歸る」に「蛙」をかけたなり○蛙の飛び入りて終りに註解的に記せる處、巧なり。

御形の宣言が、五寸位の殿上童のたまらなく可愛らしいのを、こしらへて、みづらを結び、装束など美事に、「ともあきらのおほきみ」と名を書いて、さし上げたのを非常にお興じになつた。

御形宣言、五寸許なる殿上童の、甚愛しげなるを作て、角髪結ひ、装束など美しくして、名書て奉らせたりけるに、「ともあきらのおほきみ」と書たりけるをこそ、甚う爲させ給けれ。

みあれの宣言 「御あれ」は、賀茂祭神別 雷の生れまし、日はいふにより齋院といふべきを「みあれ」といふ、齋院宣言といふに同じ。「宣言」は中宮宣言、東宮宣言、などの如く最初、中宮、東宮に立てらるゝ宣言を傳達する女房に被らする名なれば、齋院任命の宣言をとり傳へたる、然るべき女房なるべし○みづら 上古の男子の髪を結び方の名にて頂の髪を左右に分け耳の上邊にて結べるもの○奉らせ 中宮になり○おほきみ 「王」をいふ。

始めて宮様に御奉公に上つた時分は、極りの悪い事だらけで、涙がこぼれさうなので、毎晚上つて三尺の御几帳の後ろの方に居ると、繪など取り出させてお見せになるけれども、手もさし出し得ないほど恥かしい。宮「これはかうなの、あれはあゝなの」と御説明下

みあれの宣言 宮に始めて参りたる頃

宮(定)に始て参りたる頃、物の耻き事数知ず、涙も落ぬべければ、夜々参りて、三尺の御几帳の後に侍ふに、繪など取り出で見せさせ給だに、手を得差し出まじう、理なし。宮「是は兎あり、彼は角り」など宣はするに、高坏に参りたる大殿油なれば、髪筋なども却々晝よりは顯證に見て、耻けれど、念じて見なとす。甚冷き頃なれば、差し出させ給る御手の僅に見るが、甚う艶たる薄

さるのを、高坏にのせた御あかりだから、髪筋などもかへつて晝よりは、よく見えて、極りがわるいけれども、我慢して拜見したりする。恐ろしく冷たい頃だから、少しもお出しにならないお手が、つや／＼と薄紅梅色なのを、堪らなくお美しいと思つて、初めての里心には、何とまあ、かういふ方も世には居らつしやるものかと驚いて、じつと拜見した。腕には早く局へと心がいく。宮「葛城の神も、まあもう少し」など被仰るから、せめて斜かひにでも御覽に入らうと、臥つて居たので、御格子もまだ上げない。女官が参つて、「これおあげ下さい」といふと、女房があげるのを、宮「お待ち」などと被仰るので、笑つて歸つた。

紅梅なるは、限なく愛たしと、見知りぬ里び心地には、如何は斯人こそ、世に在しけれど、驚るゝまでぞ目成り参する。曉には疾くなど急るゝ。宮「葛城の神も暫時」など仰らるゝを、如何で筋違ても御覽せられんとて、臥たれば、御格子もまゐらす。女官参りて、女官「これ放せ給へ」と言を、女房聞て、放つを、宮「待て」など仰らるれば、笑て歸ぬ。物など問せ給ひ、宣するに、久うなりぬれば、宮「下ま欲う成ぬらん。然は疾」とて、宮「夜さりは疾く」と仰らるゝ。膝行り歸るや遅きと、開け散したるに、雪甚興し。宮「今日は晝つ方参れ。雪に曇て顯露にもあるまじ」など、度々召ば、此の局主も、主「然のみや籠り居給らんとする。甚敢なきまで、御前許されたるは、思し召す様こそあらめ。思に違は憎きものぞ」と唯急しに出せば、我にもあらぬ心地すれば、参るも甚ぞ苦き。火焼屋の上に降り積たるも、珍う興し。御前近くは、例の炭櫃の火夥く熾して、其には特と人も居ず。宮は、沈の

何かお尋ねになつたり、仰せられたりするので、長くなつたら、宮「下りたくなつたらう。では早く」と被仰つて（そして）宮「夜は早くね」と被仰る。すべるやうに退るが早い、へやを明けひろげると、雪がたまらなくおもしろい。宮「今日は晝間参れ。雪で暗ぼいから、さうよくは見えぬよ」など、幾度でも御召しになるので、局あるじも「何だつて」そんなに引込で居なさいりたいの。不思議なほどお召になるのは、思召に叶つたのだらう。思ふやうにならなと憎いものだから」と、無茶苦茶にせき立てるので、逆上せ上つてしまつて、餘計に、上るのが骨だ。火焼屋の上に一抔積つて居るのも珍くおもしろい。御傍には、例の炭火を澤山

御火桶の梨繪したるに向て在す。上臈御扱ひし給ける隨に、近く侍ふ。次の間に長炭櫃に間なく居たる人々、唐衣着垂たる程、馴れ安易なるを見るも、美く、御文取り次ぎ、起居動作も體など憚し氣ならず、物言ひ笑々ふ。何の世にか、然様に交ひ成んと思さへぞ、憚しき。奥寄て三四人集て、繪など見るもあり。暫時ありて前高う追ふ聲すれば、女房「殿（道）参せ給なり」とて、散たる物ども取り遣りなどするに、奥に引き入て、有紫に床しきなりぬり、御几帳の綻より僅に見入たり。大納言殿（伊）の参せ給なりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映て美し。柱の許に居給て、大「昨日今日物忌にて侍れど、雪の甚く降て侍ば、不安きに」など宣ふ。宮「道も無しと思けるに、如何でか」とぞ、御答あんなる。打ち笑ひ給て、大「哀ともや御覽するとて」など宣ふ御有様、是よりは何事か勝ん。物語に甚う口に任せて言たる事ども、違ざんぬりと覺ゆ。宮（子）は、白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、

熾して、それには別に誰もあたらす。宮様は、沈の梨子繪をしたお火桶に對つて、お出でになる。上臈がおせわ申上げたまゝで、お傍に居た。お次で、長炭櫃にぎつしりあつて居た人たちが、唐衣を樂々と着垂して居るのも美しく、御文を取り次いだり、起たり居たりも窮屈さうでなく、咄したり笑つたりして居る。いつになつたらあゝいふ風に、御奉公が出来たらうと思ふだけでも氣がつかれる。奥の方に三四人居かたまつて、繪など見て居るのもある。

その中に、先を高く追ふ聲がすると、女房(殿)がお上りになつたのだ」と散かつたものを片付けたりするので奥の方に引込んで、それでも見たい氣

白き唐綾と奉りたる、御髪の被せ給るなど、繪に書たるをこそ、斯る事は見るに、現には未だ知ぬを、夢の心地とする。女房と物言ひ、戯れなどし給を、答「些」憚りとも思はらず、聞え返し、空言など宣ひ掛るを、争ひ論じなど聞るは、眼も綾に驚しきまで、何なく面ぞ赤むや。御菓子食りなどして、御前にも奉せ給ふ。大「御几帳の後なるは、誰ぞ」と問ひ給なるべし。女房「然ぞ」と申にこそあらめ、立て在するを、外へにやあらんと思に、甚近う居給て、物など宣ふ。未だ参ざりし時、聞き置き給ける事など宣ふ。大「實に然ありし」など宣ふに、御几帳隔て、他に見遣り奉るだに耻しかりつるを、甚驚しう差し向ひ聞たる心地、現とも覺す。行幸など見るに、車の方に、些見越せ給は、下簾引き正ひ、透影もやと扇を翳し隠す。仍甚我が心ながらも畏く、如何で立ち出しにぞと、汗流て甚きに、何事をか聞ん。偉き陰と捧たる扇をさへ取り給るに、振り被べき髪の醜さへ思に、惣て

はあるから、御几帳の綻びからちよい／＼覗く。やつぱり大納言殿(周)がお上りになつたのだつた。御直衣や、指貫の紫の色が、雪に引立つて美しい。柱の處にお坐りになつて、大「昨日今日は物忌で御座いましたが、雪が餘り澤山降りましたから、如何と存じまして」など被仰る。宮「道もなしと思つたのに、ようぞ」と御返事がある。お笑ひになつて大「あはれと思召て下さらうかと存じまして」など被仰る御様子で、これに勝るものはあるまい。物語に、一生懸命出来る限りの形容をしてあるのに、ちがはないのだらうと思はれる。宮様は、白い御召に、紅の唐綾を二つ、白い唐綾とお襲ねになつて居るのに、御髪がかゝつて居る御様子など、繪に書

宮に始めて参りたる頃

實に然る氣色や付てこそ見らめ。疾く立ち給へなど思ど、扇を手弄にして、伊「繪は誰が書たるぞ」など宣て、頓にも給ねば、袖を押し當て俯伏し居たるも、唐衣に、白粉附着て、班に成んかし。久う居給たりつるを、論なう苦しう思らんと、心得させ給るにや、宮「これ見給へ、是は誰が書たるぞ」と聞させ給を、嬉しと思に、大「賜て見侍ん」と申し給は、宮「仍爰へ」と宣はすれば、大「人を捉て立て侍ぬなり」と宣ふ。甚今向しう、身の程年には合す、傍痛し。人の草假字書たる草紙取り出て御覽す。大「誰がにかあらん。彼に見せさせ給へ。其ぞ世にある人の筆蹟は見知て侍ん」と、奇き事どもを、唯答させんと宣ふ。一所だにあるに、又前打ち追せて、同じ直衣の人參せ給て、是は今少し花やぎ、猿樂言など打し、譽め笑ひ興じ、我も某が、兎ある事、角る事など、殿上人の上など申すを聞ば、仍甚變化の者、天人などの下り來るにやと覺てしを、侍ひ馴れ、日來過れば、甚然しも無き事にこそ

いたのでこそ、かういふのは見たけれども、実際には初めてだから、夢のやうな気がする。女房に、戯言など被仰ると、氣まりわるさうにもなく口返しをしたり、(わざと)間ちがつた事を被仰ると、あらそつたりするのが、惘れる程で、思はず顔が赤くなる。御菓物を召上つたりして、宮様にもお上げになる。大「御几帳の後ろに居るのは、誰？」とおたづねになつたらしい。女房「誰それ」と申上げたらしく、立つてお出でになるのを、外へかと思つたら、近近とお坐りになつて、何か被仰る。まだ上らなかつた時分の噂などを被仰つて「大「ほんとうか」など被仰る。御几帳ごしに、遠くから見上げるのすら、憚られたのに、こんなに近々とさし向

ありけれ。斯く見る人々にも家の内出で初けん程は、然こそは覺けめど、斯し持て往に、自然面馴ぬべし。物など仰られて、宮我をば思や」と問せ給ふ。御答に「清如何にかは」と啓するに合て、臺盤所の方に、鼻を高く嚏たれば、宮「噫心憂、虚言するなりけり。縦令々々」とて入せ給ぬ。如何でか虚言にはあらん。可うだに思ひ聞さすべき事は。鼻こそは虚言しけれと覺ゆ。然ても誰か斯く憎き事しつらんと、大方厭嫌しと覺れば、我が然る折も、押し挫ぎ返してあるを、況て憎しと思と、未だ初々しければ、兎も角も啓し正さで、明ぬれば下たる即時、淺緑なる薄様に、艶なる文を持て來たり。見れば、

「宮如何して如何に知まし偽を、空に糺の神なかりせば」となん、御氣色は」とあるに、愛たくも口惜くも思ひ亂るに、仍昨夜の人ぞ尋ね聞ま欲き。

是ばかりは啓し正させ給へ。職の神も自然。甚畏し」とて、参せて後も、憂て、折しも何て然將たありけん、と、甚嘆かし。

び申上げたのは、夢のやうだ。行幸など拜見する時、御車の方から一寸でも御覽になるらしいと、下簾を引き繕つたり、顔が透けてはと、扇で顔を隠す位だから、どう考へても、自分ながら、どうして、かう畏れ氣もなく、上つたものだらうと、汗ばかり出て、何にも申上げられない。その中に、隠れ笠のつもりで、一生懸命さげた扇をさへお取りになつたから、顔に振りかゝる髪の毛もなさへ思ふと、この氣まりのわるい心持も、さぞ氣色にあらはれて、見ともなからう。早くお立ちになれかしと思ふのに、扇をおもちやになさつて、大「繪は誰が書いたの？」などおきよになつて、急にはお立ちにならないから、袖を顔に押し

宮に初めて 古本に正暦二年冬と傍註あり、さらば中宮入内(十五歳)の翌年にて主上御十二歳、權中納言伊周十八歳、權大納言道長廿六歳、しかして清少は廿七歳なるべし○夜々参りて 晝は晴がましきに夜のみ出仕せるとなり○繪など、この中宮のみならず、當時の后妃は名家の女の才學あるを身近く召仕はる、事を競争されたれば、この中宮の方に名家の女ある(貞信公、忠平の孫女、宰相の君など)上に、官職は肥後守にて終りたれども梨壺五人の首たる歌人清原元輔の女清少を召され、住みつかせんと、心をとらるゝさまなり○たかつき 木にて、つくり付けになし、漆にて塗る、菓子など盛る器。轉じてその上に燈明皿を置きて灯す○さとび心地 宮中になれぬ心地なり○葛城の神 醜きを恥ぢ、夜のみ出で、久米路の橋をかけし神のやうに、夜のみ出仕する故、戯れて引とめらるゝなり○すぢかひ まともに御覽せらるゝを、さけてなり○臥したれば 片よりて身を屈め、衣に埋もれ居るなり○女官 主殿司の女官○はなたせ 「おあげ下さい」なり○まで 清少の極りあしからんと中宮の察しられて、戸をあくるを制止さるゝなり、十六歳の少女なるに多くの女房を操縦さるゝ手胸、まことに古へは男女ともに早熟なりしなり○かへりぬ 女房もとの座にかへりしなり○夜さり 夕さり(夕しあり)と同じ「夜至ル」なり。とく 「夜は又早く出仕してよ」なり○局あるじ 故參の人と初めは同じ局なるべし○火たきや 衛士の庭燎、箭火などたきて夜を守る小屋○沈 沈の木につくれる火桶。沈は紫檀黒檀など、同じく唐木なり熱帯に産する香木、樹はもろの木に似たりといふ。材を舶來す。木目堅く重くして水に沈む故に名づくといふ、香料とも

あて、俯伏して居たが、(きつと)唐衣に白粉がついて、まだらになつたらう。餘りゆつくりしてお出でになるのを、察しもない、苦しからうとお考へになつたと見えて宮様が、宮「これ御覽なさい。これは誰が書いたのでせう」と被仰つた。ほつとしたら大納言さんが「頂いて拜見ませう」と被仰る。宮「こゝへ来て御覽になればよい」と被仰る。さうしたら(大納言様つてば)「私をつかまへて、放しませんので」だつて。何だか色つぼくて、私の身分にも、年頃にも、そくはないから、氣まりが悪い。宮様は誰かの書いた草假字の草紙をとり出して、御覽になる。大「誰ので御坐りませう。あれにお見せになります。あれなら、きつと、誰

す〇梨繪 梨地(塵地ともいふ、蒔繪に金銀粉の斑點を梨子の膚の斑の如く作れるもの)の蒔繪〇御まかなひ おそばの御用をなすまいふ、「葦の頃」と前にあれどこの頃は二食なれば御配膳とは限らず、たゞ御用をせしそのまゝ御側に在るなり〇参らせ給ふなりけり 道隆公かと女房たち思ひしに伊周なりしとなり「なりけり」の詞に豫想のや、たがひしをいふ〇御直衣 冬は表白、裏花田なれども若年の人は紫なり〇大納言殿 この時伊周は權中納言なれども翌年權大納言となる、この段は、正暦三四年の間に認めしか、正暦五年には伊周内大臣となりたり〇おぼつかなさにお見舞に参りましたの意、この下にあり〇道もなし 「山里は雪ふりつみてみちもなし」の古歌の句〇いかでか「どうしてお出でになつた」なり〇あはれと 「山里に」の歌の下の句「今日來ん人をあはれとは見む」の意にて答へたるなり〇からあや 唐土より舶來の綾、綾の泛織になりたるもの。今いふ綸子なるべし〇眼もあや 「眼がちら／＼する」なり〇あひなく あひなくの音便、「何といふ事なく」「分別なく」などの意〇然ありし 「さやありし」とある書あり、それにては「さうだつたか」の意となる、「き、おき給ひける事など宜ふ」とあれば「なるほどきいた通りだ」と清少の才發らしさをほむる意なるべし〇ふりかくべき體 この頃の婦人は顔のあらはならぬ爲、髪あたりの髪を短かく切りあり、それらの余り多からず美しからぬをいふ〇たまはねば 他本に「立ち給はれば」とあれど、この方よろし肩を返されぬなり〇あやしき事どもを 俗に「出たらめな」なり〇臺盤所 膳を調ふる處〇鼻を高くひたれば 「くさめ」をなすなり、年の始め、他行の時など隣家にて、はなひても祝ひ直すほど「くさめ」はよからぬこと、する風習なりしなり〇よし／＼ 「まあよいわ、仕方がない」なり〇まして 「あ、いふ時にしも」の意〇たゞすの神 判断する神の意と、糺の森に鎮座さる、賀茂明神をかけていはれた

のか存じて居りませう」と、何か言はせやうと思つて、變な事ばかり被仰る。お一人ですら、持て餘して居る處に、又、前驅追はせて、同じ直衣の人が、お上りになつた。これは、もう少し陽氣に、戲言など被仰るのを、皆なで、はやしては笑ひさわぎ、各自も、誰それ

り〇御氣色は この下に「承り侍る」の文意こもる、御側の女房、御意をうけて認めしなり〇それにもよらぬ 「一向無關係な」なり〇しきの神 職の神又は式の神とも書く、陰陽師の使役する鬼神なり、花山院御出家の時、安倍晴明が「式神一人内裏へ参れ」と命令せしに眼に見えぬ者のはた／＼と走りゆきしなど大鏡に見えたり〇職の神もおのづから 「自然、職の神でもした事で御座いませうか」なり〇いとかしこし 「うそでも申上げたやうで誠に畏れ多く御座ります」なり〇なげかし 「なかし」とある書あり、後に思ひ出して書きしなれば軽く「なかしかつた」といひても清少らしけれど、なげかしとある書の多きに從ふ。

がこんなことをした、あんな事を言つたと、殿上人の事など評判するのをきいて居ると、どうしても變化の者か、でなければ、天人などが下りて來たのかと思はれたけれども、馴れて月日がたつと、何でもない事だつた。この女房達も、初め、家から出たてには、やつぱり私のやうに感じたのだらうけれども、その中に段々馴れたんだらう。何か被仰つて、宮「私が好きか」とお尋ねになる。御返事に「好きな段では」と申上げるとたんに、豪盤所の方で、大きなくしやみをしたら宮、あゝ情ない、それはうそなのだつた。仕方がない」とお入りになつてしまつた。何しに虚言を申上げやう。一通りや二通りお好き申すでもないのに、鼻こそ虚言を言つたのだと思ふ。それにしても、誰があんな憎い事をしたのだらうと、腹が立つて堪らない。一たい、くしやみといふものは、いやなものだから、私は、出たい時でも、(人に迷惑をかけてはと)おし込んでしまふのに、あゝいふ時にまあ、何といふ憎い事だらうと思ふけれども、まだ上りたてだから、何とも申上げ直さないで居た。夜が明けたから、局へもどると、すぐに、淺緑の薄様に、氣どつて書いた文を持つて來た。見ると、

「『S』かにして『S』かに知らまじしつはりを、空にたゞすの神なかりせば」

(うそかまことか判断する糺の森の神様がなかつたら、ほんとうのおまへの心は分りつこない)

といふ宮様の思召です」とあるから、お歌に感心もし、口惜くもいろ／＼に思ふにつけて、どうでも昨夜の人が誰だか知りたし。

清うすきこそ、それにもよらぬはなゆゑに、

うき身の程を知るぞわびしき。

(ほんとうに宮様を思ひ奉る心が薄いのなら仕方が御座いせんが、うそつきと思召された不仕合な身が情なう御座います)

これだけは、どうかよく申上げて下さい。職の神でもいたしたので御座いませうか、ほんとうに恐れ多う御座います」と返事をさし上げた後も、何といふ拍子のわるい時にしたんだらうと、堪らなく情ない。

得意さうなもの(は)、

正月一日の朝早く一番がけに、くしやみをした人。競争者の多い時の藏人に、可愛い子がなつた時の親の様子。除目にその年の一番よい國の司となつた人

得意顔なるもの、

正月一日の早旦、最初に嘔る人。競ふ度の藏人に、可愛うする子成たる人の氣色。除目に其の年の一の國得たる人の祝など言て、「甚偉う成り給り」などいふ人の答に、「何か、甚異様に亡

が、人が祝ひをのべて、「なんとまあよい事をなされた」など言ふ返事に、「いやもう何だか、大分都落ちの氣味で」などいふのも、得意さうだ。又多勢の競争者の中から、選ばれて彈にされたのも、自分ながらえらいと思ふだらう。強い靈氣を調伏した修驗者。韻ふたぎを言ひあて、早くあけたの。小弓を射るのに、片方の人が、あてさすまいと咳拂ひをしたり、邪魔になるやうに騒ぐのに、平氣で、音高的に射中てたのも、得意さうだ。碁を打つのに、それ程とれる所があるとも知らず、欲張つてあちこちきよろ／＼と探しまはる中に、外に目がなくて、(敵の方の)澤山取れる所を見つけたのは、どんなにか嬉しからう。得意さうに、わ

じたり顔なるもの

命で侍るなれば」など言も、得意顔なり。又人多く挑たる中に撰

れて、聲に取れたるも、我はと思ぬべし。強き靈氣調じたる驗者。掩韻の明、疾したる。小弓射るに、片つ方の人、咳を爲紛して騒ぐに、念じて音高う射中たるこそ、得意顔なる氣色なれ。碁を打に、然許と知で強慾さは、又他所に關り歩くに、他方より目も無て、多く拾ひ取たるも、嬉からじや。傲り顔に打ち笑ひ、尋常の勝よりは傲り顔なり。在々受領に成たる人の氣色こそ、嬉し氣なれ。僅に在る從者の、無禮に侮るも、憾しと思ひながら、如何せんとて念じ過しつるに、我にも勝る者們的畏り、唯仰承らむと追從する體は、往し人とやは見たる。女房打ち使ひ、見ざりし調度、装束の湧き出る。受領したる人の、中將に成たるこそ、原來公達の成り上りたるよりも、氣高う得意顔に、甚う思たんめれ。位こそ仍愛たきものにはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍從の君など聞る折は、甚侮り易きものを、中納言

つくと笑ふのも、つい通りの勝よりは、得意さうだ。

永年かゝつてやつとこさと受領になつた人の様子は、堪らなく嬉しさうだ。少しばかりある家來が、自分を馬鹿にして下直に扱つて居たのも、口惜いながら、よん處ないとがまんをして居たのに、急に自分より上の者たちが、丁寧に、いかやうの御用でも致しますると追従される様子は、これまでとはまるで別人のやうだ。女房をふやしたり、今までなかつた道具や衣裳が、湧き出したりする。又受領した人が、中將になつたのは、元來君達だつた人の成り上つたのよりも、氣位高く得意然と、自負して居るらしい。何にしても官位といふものは、結構なものだ。同じ人

大納言、大臣などに成ぬるは、無下に爲ん方なく、貴く覺え給ふ事の此上なきよ。程々に付ては、受領も然こそはあんめれ。數多國に往て、大貳や四位などになりぬれば、上達部などもやむことなかり給めり。女こそ仍悪けれ、内裏邊に、御乳母は典侍、三位などに成ぬれば、重々しけれど、然とて程過ぎ、何ばかりの事かはある。又多くやはある。受領の北の方にて下ること、中位き人の幸福には思てあんめれ。地下の、上達部の北方になり、上達部の御女にて、後に成り給こそ愛たけれ。然ど仍男は、我が身の發達るこそ愛たく、打ち仰たる氣色よ。法師の某供奉など言て歩くなどは、何とかは見る。經貴く誦み、容貌美麗氣なるに就ても、女に侮れてなりか、りこそすれ、僧都、僧正に成ぬれば、佛の現れ給るにこそと、怖ち惑て畏る體は、何にかは似たる。

はなひ 前の事につゞきて「くさみ」の事をいへり、勢ひよげに開ゆるなるべし打風し居ては、くさみ高くも出づまじきか、又召使ふ者には遠慮すべき事を主の威光に

でも、大夫さんだ、侍従さんだと言つて居る間は、軽く思ふけれども、中納言、大納言、大臣などになると、堪らなく立派に思はれる。でも受領と一概にも言へない。諸國を歴任して、大貳や、四位ぐらゐにでもなれば、上達部たちまでが、尊敬なさる。女はやつぱりつまらない。内裡で(重い)御乳母でも、(やつと)典侍。それも三位ぐらゐになれば、重々しいけれども。かと言つて、いつまでたつてもその上の立身もしない。それも(もと)お乳母だから)多勢はない。受領の北の方になつて田舎へゆくのを、中邊の人の幸福と思ふらしい。又五位以下の者の娘が、(三位以上の)上達部の北の方になり、上達部の娘が、お

念如律令」と祝ひ直すなり、高く、はなひて、高らかにさる呪文を唱ふるは、したり顔なるものなるべし。○あふたぎ 古き詩の韻脚の字をかたくして、詩意によりて塞きたる字をあてさする遊戯なり。早く當つるを勝とす。○あけ 當つれば、掩ひたるを明くるなり。○小弓 玩具とする小き弓。長さ三尺ばかり、的と相去る事七間半、坐して射る。花綱、紫種などにて作り、綱号とす。○片つ方の人 相手の人。○しはぶぎ 的なる小鳥などを驚かし逃がんとするなり。○念じて それにさまたげられずなり。○こと方より 相手の方より自身の方に目なきなり。目のある所は生くるなれども。○ありありて 「永い事か、つて」○ほこりかなり 一本こゝまでにて以下なし。○ありし人とやは 侮られたりしを急に追従さるゝ様、別人の如しの意。○わきいづる おもしろき詞なり、自然と豊富になるさま。○公邊の云々 「もと」清華の家に生れたる君達の中將となりたるよりは。○なり。○くらゐ こゝにては「官」をいふ。○大夫の君 名家の子孫の五位に叙せられて、なほ無官なるをいふ。○侍従の君 天子の御前に侍して規諫し、遺を拾ひ、闕を補ふを職とする官。定員八人。○無下に 「無上に」と同じ。比するものなき意。○ほどく 「ほど」は、身分、分際等の意。身分としては「なり。○然こそはあんめれ 「さうであるが」にて受領と一口にいひても、しかしながらなり。○大貳 大宰府(筑紫九國即ち今の九州)と壹岐對馬を總管する役所)の實務者(帥は親王にて赴任せず、權帥は赴任しても、實務は大貳、少貳にてなすなれば、一國の國司よりは上なり。○四位 國司は大國の守は從五位上、上國の守は從五位下、中國の守は正六位下、下國の守は從六位下なれば、正五位上の大貳、重任などして四位ともなれば榮譽なりしなるべし。○女こそ 「女がつまらない」と論斷せるは、これらが、はじめなるべし。○御めのと 諸大夫の娘にても、天子の御乳母となれば典侍となる。○ないしすけ 内侍司に尙侍二人、(從五位に准じ後、從三位)典侍

后におなりなさるのは、これはおめでたい。でもやつぱり男は自分の立身を、(何よりも)得意になつて、反り返つて居る。法師が何とか供奉など、いつて(威張つて)歩くのなどは、一向何でもない。お経を尊く読み、かほかたちが美しいにつけても、女に馬鹿にされて、いろ／＼つまらない眼も見るが、僧都、僧正になれば、佛の御出現だと恐れ畏まられる様子は、似るものもなく(得意らし)。)

風は、

風。木枯(が)おもしろい。三月頃の夕暮に、ゆるく吹いて居る雨風は、まことにおもしろい。八月頃、雨にまじつて吹いて居る風も、誠に趣きがある。

四人、(六位に准じ後従四位)陪膳に侍して禁色を許さる、(尙侍は平城天皇の時の尙侍薬子以來、天皇の侍妾の名となりて内侍司の事は専ら典侍の職となりしが、鎌倉以後は典侍も枕席に侍する事となり、その下の掌侍、實務をとる事となりたり)○供奉 内供奉の略。朝廷にて海内より廣く撰びたる、戒律堅固に智徳高き十人の僧をいふ。禁裏の道場にて、齋會の時に讀師を奉仕し、又清涼殿の二間に候して、夜居を勤む○されどなほ男は この下に「娘の出世よりは」の意こもりたり○なりかゝりこそすれ 誤寫にてもあるべきか。口譯には、助けて解し置きたり○僧正この下に僧都、律師あるなり。こゝは「僧都か、もつと、その上の僧正になれば」の意。

風は、

風。木枯。三月ばかりの夕暮に、緩く吹たる雨風、甚興なり。八月ばかりに雨に交りて吹たる風、甚興なり。雨の脚横方に騒う吹たるに、夏通したる綿衣のかゝりたるを、生絹の單衣に引き

雨足が斜かひに、騒しく吹いて居るのに、夏まで着通した綿入のかゝつて居るのを、生絹の單衣にかさねて著たのもおもしろい。その生絹すら、暑くして脱ぎたかつたのに、何時の間に斯うなつたのだらうと思ふのも、おもしろい。曉方格子や妻戸などを押し上げると、嵐が颯と吹き渡つて、顔に染みたのが、堪らなくおもしろい。九月晦日、十月一日時分、空が曇つて、風がひどく吹くと、黄色い木の葉などが、ほろ／＼とこぼれ落ちるのが、誠におもしろい。(又)櫻の葉や、棕の葉などが落ちる。十月頃の樹立の多い庭は、

襲て著たるも興し。此の生絹だに甚暑かはしう捨まほしかりしかば、何時の間に斯う成ぬらんとおも興し。曉、格子、妻戸など押し上たるに、嵐の颯と吹き渡りて、顔に沁たるこそ、甚う興しけれ。九月三十日、十月一日の程の、空打ち曇たるに、風の甚う吹に、黄なる木の葉どもの、ほろ／＼と零れ落る、甚興なり。櫻の葉、棕の葉などこそ落れ。十月ばかりに、木立多る所の庭は甚愛たし。

あらし 「荒風」の轉か、もしくは「荒し」を名詞とせる語なるべし。雨風の吹きある、もの○木枯 「木風」の轉。秋冬吹く、疾き風○雨風 他本、花風、朝風等となりあり、あさ風は寫し誤りなる事明かなり(上に夕暮とあれば)、花風も取らず○綿衣 梅雨頃まで着たるなるべし○かゝりたるに 他本「汗のかゝりたるに」「汗の香の少しかゝりたるに」等あれども、とらず。衣桁やうのものにかけあるなるべし○このすゞしだに 「前には」の詞、この上に含まれたり○なが月 九月なり稻熟月の略か○かみな月 陽曆にては十一月にあたる、大物主神八十萬神を率ゐて天に昇ればいふといふ○椀 椀に似たる大木。葉は椀に似て薄く圓く鋸齒あり、實圓く黒く食ふべし、葉は枯れても堅く、角又は木器を磨くに用ゐて木賊に勝る。

野分のあくる日が、堪らなく興のあるものだ。立部(だ)透垣(だ)が並んで倒れて居るので、裁込などもみじめな様子だ。大きな木が倒れて、枝など吹き折られただけでも惜しいのに、萩や女郎花などの上に、よろけて這ひ伏して居るのが、浅ましい。格子の小間などに、細々ときままりよく吹き込んだ手際などは、荒けない風の仕事とは思はれない。濃い紫の少し土白くなつた着物に、朽葉の織物や、羅などの小桂を着て、眞から美しい人が、昨夜は風の騒ぎで寝られなかつたので、晩く起きたまま、鏡を見て、(一寸顔をなほして)身屋から少し膝行り出る(と)、風に吹き迷はされて、少し眠んだ髪が、肩にかゝつて居る様子は、誠によい。

野分の翌日こそ、甚う哀に覺れ。立部透垣などの伏し並たるに、前裁ども心苦し氣なり。大なる木ども倒れ、枝など吹き折れたるだに惜きに、萩女郎花などの上に踞ひ伏る、甚意外なり。格子の壺などに、颯と區劃を殊更に爲たらん如に、細々と吹き入たるこそ、荒かりつる所業とも覺ね。甚濃き衣の表曇たるに、朽葉の織物、羅などの小桂着て、正しく清げなる人の、夜は風の騒に寢覺つれば、久う寢起たる隨に、鏡打ち見て、母屋より些、膝行出たる、髪は風に吹き迷されて、些打ち服みたるが、肩に被りたる程、實に愛たし。哀愁なる氣色見る程に、十七八ばかりにやあらん、幼うはあらねど、特と大人などは見ぬが、生絹の單衣の甚う、綻たる、縹も返り、濡などしたる薄色の宿直衣を着て、髪は尾花の如なる削末も、長ばかりは衣の裾に外れて、袴のみ清新にて、傍より見る、童、若き人々の、根籠に吹き折れたる前裁などを、取り集め起し立などするを、羨し氣に推量て、簾に

添たる後も興し。

たて部 部は、細き木を縦横に組みて格子とし、格子の間を板張としたるもの。それを衝立の如く作りて庭先等に備へ、見隠しとしたるをいふ〇すいがい「透垣」の音便。板又は竹にて作り、間の透きありて、見通し得る垣の名〇朽葉のおりもの、經赤、緯黄なる糸にて織りたる物〇かへり 色のさめたるをいふ〇薄色、この上に「上に」の字をふくめたり、たゞ薄色といへばいつも紫なり。

(庭の)物あはれな様子を見て居ると、十七八ばかりだらう、子供ではないが、一ばしの女房でもないのが、生絹の單衣の、ひどく綻びたり、はな色のさめたのが(露に)ぬれたりしたのゝ上に、薄色の宿直物を着て、髪は尾花のやうな削ぎ末も、長さは着物の裾よりは少し余つて、袴だけ新しく美しいのが、上着の脇から見える。童や、若い女房達が、根こそげ吹き折られた裁込などを、寄せ集めて、起し立てたりするのを、羨しさうに、簾に寄添つて(ちつと見て)居る、後姿も、風情がある。

奥床しいもの(は)。

障子の外で聞くと、主人らしい聲で、ひそやかに何かいふと、若い聲で返事をして、衣摺の音をさやくとさせて、お膳でも捧げて来たのか、箸や、しゃもじの音が入り交つて聞えたり、ひさげの柄が倒れ伏す音にも、耳がとまる。

こゝろにくきもの

微妙きもの、

物隔て聞に、女房とは覺ぬ聲の忍やかに聞たるに、答若やかにして、打ち動きて參る氣息、物食る程にや、箸、匙などの取り交て鳴たる、提の柄の伏も、耳こそ留れ。打たる衣の清新なるに、騒うはあらで、髪は振り遣れたる、甚う裝飾たる處の大殿油は奉で、長炭櫃に甚多く熾したる火の光に、御几帳の紐の甚

打つた着物のつや／＼したのに、さらりと髪が振かゝつて居る(のや)、立派に装飾してある所に、燈火はつけないで、長圍爐裏に澤山熾した火の光に、御几帳の紐がつや／＼と光り、御簾の帽額の上げた鉤が、きら／＼光るのも眼立つ(てよい)。手際よくこしらへた火桶に、灰が清らかで、かん／＼と熾つて居る火で、上手に描けて居る繪を見るのも風情がある。(火)箸が、きちんと交叉して居るのもよい。大分夜更けて皆な寢静まつた後、外の方で、殿上人などが咄をして居ると、奥で、碁石を筈に入れる音が、がちや／＼と聞えたのは、誠に奥床しい。縁にあかりがついて居る(のも、よい)。障子越にきくと、忍んで逢つて居る人が、夜中などに眼を覺して、何か言ふと、男もくす／＼笑つて居るのは、何を咄して居るのかとおもしろい。

艶やかに見え、御簾の帽額の上たる鉤の顯著なるも分明に見ゆ。精巧く調じたる火桶の、灰清げに熾したる火に、巧く畫たる繪の見たる、趣致し。箸の甚顯著に交叉たるも興し。夜甚う更て、人の皆寝ぬる後に、外の方にて、殿上人など物言に、奥に碁石、筈に入る音の數多聞たる、甚微妙し。簀子に火點したる。物隔て聞に、人の忍るが夜半など打ち覺睡て、言ふ事は聞ず。男も忍やかに笑たるこそ、何事ならんと興趣けれ。

かひ さじ○ひさげ 酒又は飲料を入れる、器。桶の如くつくり鉸をつく。金屬にて製するもあり○打たる衣 紅の打衣のつや、かなるなり○さわがしうはあらで 亂る筋のなきなり○かきたる繪 他本「内にかきたる」とあり、火桶の内部にまで繪のあるが、火に映りてよく見ゆるさまなり。

島(の名でおもしろい)は、
浮島。八十島。たはれ島。みづ島。松が浦島。まがきの島。豊浦の島。たど島。

島(の名でおもしろい)は、

浮島。八十島。たはれ島。みづ島。松が浦島。まがきの島。豊浦の島。たど島。

島は、

浮嶋。八十嶋。戲嶋。水嶋。松浦嶋。籬嶋。豊浦嶋。たど嶋。

て遊ぶ」とはし書きして歌に「八十しまの浦の活に」とあり、その他普通名詞としては「わたの原八十しまかけてこぎ出でぬと、人にはつけよあまのつり舟」「わたの原ふくればさゆる汐風に、やそしまかけて千島なくなり」の如く「八十しまかけて」の詞入りたる歌多し、名をおもしろく思ひていへるなれば、固有名詞、普通名詞のいづれも、耳なれたるによりていへるなるべし○たはれじま 肥後であり、後撰集「まめなれどあだ名は立ちぬたはれ嶋、よる白浪をぬれ衣に着て」(朝綱)などあり、伊勢物語にも「名にしおはばあだにぞあるべきたはれじま、浪のぬれ衣きるといふなり」淫蕩の名をおもしろしとなるべし○みづ嶋 萬葉集に長田王「葦北の野坂の浦に舟出して、水嶋にゆかむ波立つなゆめ」野坂浦は肥後なり「村千島小じまをさして渡るなり、野坂の浦に舟や着くらん」と夫木集にあり(定教)○松が浦嶋 陸前松嶋をいふか。歌は多くあり。千載集顯昭法師「浪間より見えしきまてかはりぬる、雪ふりにけり松が浦嶋」後撰集素性法師、「西院の後、御くしおるさせ給ひて行はせ給ひける時、かの院の中島の松を削りてかきつけ侍りける」とはし書ありて「音にきく松が浦しま今日ぞ見る、むべも心あるあまは住みけり」○まがきのしま 陸前にあり古今集「わがせこを都にやりて鹽がまの、まがきの島のまつぞ戀しき」○とよらのしま 長門國にあり。六帖に「よそに見し豊浦の島のふた心、ありとし聞けば更に頼ます」○たどしま 「たど／＼し」の名をおもしろしとなるべし、所、不明。

濱(の名でおもしろい)は、

そとの濱。吹上の濱。長濱。打出の濱。もろよせの濱。千里の濱は又、どんなに廣いのだらうと思ひやられる。

濱は、

卒都濱。吹上濱。長濱。打出濱。諸寄濱。千里濱こそ廣う想像るれ。

嶋は 濱は

そとの濱 陸奥津輕郡の沿海、「みちのくの奥ゆかしくぞおもほゆる、壺のいしぶみ、そとの濱風」とあるにて土地のさましるし〇吹上の濱 紀伊にあり古今集「秋風の吹上に立てる白きくは、花かあらぬか浪のよするか」(菅家)〇長濱 伊勢にあり、古今集「君が代は限りもあらじ長濱の、真砂の数はよみ盡すとも」〇打出の濱 近江にあり拾遺集に「近江なる打出の濱の打出で、恨みやせまし人の心を」名のおもしろければ歌にせるなるべし。後に後鳥羽院の御製にも「駒なめて打出の濱を見渡せば、朝日にさわぐ志賀の浦波」などもあり(攝津にも同名あり)〇もろよせのはま 但馬にあり。六帖に「但馬なる雪の白濱もろよせに、思ひしものを人のとや見む」千里の濱 紀伊國熊野の古道なり。土人は昔にて「千里」ともいふ、東岩代村の界より目津崎まで十二三町の間をいふ。増基法師「千里の濱にて碁石拾ふとて」とはし書きして「打つ浪にまかせてを見ん我がひろふ、濱まの敷に人もまさらじ」又大鶴に花山院御修行の途に「千里の濱といふ所にて、御心地そこなはせ給へれば、濱づらに石のあるを御枕にて」云々とあり。

浦(の名でおもしろい)は、

おふの浦。鹽竈の浦。志賀の浦。名高の浦。こりすまの浦。わかの浦。

おふの浦。鹽竈浦。名高浦。懲すまの浦。和歌浦。

おふの浦 越中にあり、萬葉集に「おふの浦漕ぎたもとほりひれもすに、見とも飽くべき浦にあらなくに」(「たもとほり」は徘徊すること)又志摩にもあり、鳥羽より東南の方といふ。夫木集に「おふの浦の霞をわたるあま小舟、いづれの嶋の玉藻かふるむ」とありていづれも假字は「おふ」なり。清少が歌枕の書にて知りしは、この中のいづれかにて、假字を無關心に書きしか、後の人の無關心に寫せしかなるべし〇しほがまの浦 陸前にあり、伊勢物語に「しほがまにいつか來にけん朝なきに、釣すり舟は、こに寄らなむ」〇志賀の浦 近江國滋賀郡にあり、萬葉集に「かしぶえに田鶴なきわたる志賀の浦に、沖つ白波立ち暮らしも」又後拾遺集に「さよふくるま、にみぎはや氷るらん、遠ざかりゆく志賀の浦波」などあり〇名高の浦 紀伊海草郡にあり、萬葉集に「紀の海の名高の浦にすする波、音高きかも逢はぬ千ゆゑに」又夫木集「紀の國の名高の浦に行く舟の、まほにも人を逢ひ見てしがな」等あり〇こりすまの浦 攝津の須摩浦に「懲り」を續けていふが例となりしか、源氏にも「こりすまの浦のみるめゆかしきを、しほやくあまやいかと思はん」と詠み、後撰和歌集に「こりすまの浦の白浪立ちいで、寄るほどもなく

かへるばかりか」などあり、されども何處かに、こりすまの浦といふがあるやうにも思はる〇わかの浦 紀伊にあり、古今集に亦人「わかかの浦に汐みち來れば海をなみ、青邊をさして田鶴なきわたる」

寺は

壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住處だつたのが、興がある。石山。粉川。志賀も面白い。

寺は、

壺坂。笠置。法輪。高野は弘法大師の御住處なるが興なるなり。石山。粉川。志賀。

は南都の道基上人作千手観音〇笠置 山城相樂郡笠置山にあり。本尊彌勒菩薩。大友皇子の創建といふ〇法輪 山城葛野郡嵐山の東にあり、本尊虚空蔵菩薩〇高野 紀伊伊都郡。嵯峨天皇弘仁七年弘法大師空海の開基。金剛峯寺と號す〇石山寺 近江滋賀郡石山にあり、本尊如意輪観音。聖武天皇の御草創〇粉川 紀伊那賀郡。施音寺といふ。本尊千手観音。光仁天皇の寶龜年中、大伴孔子古の創立〇志賀 近江國滋賀郡にあり。本尊觀世音。天智天皇七年の勅建。崇福寺といふ。中古廢絶。

經は

法華經は勿論、千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼が有難い。

經は、

法華經は勿論なり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀大呪。千手陀羅尼。

寺は 經は、

法華經 妙法蓮華經にて釋尊所說中隨一の妙經なり、姚秦の羅什三藏の譯せるもの七卷廿八品あり〇千手經 千手観音に關せる事を説きあり、西天竺達摩の譯にて一

文は 佛は、

卷あり○普賢十願 南天竺の空三藏の譯にて一卷。華嚴經の普賢行願品をいふ○すい求經 唐の普思惟の譯にて一卷。「佛說隨求即時得自在陀羅神呪經」の略なり○顯勝陀羅尼 唐の佛陀波利の譯にて一卷。「佛頂尊勝陀羅尼經」なり○大呪 阿彌陀如來の陀羅尼、「(だから)」は梵語にて能持又は總持、多含等、「種々の善法を集めて能持散せずはざらしむ」の意。諷誦すべき經文の名なり○千手たらに 千手觀音の眞言にて大悲呪ともいふ、千手經の中にあり。

文は

文集(と)文選(と)博士の申文(が)おもしろい。

文は、

文集。文選。博士の申文。

單に「アングフ」とも「モンジフ」ともいふ。なだらかに美しき句は、この頃の男女の好尚にかなひて非常に流行せり、源氏物語の隨所にその句を引きあり○文選 梁の昭明太子が、周秦以來、梁に至るまでの詩文を類聚したるもの。もと三十卷なりしを唐の李善注して六十卷とす。唐より晉博士を聘して宮中に講せしめらる、など、文章を學ぶ者の指針となしたり○申文 博士に請ひ、自身の請願を作文しもらひて上るなり、その例、源順が淡路守に補せられん事を望みし申文に「籠鳥思出 豈擇 遠近之林、轍魚悲枯只求三斗升之水」の類。

佛は、

如意輪は、人間の心を御心配になつて、頬杖を突いてお出でになると思ふと、堪らなく有難く恐れ多い。千手でも、すべて六觀音とも有難い。不動尊。藥

佛は、

如意輪は人の心を思し煩て、頬杖を突て在する、世に知す多感に憚し。千手、惣て六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

(それ〴〵有難く)。

有情二故」と經にあり「衆生の度し難きを苦慮されて」の意○世に知らず 「たぐひなく」なり○あはれにはづかし「あはれ」は感激を表する詞なれば、「まこと」といふほどの意。「はづかし」は「憚し」「畏し」などの意にて恐れ多いの意なり○千手 千手觀世音の尊。具さには「千手千眼菩薩」といひて、神通を形に表はしあるなり○六觀音 一に千手觀音、二に聖觀音、三に馬頭觀音、四に十一面觀音、五に准胝觀音、六に如意輪觀音、之を地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道に配して一切衆生を司るものと説けり○不動尊 佛教に明王の一、面貌瘡毒にして右に降魔の劍といふを持ち、左に縛の繩といふを握り、背に火焰ある象を圖す、一切の鬼魅諸煩惱を降伏すといふ。脇士の二童子を制吒迦、犍槌といふ○藥師佛 醫王又は藥王ともいふ。十二大願を立て、衆生の病災を除き、乃至佛果に到らしめ給ふといふ○釋迦 佛教の大祖。中天竺摩伽陀國淨梵王の子、悉達太子。十九歳の時生老病死の苦を觀じて出家し、三十五才にして成覺し、大法を宣傳し四方を教化し、八十歳にして寂す。佛教はその一代の教説に基けるなり○彌勒 この菩薩は釋尊について人天を化益すといふ○普賢 佛陀の教化を扶け衆生を濟度する菩薩。常に釋迦如來理を司る。その白象に乗るはよく諸行を攝取する事、白象の柔軟よく事に堪ふるが如きを表す○地藏 釋迦入滅後、彌勒佛出世前、の右にありて無佛の世に、一切衆生を濟度するため切利天より釋迦の付囑をうけたる菩薩○文珠 普賢と一對の菩薩。常に釋迦の左にありて智慧を司る。手に劍を持ち、獅子に駕するは、智慧の威猛を表はすなりといふ。

物語は、

住吉。空穗の類(がおもしろい)。殿移り。月待つ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國譲り。埋木。道心すゝむる。松が枝(などもおもしろい)。こま野の

物語は、

住吉、空穗の類。殿移り。月待つ女。交野少將。梅壺少將。人め。國譲り。埋木。道心勸る。松が枝。狛野物語は、古き扇差し出ても往しが、興趣しきなり。

物語は

野は

物語は、古い扇をさし出して、立去つたのがおもしろい。

野の少將には笑はれ給ひけんかし」とあり光孝天皇頃の左近少將藤原季繩を交野少將といへる事、尊卑分脈に見ゆればその人の事蹟をたゞつる物語ならんか○樺つぼの少將 以下、「松がえ」までいづれも傳はらず○こま野 源氏物語巻の巻に「こま野の物語の繪にてあるを『いとよく書きたる繪かな』と御覽す、「小さき姫君のひるれし給へる所を」云々とあり、又この書（枕草紙）の下文「月のおかき見るばかり」の處に「こま野の物語は、何ばかりをかきし事もなく、詞もふるめき見所多かられど、月に昔を思ひ出で、虫ばみたる蝙蝠（かへか）とり出で、「もと來し駒に」といひて立てるがいとあはれなるなり」とあり、その頃もてはやせし物語と見ゆ。

野は、

嵯峨野は言ふまでもなく、印南野。交野。こま野。粟津野。飛火野。しめぢ野（がおもしろい）。そうけい野といふ名が、（又）何だかおもしろい。何故そんな名をつけたのかしらむ。安倍野。宮城野。春日野。紫野（もおもしろい）。

野は、

嵯峨野勿論なり。印南野。交野。狛野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そうけい野こそ、漫に興しけれ。何故然命名たるにかあらん。安倍野。宮城野。春日野。紫野。

巖が野 山城葛城郡にあり、もと田獵の地にして嵯峨帝初めて御獵あり又離宮をここに造られしよりの名なり。閑靜なる地にて、こゝに隠れし人多し「うかりけるこの世のさがの秋の暮、露も時雨も身にや添ふらん」（法印爲定）「かり人の草分け衣雁、鹿等の名所。拾遺集に「女郎花わに宿かせ印南野の、いなといふとも、な過ぎめや」（能宣）○交野 河内國北河内郡にあり、伊勢物語に「交野に狩り暮して」とある如く、田獵の地なりしなり○こま野 山城にあり。奈良へゆく路にて木津に近き處。拾遺

集「音にきくこまのわたりの瓜作り、となりかくなりなる心かな」○粟津野 近江滋賀郡にあり、大津松本より勢田橋までの惣稱といふ「逢坂の鳥の音遠く成りにけり、朝露分くるあはづ野の原」（頼阿）○飛火野 大和添上郡春日の南にあり、「飛火」は軍の狼煙なり、他國の軍おそひ來る時、高き丘に登りて火を燒けば、それを見つぎて次第に火をたく、それをしるして軍兵集り皇居をかたむるなり、この野の烽火は和銅五年正月河内國高安にありしをやめて、この野に置き平城宮に通せしとなり、古今集「春日野の飛火の野守出で、見よ、今幾日ありて若葉摘みてむ」○しめぢ野 山城にあるよし八雲御抄に見ゆ○そうけい野 「そうけい野」とある書あり、いづれにしても在所不明○あそび野 攝津、天王寺南大門より住吉に到る道○宮城野 陸前、宮城郡にありて萩の名所。古今集大歌所歌に「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の、木の下露は雨にまされり」同集に又「宮城野のもとあらの小萩露を重み、風を待つこと君をこそ待て」などありてその頃よりの名所なり○春日野 大和添上郡春日山の裾野○紫野 山城愛宕郡にあり。萬葉集に頼田女「あかれさす紫野ゆき、しめ野ゆき、野もりは見すや君が袖ふる」

陀羅尼は、

曉方。

陀羅尼は、

曉。

讀經は、

夕暮（がよら）。

讀經は、

夕暮。

音楽は、

夜、人顔の見えない時分（がよい）。

管絃は、

夜、人の顔見ぬ程。

陀羅尼は 讀經は あそびは

あそびは云々、ともし火なき月夜の管絃など、この頃の人の好みてせし事なり。

遊戯事は、

見た眼がわるいけれども、鞠もおもしろい。小弓。韻塞。碁(などおもしろい)。

遊伎は、

態醜けれども鞠も興し。小弓。掩韻。碁。さまざま 足にて蹴る故なり。

舞は、

駿河舞。求子(がよい)。太平樂は。格好がよくないけれども、中々面白い。太刀(をさして居るの)は感心しないけれど、誠にもしろい。唐土で、敵と一緒に舞つたといふ由來などをきくと、(面白い)。鳥の舞。拔頭は、頭の髪を振りかぶつた眼つきなどは、怖らしいけれど、樂も誠にもしろい。落躑は、

舞は、

駿河舞。求子。太平樂は、態醜けれど甚興し。太刀など憂てくれど、甚興趣し。漢土に、敵に具して遊けんなど聞に。鳥の舞。拔頭は、頭の髪振り被たる眼などは恐しけれど、樂も甚興趣し。落躑は二人して膝踏で舞たる。高麗粹。

する河舞 あづまあそび又あづま舞といふ。東國の風俗に合せて舞ふ故にかく名づくる中に、駿河風もつとも人に悦ばれしかば、駿河舞をあづま舞といふに至れり。舞人六人、琴笛の者七人、青摺の小忌衣に細纒の冠をつけ、庭上にて奏するを法とす。「うと濱に駿河なる有度濱に、打よする波は七くさの妹、ことこそよし」又おやもな

二人で膝を踏んで舞つたの。狛鉾(も面白)。

き小松がうれに網な張りそ」等の歌詞なり○求子 駿河舞と、この舞とを舞ふを諸舞といひ、駿河舞のみ舞ふを片舞といふ。歌詞は「あはれ千早ぶる賀茂の社の姫小松、あはれ姫小松、よろづ世ふとも色は變らじ、あはれ色は變らじ」○太平樂 唐樂にて

又武昌太平樂、武將破陣樂などいふ○さまあしけれど 四人して鎧を着、太刀を帯び、やなぐひを負ひ鉾を横たへ、鉾を抜き持ちて舞ふ故にいふ○かたきに具して 「具して」は「共に」なり。漢の高祖と楚の項羽と鴻門にて會せし時、項羽(項羽の従弟) 劍を抜き高祖を撃たんとせしかど、項羽(項羽の季父)も亦劍を抜き舞ひ、常に身を以て高祖を蔽ひしかば、莊うつ事を得ざりし狀を舞ふなり○聞くに 聞く故、おもしろしの意○とりのまひ 一名迦陵頻。印度傳來の舞樂。舞人四人、天冠羽衣を着て、拍子に銅拍子を拍ち拍子をとりて舞ふ。迦陵頻を擬したるものといふ(迦陵頻は一名妙音鳥)○拔頭 抄に、「青絲を髪に亂る、如くふりかけ、冷じき面を着て侍れば、まみ(眼)など恐しといふなり」とあり○落そん 納蘇利を一人して舞ふ時の名なれど、こゝには納蘇利の一名としたり、抄に「二人して背を屈め膝を突いて舞ふなり」とあり。

弾き物は、

琵琶。箏の琴(がよい)。

弾き物は、

琵琶。箏の琴。

琵琶 もと胡中のもの。馬上にて鼓せしといふ。手を推すを批といひ手を引くを把といふとあれば絃の響きを名とせるなるべし、木製の樂器にて體を甲といふ。楯扁にて二尺余あり棹の頭、轉手のある處、背に折れたり。四絃四柱。抱きて撥にて彈するもの○さうの琴 ことの十三絃なるもの。一より五までを大緒といひ、六より十までを中緒といひ、末の斗、爲、巾の三絃を細緒といふ。専ら雅樂に用ゐて、これを樂琴といふ。今の筑紫琴はこの一轉せるものなり(七絃のを琴の琴といふ)

調べは、

風香調。黄鐘調。蘇合の急。鶯の轉と

調べは、

風香調。黄鐘調。蘇香の急。鶯の轉といふ調。相府蓮。

彈物は 調べ

吹き物は

いふ調べ。想夫憐（がおもしろい）。

中の盤渉調の印度樂なり。すべて樂の初、中、終の三段を序、破、急といふ。○春のさえずり 春鶯轉をいふ。壹越調の唐樂にて女舞とす。○想夫れん 曲ありて舞なし、「想夫戀」は後にあてたる字、普の王儉大臣として蓮の家を裁きて愛せしかば「相府蓮」といひしがもとなるよし、兼好の徒然草にあり。

吹き物は、

横笛が誠にもしろい。遠くから聞えるのが、段々近く成つて来るのも、おもしろい。近かつたのが、遠方になつて、微かに聞えるのも、誠にもしろい。車でも、徒歩でも、馬でも、すべてどんな時でも懐に入れて居て、些とも眼立たず、あの位よい物はない。まして、自分の知つて居る調子などは、堪らなくおもしろい。曉方などに、人が忘れて、枕許にあるのを見つけたのも、やはりおもしろい。（その）人の處

吹き物は、

横笛甚う興し。遠うより聞るが、漸う近う成り行も興し。近かりつるが遙になりて、甚微に聞るも甚興し。車にても徒歩にても、惣て懐に差し入て持るも、何とも見えず、然許興しきものは無し。況て聞き知たる調子など甚う愛たし。曉などに、忘て枕の許にありたるを見付たるも仍興し。人の許より取に遣せたるを、押し包て遣も、唯文の如に見たり。笙の笛は、月の明きに、車などにて聞たる、甚う興し。所狭く持て扱ひ難くぞ見る。吹く顔や如何にぞ。其は横笛も、吹き倣ありかし。筆栗は、甚難しう、秋の虫を言ば、轡蟲などに似て、憂て氣近く聞ま欲からず。

から、とりによこした時、くるく、と何かでくるんで渡すのも、まるで文のやうに見える。笙の笛は、月の明るい晩に、車などで聞いて居ると、實におもしろい。でも、蒿張て持ちにくさうだ。吹く顔もどんなものか。それは、横笛でも、吹き方があるけれども、箏は誠に聞き辛い。秋の虫でいへば、轡蟲のやうで、近くで吹かれると、いやだ。まして下手になんぞ吹かれたものなら、堪らないのに、臨時祭の日に、まだ御前ではなく、物のかけで、横笛を高く吹いたのを、あゝ面白いと聞く中、中途から一しよに吹き上げられると、美しい髪の毛の人も、すつかりその髪が立ち上りさうだ。でもその中、琴や笛と一しよに合さつてゆくと、中々又おもしろい。

況て拙う吹たるは甚憎きに、臨時祭の日、未だ御前には出で果で、物の後にて横笛を甚う吹き立たる、噫興しと聞く程に、半途ばかりより打ち添て吹き上せたる程こそ、唯甚う麗しき髪持たらん人も、皆立ち上りぬべき心地ぞする。漸う琴笛合奏て歩み出たる、甚う興し。

横笛 笛の横に用ゐて吹くもの、竝に吹く尺八、洞簫などに對していふ。歌口の外に七孔あるを常とす（大和笛、高麗笛は六孔）○笙 竹を編み列れて吹く。大なるは二十三管、小なるは十六管、管の長短齊しからず。鳳の翼に象り作れるものをいふ○ひちりき 笛に似て竝に吹く。歌口には別に蘆舌を挿す。碧、蘆、攝津鴨殿の地に産し。苗大きくして葉厚き蘆の莖にて作る○臨時の祭の日 賀茂神社のは陰曆十一月下の酉の日、石清水なるは陰曆三月中の申の日なり、共に天皇清涼殿に幸し試樂を御覽あり○物のうしろ 陪從、瀧口の戸より笛を吹きつ、棧欄の木の際まで来るをいふ○半ばかりより 中途より箏を吹き添ゆるをいふ○うるはしき 長く美き髪を持主も、その髪を立つ心地するほどの意○琴筒合せて 雜式所の藏人、琴を昇きて弾じつ、出て来るなり。

吹きものは

見る物では、

行幸。祭のかへり。御賀茂詣。臨時祭(などがよい)。空が曇つて寒さうなのに、雪がちら／＼と落ちて、挿頭の花や青摺などにかゝつたのは、堪らなく風情がある。太刀の鞘が、ちか／＼と光つて居るのに、半臂の緒が、磨きをかけてやうにつやのよいのや、地摺袴の中から、氷かと驚くばかりの打目など、すべて結構だ。もう少しゆつくり渡らせたけれども、祭の使は立派な人とも限つて居ず、受領位の目にも立たない見ともない顔が、かざしの藤の花のおかけで、美しく見えて、やつぱり見送られたり、陪従の下身なのが、柳の下襲に、挿頭の山吹は一向引立たないなりだけれども、扇を高くならして、「賀

見るものは、

行幸。祭の歸路。御賀茂詣。臨時祭。空曇りて寒氣なるに、雪些打ち散て、挿頭の花青摺などにかゝりたる、得も言ず興し。太刀の鞘の顯著に黒う班にて、白く廣う見たるに、半臂の緒の瑩したる。地摺袴の中より、氷かと驚くばかりなる打目など、惣て甚愛たし。今少し多く渡せま欲きに、使は必憎氣なるもある度は、眼も留ぬ。然ど藤の花に隠たる程は、興しう、仍過ぬる方を見送るゝに、陪従の品後れたる柳の下襲に、挿頭の山吹面なく見れども、扇甚高く打ち鳴して、「賀茂社の木綿襪」と歌たるは、甚興し。

行幸に准る物は、何かあらむ。御輿に奉りたるを見參せたるは、明暮御前に侍ひ仕う奉る事も覺ず、神々しう嚴しう、常は何ともなき司、姫太夫さへぞ此上なう珍う覺る。御綱助、中少將など、甚興し。祭の歸途、甚う興し。昨日は萬の事美しうて、一

茂の社のゆふだすき」と歌つてゆくのは誠におもしろい。

行幸ほどのものはない。御輿にお召しになつたのを拜見すると、朝夕御前にお仕へ申す事も忘れて、神々しく嚴しく、平常は何とも思はない役人や女官まで、妙に珍しく思はれる。御綱役の大舍人の助や、中少將なども、風情がある。祭の歸りは、實におもしろい。昨日は萬事壯嚴で、一條の大路の廣く清らかなのに、暑い日かけが車にさし込むのが眩いから、扇で隠したり、居場所をかはしたりして、ちつと待つ間、見苦しく汗が出たのに、今日は早くから出かけて、雲林院や、知足院の門に立て、居る車たちの、葵や桂もしほれて見える。

見るものは

條大路の廣う清潔なるに、日の影も暑く、車に射し入たるも眩ければ、扇にて隠し正座などして、久う待つるも、見苦う汗なども流しを、今日は甚疾く出て、雲林院、知足院などの許に立る車ども、葵、蔓も打ち萎て見ゆ。日は出たれど空は仍打ち曇たるに、如何で聞くと眼を覺し起き居て待たるゝ杜鵑の數多さへあるにやと聞るまで、鳴き響せば、甚う愛たしと思ふ程に、鶯の老たる聲にて、彼れ似せんと思しく打ち添たるこそ、憎けれど又興し。疾と待に、御社の方より、赤き衣など着たる者どもなど連れ立て来るを、「如何にぞ、事成ぬや」など言ば、「未だ無期」など答て、御輿、腰輿など持て歸る。是に奉りて在すらんも愛たく、氣近く如何で然る下司などの侍にかと恐し。遙氣に言ふ程もなく歸せ給ふ。扇より始て、青朽葉どもの興しく見るに、所の衆の、青色白襲を氣色ばかり引き被たるは、卯花垣根近う覺て杜鵑も蔭に隠ぬべう覺かし。昨日は車一輛に數多乗て、二藍の直

日は出て居るが、空はまだ曇つて居る。(すると、いつも)どうかして聞かうと眼を覺して待つて居る時鳥が、今日は澤山でも居るのかと思ふほど、啼き響かせるので、何といふ嬉しい事と思つて居ると、鶯が、真似るつもりか、古聲で一緒に啼くのが、憎いけれども、おもしろい。(お行列を)、早く〜と待つて居ると、御社の方から赤い装束など着た者たちが、こや〜と来るから、「どうです、もうお成ですか」など、きくと、「まだ〜、何時だか分りません」など答へて、御輿や、腰輿などを持つて返る。これにお召しになるのかと、恐れ多く、お身近く、どうして、あんな下司が居るんだらうと、恐ろしい。まだ容易ではなさうに言つたけ

衣、或は狩衣など亂れ着て、簾取り下し物狂しきまで見し君達の、齋院の垣下にて、晝装束厳正くて、今日は一人づつ、長々しく乗たる後に、殿上童乗たるも興し。渡り果ぬる後には、何か然しも感らん、我も我もと危く恐きまで、前に立んと急ぐを、「斯な急そ。悠長に遣れ」と、扇を差し出で制すれど、聞も入ねば理なくて少し廣き所に、強て停させて立たるを、不安く憎しとぞ思たる。競ひかゝる車どもを見遣てあるこそ興しけれ。少し好き程に遣り過して、道の山里向き怜なるに、卯木垣根といふもの、甚疎々しう蓬かし氣に差し出たる枝どもなど多るに、花は未だ全も開け果す、蕃勝に見るを折せて、車の此方彼方などに挿たるも、桂などの萎たるが口惜きに、興しう覺ゆ。遠き程は得も通るまじう見る行先を、近う往もて往ば、然しもあらざりつること興しけれ。男の車の誰とも知ぬが、後に引き續て來るも、空なるよりは興しと見る程に、引き別る所にて、「峯に別る」と

言たるも興し。

れども、間もなくお歸りになる。女房の扇を初め、青朽葉の衣裳などが、非常に風流なのに、所の衆が、青色に白襲をちよいと引かけて居るのは、卯の花垣根の傍に居るやうで、時鳥も陰に隠れて居さうだ。昨日は、一つの車に大勢で乗つて、二藍の直衣、又は狩衣などをだらしなく着て、簾を取り外し、氣狂ひのやうに浮れて居た公達が、今日は、齋院の垣下(御相伴)で、晝の装束を立派に着、一人づつすまして、後ろに、殿上童を乗せて居るのもおもしろい。行列のお通りになつたあとは、何だつてあんなに慌てるのだらう、てんぐに、あぶなく怖しい程、前に立たうと急ぐのを、「さう急がないで、ゆつくと

見るものは

祭のかへさ 賀茂祭の翌日齋王、上の社より齋院に還らるゝをいふ。勅使を始め舞人陪従など供奉す○御賀茂詣 關白のなり、公事根源、關白賀茂詣の條に「天祿二年九月廿六日攝政右大臣謙徳公(伊尹)賀茂詣の事あり、これ攝關の人の賀茂詣の初めなるべきぞ、この事は必ず賀茂詣の前の日ある事なり。主人は乗車にて地下殿上の前驅あり。白妙の御幣、神室、唐櫃やうの物をかけもたしむ、琴持、菅笠、深沓といふものを召し具す、上達部車を列れ社前にて神拜あり葵、桂、を福宣持ちて参ればこれを冠にかく、東遊、求子、するが舞などあり」○臨時祭 こゝは賀茂のをいふ、十一月下の酉の日にあり。宇多天皇いまだ王侍従と申し奉りし時の神託により即位の後、寛平元年十一月より臨時祭を行はる、委しくは大鏡にあり○かさしの花 冠につけて飾りとする造花○青ずり 山藍にて摺る。舞人の袍には桐竹、陪従は桜欄○えうしたるやう「登」の音便にて、「みがきたるやう」なり○地摺袴 白絹に縹色などにて模様を描けるもの。(金泥は後世のものなり)袴の左右のわきは縫はずして組糸にて疎くあみて付く○氷かと驚く 袴の下に着る打衣の砧にて打ちて艶を出したるさまをいふ。色は紅色又は濃き紅○使 祭の勅使○柳の下がさね 表白、裏青○賀茂のやしろの木綿 古今集に「冬の賀茂の祭の歌と詞書ありて、藤原敏行の作、千早ぶる賀茂の社の姫小松、万代ふとも色はかはらじ」とある「姫小松」を「ゆふだすき」と寫し誤れるなるべし。(古今集戀二に「千早ぶる賀茂のやしろのゆふだすき、一日も君をかけぬ日はなし」の歌はあり。木綿は楮の皮の纖維を麻の如くにしたるものにて袴にかく)○御こし こゝは風聲をいふ○御綱の助 御輿の綱を執る大舍人助をいふ(大舍人は大舍人寮ありて禁中に宿直し雜事に使役さる、

りお遣り」と扇を上げて制するけれど、耳にも入れないから、よん所なく、少し廣い所に無理に車を止めさせて、立つて居るのを、供の者は気が気でなく、主人を憎らしく思つて居る。先へ出たがつて、まごまごして居る車などを見て居ると、おもしろい。あとの車を先に遣らせて、一寸静かになると、往來が山里めいておもしろい處へ、うつぎ垣根といふのが、まさくと茂つて、枝などがたくさん差し出て居るのを、花はまだ咲きよらない苦勝ちのを折らせて、車のあちこちに挿させたら、桂などが、萎んで見ともなかつたのに、風情が出た。遠くから見ると、とても通れさうもないのが、傍へ行くと、それ程でもなかつたのおもしろい。男の車の、誰だか分らないのが、あとから來るのも、何も來ないよりは興があるのに、引き別れる處で、「峯にわかる」と言つたのも、しやれて居る。

五月頃山里を逍遙すると、堪らなくおもしろい。澤水も、まるで、たゞ眞青

に見渡されるのに、表面は草ばかり茂つて居る傍をついて通ると、深くはなけれど、下に湛へて居る水が、人の歩くにつれて、飛沫を上げるのが、おもしろい。右左りにある生垣の枝などが、車に觸つて屋形に入るのを、いそいでつかまへて折らうとすると、手をはなれてひよいとね返つてしまつたのが惜い。蓬が車に押しひしがれたのが、輪が廻つて持ち上つた爲に、間近く漂ふ香も、誠に風情がある。

ひどく暑くて夕涼みでもする頃、薄闇くて何も、はつきり見えないのに、男車が前驅追つて來るのは、實におもしろい。普通の身分の人でも、後ろの簾を上げて、二人でも一人でも乗つて馳

頭、助、尤、屬あり）○姫まうち君「東、堅子」といふ、内侍司の被官にて行幸に供奉する女官、（まうち君は公卿の音便、その日に限り公卿に准じ御身近く供奉するよりの名なり）「紀朝臣季明」もしくは「河内宿禰友成」等の定まりたる名をりす○中少將 近衛の中將少將、供奉するなり○居なほり 居すまゐるを正しくする事○雲林院 紫野にあり、淳和帝の離宮、後に僧正通昭を別當に補せらる、櫻の名所なり○所の衆 藏人所の雑色にて陪從に出でたる者なるべし○青色 麴塵なり、黄の勝ちたる青○えんが「えが」とも言ふ。もとは地下の庭上に坐せるをいひしが轉じて殿上にも相伴することにいひ、又轉じて相伴役の名となれり「垣下斐塵」などいふ○心もとなく 供の心にちれたく思ふなり○峯に別る、古今集戀の部に忠孝「風ふけば峯に別る、白雲の、たえてつれなき君が心か」

五月ばかり山里に歩く、甚く興し。澤水も實に唯甚青く見え渡るに、表面は平然草生ひ茂りたるを、長々と徒爾に往ば、下は得な

らざりける水の深うはあらねど、人の歩むにつけて、飛沫り上たる、甚興し。左右にある垣の枝などの掛りて、車の屋形に入るも、急て捉て折んと思に、直と外れて過ぬるも口惜し。蓬の車に押し挫れたるが、輪の廻ひ立たるに、近う漂たる香も甚興し。

うへはつれなく 拾遺集戀四に「芦根はふ、うきはうへこそつれなけれ、下は得ならず思ふ心を」とあるを思ひて書きたるべし「うき」は「泥土」○得ならざりける水 俗に「堪らなく澤山ある水」○とはしりあげたる 蹴上げの水なり○輪のまひ立ちたる 實景おもしろし、車輪轉廻して蓬のつきたる處、眼の前に來るなり○かへたる香 車輪にひしがれたる蓬の香の漂ふなり。

甚う暑き頃、夕涼といふ時刻の、物の態など不明瞭きに、男車の前追は、言べき事にもあらず。平人も後の簾上で、二人も一人も乗せて走せて往こそ、甚涼し氣なれ。況て琵琶弾き鳴し、笛の音聞るは、過て往るも口惜く、然様なる程に、牛の鞞の香の奇う

けさせて行くのが、誠に涼しさうだ。まして琵琶を弾き鳴し、笛の音が聞えたりすると、通り抜けてしまふのも惜く、さういふ時には、牛の鞆しりあひの香のきつけない、へんなのまで、なつかしいのも、物狂ほしい。眞暗な闇夜に、前の車がつけて居る松明の煙りの香ひが、こつちの車に入つて来るのも、もしろい。

五日の薫物の、秋冬過ぎまであるのが、すつかり、白つぼく枯れて、汚らしいのを、引いてとると、その時の香が残つて、ぶんと漂ふのも、誠にもしろい。

よくたき染た薫物を、二三日忘れて居

嗅かぎ知ぬさまなれど、打ち嗅れたるが興おぼしきこそ、物狂ものぐるほしけれ。甚暗いじくらう闇なるに、前に灯したる松の烟の香の、車の中くるまうちにかゝへ入たる、甚興いさなし。

物のさまなどおぼめかしき 誰たそ被れ時なり○しりがひ 牛馬などの尻に絡めたる 紐○車の中 清少のなり。

五日の薫物の、秋冬過るまであるが、甚いう白み枯かれて汚あきを、引ひき折をり上あたるに、其の折の香残かて漂かたるも甚いう興おし。

五日 五月五日。

深く薫たき染しめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは打うち忘わしたるに、

たのに、着物を被ると、薫りが残つて居たのは、今いまたきよりもよい。

月が非常に明るい晩に、川を渡ると、牛の歩あむにつれて、水晶でも碎けるやうに、水がばつと散るのが、おもしろい。

大きくてよいもの(は)、

法師。菓子。家。餌囊。硯の墨。男の眼。これは余り細いと、女のやうだ。(と言つて)、又、金枕のやう(に大き)なのは、恐おそらしい。火桶。酸醬。松の木。山吹の花びら。馬も、牛も、逸物は大きいやうだ。

月のいとあかき 大きにてよきもの

衣きを引ひき被かきたる中に、煙の残のこりたるは、今いまよりも愛あたし。たきしめたる 竹を編をみて作り、中に薫爐くわを置き香をかき、籠の上に衣をかけて、たきしむるなり○けぶり 餘香の薫するなり。

川をわたれば 橋梁少き時代なれば、牛飼は、香をぬき袴はき上げて瀧踏たしつ、車を渡すなり。

大にて好きもの、

法師。菓子。家。餌囊。硯の墨。男の眼。余り細ほきは、女向をんな向きたり。又鏡またかまの如ごとならんは、恐おそし。火桶。酸醬。松の木。山吹の花はなびら。馬も牛も、良は大おほきこそあんなれ。

法師 大柄の方、威厳ありて尊げなるなり○くだもの 梅、なつめなどのはかなきよりは柿、梨、瓜などの盛られたるがよかるべし○餌囊 落くば物語に「大いなる餌袋に、白い米入れて、紙を隔て、くだもの乾物包みて」とあり、干飯なども入

短くてありぬべきもの 人の家につきよくしきもの

三九四

る○硯の墨 眉をかく墨など、區別していへるなり。上墨の大きなは價値あればなるべし○男の眼 徳川時代頃も「女の眼には糸を張れ、男の眼には鈴を張れ」などいへり、細きは優しく見ゆるなるべし、されば男の眼の細きは女らしくてよからずの意なり○かなまり「まり」は丸き意。水、酒など入るゝ器。それを金屬にて造りたるをいふ。俗に大きに過ぎたる眼を馬の眼などいへり、これは、それより誇張していへるなり○火桶 小さくては火多く入らず暖を取るに不足なり○ほづき ぬかづき草の實、圓くして鮮紅なる中の種を去り帯の孔を存して虚とし頬の中に含み、脹らめつ壓しつして女兒の遊びとするもの○山吹の花びら 一重の山吹の大きな花びらは、思ひても美し。

短い方がよいもの(は)、

急いで物を縫ふ時の糸。燈臺。下衆女の髪、これはきれいで短いのがよい。人の娘の口敷。

短くて有ぬべきもの、

疾の物縫ふ糸。燈臺。下種女の髪、美しく短くてありぬべし。人の娘の聲。

燈臺 余り高きは手元のもの暗くて見えす○下す女の髪 勤くに長きはうるさし、汚ろしからず短きがよしとなり○人の娘の聲 饒舌ならぬをよしといふなり。

人の家に、あつて、よいもの(は)、

厨。侍の部屋。箒の新しいの。懸盤。童女。はしたのもの。衝立障子。三尺の几帳。飾りをきれいにした何囊。傘。書

人の家に相應しきもの、

厨。侍の曹司。箒の新しい。懸盤。童女。奴婢。衝立障子。三尺の几張。装束美しく爲たる何囊。傘。昇板。棚厨子。提子。銚子。中盤。圓座。肱折たる廊。地火爐。繪描たる火桶。

板。棚厨子。提子。銚子。中の盤。圓座。廻り廊。地火爐。繪をかけた火桶。

は打敷に四本足をつけ、四方の縁の面に錦を張りたり○わらはめ、はしたのもの 美き童女の多き、はしたのもの、多き、共に富貴の相なるべし、源氏蝴蝶の巻に童女を蝶鳥に仕立て、龍頭鶴首の船にのせて紫上より秋好中宮に使をやらるゝ事あり、公卿の女の入内するにも、女房と童女の美きを多く伴ひたり○衝立障子 「障子」は「障つる子」にて衝立をいふ、障の如くにて裏あり席上に立て、物をへだつるもの○三尺の几帳 四尺のよりは取扱ひよく調法なるべし、(簾あり柱あり帷ありて坐側に置き内外を隔つるもの)○かきいた 漆にて塗り、備忘に書きつくる板○棚厨子 厨子は、もと料理場に置き食物をのする棚なりしが、轉じて塗物の美き二階棚を作り、坐側に置きて料紙書籍などをのするものなり○ひさげ 酒を盛りて盃に注ぐ器。注口あり銚子ありて提ぐるやうになりあり○銚子 酒を盛りて盃に注ぐ器。金銀にてつくる。注口の兩方にあるを兩口、片方なるを片口といふ○中の盤 食器を盛る臺盤(机の如き)の長盤(長さ八尺、二人以上の用)と小臺盤との間のもの。長さ四尺にして一人用なり○圓坐 臺盤の轉かといふ。藥、或は蒲、菅、蘭などの莖葉にて渦の如く圓く平たく編みたる褥○ひさ折りたる廊 折れ曲りたる廊。貴人の家ならではなかるべし○地火爐 底に石を据ゑたる圍爐裏。

往來で、小綺麗な男が、豎文の細いのを持つて急ぎ足で往くのに逢ふと、何處へだらうと好奇心をそゝる。又、小綺麗な童女などが、袖の眞新しくはなく、萎えたのを着て、つやくしい辰子に、赤土の澤山ついたのを穿いて、

ものへいくみち

他へ往く途に、清げなる男の、豎文の細やかなる持て、急ぎ往こそ、何地ならんと覺れ。又清げなる童女などの、袖 甚鮮麗にはあらず、萎びみたる履子の艶やかなるが、革に土多く附たるを穿て、白き紙に包たる物、若は、箱の蓋に、草紙どもなど入て持て往こそ、甚う、呼び寄て見ま欲けれ。門近なる所を渡るを、呼び

三九五

白い紙に包んだものや、でなければ、箱の蓋に草子などを入れたのを持つて往くのが、誠に風情があつて呼びよせて見たい。でも、門の傍など通るのを呼び込むと、不愛想に返事もしないで往つてしまふやうなのは、仕ふ人の様子も思ひやられる。

行幸は結構なもの(だけれども)、上達部や君達が、車なし(に、徒歩のお供)なのが、少しつまらない。

見すばらしい車に、粗末なうりをして乗つて物見をする人は、一番馬鹿らしい。説經(をきくにゆく)などは、罪障消滅の方だから丁度よい。それですら余りな、なりでは見ともないのを、

入るに、愛嬌なく答も爲で往く者は、使らん人こそ推量るれ。
履子 漆塗の足駄○糞土 黄赤の色あれば映土の約かといふ赤土、粘土。

行幸は愛たきもの。上達部、君達、車などの無きぞ少し淋々しき。

万の事よりも、忙しげなる車に、装束粗くて、物見る人甚誹し。説教などは甚好し。罪失ふ方の事なれば、其だに仍強なる體にて見苦しかるべきを、況て祭などは見でありぬべし。下簾もなく、白き單打ち垂などしてあめりかし。唯其の日の料にとて、車

まして祭などはそんな、なりをして見なくとも事だ。下簾もなく、白い單なんぞ垂れて居たりする。その目の爲にと、車も下簾も新調して、是ならわるくはあるまいと出かけてすら、立派な車など見つけると、何しに出て来たらうと思はれるのに、まして、(そんなのは)どんな氣がして見物して居るのだらう。下り上りする君達の車が、人込を押分けて(自分の)近くに立つ時など、きまつて、胸がときめく。場所のよい所に車を立てやうと思つて、供の者が急かすので、朝早く出かけて、待つ間が長いから、車の中で横にひろがつて坐つて見たり、立あがつたり、暑く苦しく待ちあぐむ中に、齋院の垣下に参つた殿上人や、所の衆や、辨や

も下簾も仕立て、甚口惜うはあらじと出たるだに、勝る車など見付ては、何しになど覺るものを、況て如何許なる心地にて、然て見るらん。下り上り歩く君達の車の押し分けて近う立つ時などこそ、心躍動はすれ。好き所に立んと急せば、疾く出て待つ程甚久きに、居張り立ち上りなど暑く苦く待ち困する程に、齋院の垣下に参たる殿上人、所の衆、辨少納言など、七八輛引き續て、院の方より走せて來ること、事成にけりと驚れて嬉けれ。殿上人の物言ひ越せ、所々の御前驅們に、水飯食すとて、棧敷の許に馬引き寄るに、名望ある人の子どもなどは、雑色など下て、馬の口取りなどして興し。然ぬ者の、見も入れぬなどぞ、最惜氣なる。御興の渡せ給ば、簾もある限取り下し、過させ給ぬるに、惑ひ上るも興し。其の前に立る車は、甚う制するに、「何どて立まじきぞ」と、強て立れば、言ひ煩で、消息などすること興しけれ。所も無く重りたるに、好き所の御車、人給來續て多く來るを、何處に立

少納言などが七八豪引き續けて、院の方から走らせて来るので、あゝやつとお渡りになるのだと嬉しい。殿上人が、何か言つてよこしたり、そこ此處の御前驅どもに水飯を食べさせるので、御前驅達が棧敷のそばに馬を寄せる。(同じ御前驅でも) 身分のある人の子息などは、(棧敷から) 雑色などが下りて、馬の口をとつて世話をしたりしておもしろい。つまらない人の子は、見

向きもされないのが氣の毒だ。御輿が渡御の時は、簾も皆な取り下ろし、御通りがすむと又ばた／＼と揚げるのもおもしろい。自分の前に車を立てるのを、やかましくとめると、「立てられない筈はない」と強情張るので、困つて、その車の主人に、手紙で言つたりするのが、おもしろい。ぎつしり立ち並んだ所へ、貴人の御車と、副車が何臺も来るのを、何處に立てるだらうと見て居ると、御前驅たちがばら／＼と下馬して、前に立て、あつたいくつもの車を、ばつ／＼と退けさせて、副車を立て續けるのが、實に大したものだ。追ひのけられた、つまらない車たちは、牛をかけて(どこかあいた所へ、ごろ／＼と) 揺がしてゆくなど、實にみじめだ。えらい方の車などは、さう押し退けなどはしない。きれいであつても、何だか田舎くさく、家來など、のべつに呼びよせ、乳呑兒を出して抱かせなどするのもあるものだ。

んと見る程に、御前驅ども唯下に下り、立る車どもを唯退に退させて、人給續て立ること甚愛たけれ。追ひ退られたる平凡車ども、牛かけて所ある方に動もて往など、甚困惑氣なり。聲望しきなどをば、得然しも押し挫すかし。甚美麗氣なれど、又鄙び賤く、下司も絶す呼び寄せ、乳子出し居るなどするもあるぞかし。

御前 上達部の前驅は四位五位の者つとむ〇難色 棧敷に在る主人の家來なり〇ひとだまひ 貴人が從者に給ひて用ゐしめらる、車。源氏榮卷に、六條御息所の車の「ひとだまひの奥に押しやられて物も見えず」などあり〇えせ車 貴人のは、あらぬ車なり〇牛かけて 牛を放し、車を楯に立て置きたりしを又牛を車につなぐなり。

「細殿に、ないしよで人を泊らせて、曉方笠をさゝせて歸した」といふ評判を、よく聞いたら、私の事だつた。地下ではあるが、下品でもなく、不都合呼ばりをされるほどの人でもないのに、何故だらうと思ふ處へ、上から御文を持つて来て、宮「すぐ返事を」と仰せになつた。何事だらうと見たら、大笠の繪をかい、人のからだはなく、たゞ手ばかりに笠をつかまへさせて、下に、

宮「三笠山やまの端

あけしあしたより」

(三笠の山の端が明るくなつた、その朝から)

とお書きになつてある。一寸した事にも、しやれた事ばかり遊ばず、かうい

ほそどのに便なき人なん

「廊に便なき人なん、曉に笠さゝせて出ける」と、言ひ出たるを、熟く聞ば我が上なりけり。地下など言ても、見易く、人に許されぬばかりの人にもあらざんめるを、奇しの事やと思ふ程に、上より御文持つて来て、宮「返事只今」と仰られたり。何事にかと思て見れば、大笠の繪を描て、人は見えず、唯手の限り笠を捉させて、下に、

宮「三笠山やまの端あけし朝より、

と書せ給り。仍些き事にても、愛たくのみ覺させ給に、恥く厭嫌き事は、如何で御覽せられじと思に、然る虚言などの出で来るこそ、苦しけれど、興しうて、他紙に、雨を甚う降せて、下に、
濟「雨ならぬ名のふりにけるかな。

然てや、濡衣には侍ん」と啓したれば、右近内侍などに語せ給て、笑せ給けり。

便なき人 不都合な人、来るべからぬ人なり〇ふりにけるかな 雨ならば降るもの

ふお方に、極りのわるい、いやな事は
お聞かせしたくないと思ふのに、そん
な、うそ咄が出て来るのが、つらいけ
れども、(遊ばし方の)おもしろさに、
他の紙に、雨のどしや降りの繪をかいて、
清「雨ならぬ名の、
ふりにけるかな。

(雨でもない名が、降るやうに言ひ古るされる。)
そこで、あの噂は、濡衣らしう御座います」と申上げたら、右近内侍などにお咄しになつてお笑ひになつた。

三條宮に居らつしやる頃、五日の菖蒲
の輿など持つて参つたり、薬玉をさし
上げたり、若い女房達や御匣殿などが、
薬玉をこしらへて、姫宮若宮におつけ
申上げたりする。美事な薬玉を他から
もさし上げたのに、青ざしといふもの
を人が持つて参つたのを、青い薄様を

なれども、それにもあらぬに名を觸れらるゝとなり「古り」の意にとらば「よくい
る」の浮名をうたはれる」の意となるべし○さてや 歌の意につゞけて、「して
見ると」なり、雨といひたれば、それに濡るゝ濡衣といふなり、伊勢物語にも「名
に負はゞあだにぞあるべきたはれ鳴、浪のぬれぎぬ着るといふなり」などありて、
無き名をうたはるゝを「ぬれ衣」といへり。

三條宮に在す頃、五日の菖蒲輿など持つて参り、薬玉参せなど、
若き人々、御匣殿など、薬玉して、姫宮若宮付させ奉り、甚美
き薬玉、外よりも参せたるに、青刺といふものを、人の持つて來た
るを、青き薄様を、艶なる硯の蓋に敷て、清是れ柵越に侍へば」
とて奉せければ、

清「皆人は、花や蝶やと急ぐ日も、我が心をば君ぞ知ける。」と紙

しやれた硯の蓋に敷いて、(その上に
載せて)清「これは柵越で御座います」
とさし上げたならば、

宮「皆人の花や蝶やといそぐ日も、
わが心をば君ぞ知りける」

と、紙の端を引きさいてお書きになつ
たのも、誠に結構な遊ばし方だつた。

と爲さる。今歳五歳○若宮 敦康親王。二歳○ほかよりも暮らせたるに 皇后になり○青ざし 薬のもやしを煎りて皮を去り、白に
て挽きて粉にしたるを固めたる菓子○薄様 鳥の子紙の薄く漉きたるもの○ませ越し 萬葉に「ませ越しに麥はむ胸の、のらゆれ
ど、なほし戀ふらくしぬびかれつも」(田家にて馬屋近き處に麥を干すを、馬は柵越しに頭をのべて食ふ。それを罵りて食ませぬ如
く、父母に罵られてもなほ戀しの意)とあるをもとにて六帖にも「ませ越しに麥はむ胸のはつゝに、及ばぬ戀もわれはするかな」な
どあり。こゝは、それらの歌によりて「麥」といふべきを「ませ越し」と代名詞にせるなり○皆人の花や蝶や 節句の花やかなる
事に人々の狂奔するを言はれしなり、この前年、十一月、左大臣道長の女十二歳にて入内、女御となる、この年(長保二年)二月廿
五日中午定子を皇后とし女御彰子を中宮と爲さる、二宮を並べ置かるゝ事の初めなり。皇后は廿五歳。天皇の寵遇は厚けれども父道
隆は六年前已に歿し、その後兄伊周の配流の事等あり、中宮は當時父道長の威權赫々たれば、榮花物語に「この御方、藤壺におはし
ますに、御しつらひも、玉も少し磨きたるは光のどかなるやうもあり、これは照り耀きて中略といひみじうあさましう、さまことな
るまでしつらはせ給へり」とあり、さまざま悲しき御思ひあるべし、されば「花やかなるものよりも、この青刺のやうに飾らぬ寂し
きものこそ今の氣分に合ふ。この心持はあなたが知つて居る」と清少に言はれしなり○紙のはし 敷きたる薄様のはしなり。

の端を引き破て書せ給るも、甚愛たし。

三條宮 中宮の御所。もと中宮大進平生昌の三條の宅なり。史料綜覽、長保二年三月

廿七日の條に「皇后、前皇后大進平生昌の第二出御アラセラル」とあり(ある書に
長保元年八月九日と註しあるは、この前年の敦康親王御産の時と誤れるなり。前年
十一月七日皇子敦康を御産あり、翌年打つゞき御懐妊、十二月皇子内親王を御産、
その時に崩せられしにて、これはその五月の事なり。同書長保二年五月五日の條に
「菖蒲輿、薬玉等ヲ進ム」とあれば主上と共に皇后の方にも奉りしなるべし、奥に
菖蒲、艾を積みて奉るを、屋根に登き、薬玉等に用ひらる○御匣殿 中宮の御妹原
子なり○姫宮 脩子。長徳二年十二月十六日誕生、翌年十一月十四日歿して内親王

十月十日余りの月が大層明るいので、歩いて見物しやうと、女房十五六人ほど、皆な濃い(紫)着物を上に着て、髪を引込めた中に、中納言さんが、紅の張つたのを着て、頸の處から髪を前の方へ振り越して居なさるので、「いやだ事」と言て、「まあそつくりだ靱負佐だ」と名を付けた。後ろから笑つてゆくのも知らずに居る。

成信中将さんは、恐ろしく人の聲を聞き分ける人だつた。同じ所に大勢居ると、ふだん聞かない人の聲は一向分らない。ことに男は、人の聲も顔も、よくは見分けたり聞き分けたりしないものなのに、どんな小さな聲で言つても、上手に聞きあてなかつた。

大藏卿さん位耳つばやの人はない。全く蚊のまつ毛の落ちる音も聞きつけさうな人だつた。職の御曹子の西面に居た時分、大殿の新中将と咄をして居たら、傍に居た人が、この中将に、「扇の繪の事をお話しなさいよ」と小聲でいふから、清「今、あのお人が立つてから(になさい)」と、そつといふのを、當人すら聞きつけないで、「何です、何です」と耳を傾げるのに、(大藏卿は)手を拍つて「憎らしい、そんな事をいふと、今日は一日立たない」と被仰る。どうしてお聞きなかつたらうとあきれてしまつた。

硯が汚らしく塵だらけで、墨は曲げてだらしく磨りへらして、短くなつた

大藏卿 硯きたなげに塵ばみ

十月十日余りの月甚明かに、歩いて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆濃き袷を上に着て、引き陰つゝありし中に、中納言の君の紅の張たるを着て、頸より髪を掻い越し給りしかば、「可憎きぞ」とて、「甚酷も似たりしかな。靱負佐」とぞ、若き人々は命名たりし。後に立て笑も知すかし。

あたらしきぞ「惜むべし」ならで「いやな事をする」の意。「折角なのに」の意も籠らば「あたら」の語も當るべし○靱負佐 淺緋の衣を着くる故なり。

成信中将こそ、人の聲は甚う好う聞き知り給しか。同じ所の人々の聲などは、常に聞ぬ人は更に得聞き分す。殊に男は、人の聲、面をも、見分き聞き分ぬものを、甚う密なるも、偉う聞き分き給しこそ。

人の聲おもてをも「人の聲をもてなも」としたる書あり、さらば「聲をも手蹟をも」の如くも思はるれど、女房たちの面の意なるべしと、その方をとる「お」と「な」の假字を、おほよそに用ゐたるは古き書の常なり。

大藏卿(正)ばかり耳敏き人なし。實に蚊の睫の落る程も聞き付け給つべくこそありしか。職の御曹子の西面に住し頃、大殿(道)の新中将(成)と物言に、傍に在る人、此の中將に、扇の繪の事言へと密語ば、清「今、彼の君立ち給なんにを」と密に言ひ入るを、其の人だに得聞き付で、「何とか、何とか」と耳を傾るに、手を拍て「正」憎し。然宣ば、今日は立じ」と宣ふこそ、如何で聞き給つらんと、驚しかりしか。

硯汚氣に塵ばみ、墨の片つ方に亂次く磨り平めかし、勞多きに成にたるが、夾竹などしたるこそ不安しと覺れ。万の調度は勿論に

のに、夾竹などしたのが、磨りにくさうだ。何の道具でも同じだけれども、女は、鏡や硯に性分がよく現はれる。(鏡の)覆輪の間に塵がつもつて、すつぽかしてあるのなど、實に見ともない。男はまして、文机を清らかに拭いて、重ねか、二つ懸子の硯の上品なのに、蒔繪の様子も仰山ではなけれど美しく、墨や筆の様子も、人が、まあよいと眼をとめるやうなのがよい。どうでもよいと黒塗の蓋の一方とれたのに、硯は、墨を摺つた所だけ少し黒くて、あとは一杯塵がたまつて、一生たつても拂ひ切れさうもないのに、水は箱の中にこぼれて、青磁の水入の龜の口が缺けて、頸一杯穴に見えて見ともないなども平気で、人の前を出してあ

て、女は鏡。硯こそ心の程見るなめれ。置口の間に塵居など、打ち捨たるさま此上なしかし。男は況て文机清げに押し拭て、重ならずば二つ懸子の硯の、甚相應しう、蒔繪のさまも、特とならねど美うて、墨、筆のさまなども、人の眼留ばかり仕立たるこそ興しけれ。兎あれど斯れど同じ事とて、黒箱の蓋も一方落たる、硯、僅に墨の居たる、塵の此の世には拂ひ難げなるに、水打ち流て、青磁の龜の口落て、首の限穴の程見て外見醜きなども、平然人の前に差し出かし。人の硯を引き寄て手習をも文をも書に、「其の筆な使ひ給そ」と言れたらんこそ、甚忙しかるべけれ。打ち措んも外見醜し。仍使も生憎なり。然覺る事も知たれば、人の爲るも言で見ると、手蹟など巧もあらぬ人の、有繋に物書ま欲うするは、甚全く使ひ固たる筆を奇しの如に、水勝に差し濡して、「こはものやあり」と假字に細櫃の蓋などに書き散して、横方に投げ置たれば、水に頭は差し入て伏せるも、憎き事ぞかし。然ど然言ん

る。又、人の硯を一寸引よせて、無駄書きなり手紙なり書いて居ると、「その筆をつかはないで下さい」と言はれたのは、ほんとうに不愉快だ。やめるのも見ともなし、使ふのも意地張りのやうなり。その覺えがあるから、人がさういふ事をする時も、咎めないで見て居ると、上手でもなくせに、書きたがる人に限つて、折角使ひ固めてある筆を、へんてこに墨をどつぶりつけて、「こはものやあり」と、假字で細櫃のふたなどに書き散して、筆を横倒しに置くので、筆の尖が墨に浸つて居るのも腹が立つ。けれども、さうも言へず、だまつて見て居る。又何か書く人の前に居て。「あゝ暗。奥へ寄つてよ」と言はれたのも、いやなものだ。

やは。人の前に居たるに、「噫暗。奥寄り給へ」と言たるこそ、又佻しけれ。差し覗たるを見付て、驚き言れたるも、思ふ人の事にはあらずかし。

筆多きになりたるが、つかひ古したるなり〇つゝし、短き墨をすりよくする爲に竹にて作り墨をはさむものなり、この「筆多き」の處を一本に「かしら大きになりたる筆に笠さしなどしたるこそ」とあり、さらばこれも使ひ古して毛のばさけたる筆に、むりに笠をさしたるにて筆の事をいへり、いづれが清少のものとの文と知り難ければ、その方をもこゝに記しておく。されども、あとの處に「心もとなしと覺ゆれ」とあるは、墨のすりにくからんの意に聞ゆる上に「筆多き」云々の方、古體の書き方と見ゆ。「かしら大きに」云々と筆の事をいひたる方は、後人の改めしものならんか〇おき口、硯箱の縁に金銀など沃懸けあるをいふ〇かさね、重ね硯箱なり〇かけ子、他の匣のふちにかけて、その中にはまるやうになり居る〇とあれどかゝれど、「どうだつてかまはない」の意〇黒箱のふたも、かたし落ちたるに、一本「黒塗のふたわれたるに、かたし折れたる硯すみて」とあり、これも古體なる書き方をとる。かたしは、ふたの一方の縁なり〇すゞり、この下に一本「すみて」〇墨の、この下に一本「すられたるほど些黒みて、その外は此の目にしたがひて入りたる」とあり、例の後の人の詞を足したるにもや、これも詞少き古體の方をとりたり〇居たる、墨がすられあるなり〇ちりのこの世、塵といふ字を硯の塵と、塵の浮世と両方に用ゐると見る方、簡約にしておもしろし〇水打ちながして、箱の中に水のこぼれ居るなり〇あき磁、磁器の製に、文なくして淡緑又は淡藍の釉を全體にか

覗いたのを見つけて、びつくりして、さう言ふのも面白くない。好きな人からなら、何と言はれてもよけれど。

事新しく言ふでもないが、手紙ほど、よいものはない。ひどく遠方に居る人が、堪らなく氣にかゝつて、案じて居ても、手紙を見ると面と向つたやうな氣がする。大したものだ。自分の思ふ事を書いてやると、向ふまでまだ行き着かない中から、満ち足りた心地がする。手紙といふものがなかつたら、どんなにくしや／＼と眞くら闇の心持がするだらう。いろ／＼の事を考へて、誰それにやらうと、細々と書いておくと、あひたさも慰む氣がするのに、まして返事を見れば、壽命が延びさうだ。これはさうあるべき事だ。

けたるもの、「せいじ」ともいふ〇口 水入の口〇首の限り 龜の首だけ穴となりたるなり、水入の口ある龜の首の落ちたるさま〇こはものやあり 「この細腰に何が入つて居るか」なり。ある本「ものややり」とあり、誤りなるべし。一本には「つれなく人の前にさし出すかし」までにて「人の聲」云々と別の事に移りありて、このあたりはなし。

珍しといふべき事にはあらねど、文こそ仍愛たきものなれ。遙なる世界に在る人の、甚く不安く、如何ならんと思に、文を見れば、唯今差し向たる如に覺る、甚き事なりかし。我が思ふ事を書き遣つれば、彼處までも行き着ざるらめど、快適く心地すれ。文といふ事なからましかば、如何に鬱鬱く昏れ塞る心地せまし。万の事思ひて、其の人の許へとて、細々と書て置つれば、覺束なさを慰む心地するに、況て返事見れば、命を延べかんめる。實に道理にや。

うまやは、

梨原。ひぐれの驛。望月の驛。野口の驛(がよ)。すまの驛(は)、あはれな事を聞いて居たのに、又あはれな事があつたから、それこれいよくあはれだ。

夫木集「時鳥きこゆることもなし原の、うまや／＼と待ち明しつる」(寶隆)〇日暮驛 在所不明〇望月驛 在所不明、いづれも名なき、好しく思ひたるなるべし〇野口驛 これも諸所にあり〇須磨驛 他本おほむれ「やまのうまや」とあり。一本による。須磨ならば朝臣の謫せらるゝ所となりたれば、哀れる事實を清少の見聞する事ありたるべければ、よく聞えたり。き、置きたりしは過去にありし事、その上に又哀れる事を實際に見たれば、とり集めてあはれなるとなり。

岡は、

船岡。片岡(がおもしろい)。鞆岡は、笹の生へて居るのが、しやれて居るのだ。かたらひの岡だの、人見の岡(だのも、おもしろい)。

驛は、

梨原。日暮驛。望月驛。野口驛。須磨驛。哀なる事を聞き置たりしに、又哀なる事のありしかば、仍取り集て哀なり。

岡は、

船岡。片岡。鞆岡は、笹の生たるが興しきなり。談ひの岡。人見の岡。

船岡 山城紫野の西にあり、拾遺集「船岡の野中になてる女郎花、わたさぬ人はあらじと思ふ」一條天皇の即位二年に圓融上皇に、に子の日の宴を催され、平兼盛、紀時文、清原元輔(清少の父)など参列の榮を得たり(その日曾根好忠、永原滋節等、召なきに参じて追ひ立てられし事あり)〇片岡 大和にあり。朝原も同所にあり、續後撰「かた岡のあしたの原の雪きえて、草はみどりに春雨ぞふる」〇鞆岡

うまやは 岡は

山城乙訓郡開田村の南にあり。神道百首「いざらばわが柄岡の篠の葉を、手毎に折りて手向にもせん」○かたらひの岡 かつらひの峯ともいふ。大和國十市郡にあり、中大兄皇子（天智天皇）と中臣鎌子連（鎌足）と入鹿討伐の謀を談はれし處なればいふ。談武峯ともいふ。一本かたひらの岡とあるは誤寫なるべし○人見の岡 山城嵯峨にあり。住吉物語に嵯峨野へ子日に出でたる條に「手もふれで今日はよそにて歸りなむ、人見の岡の松のつらさよ」

社は、

布留の社。生田の社。立田の社。はなふちの社。みこもりの社がおもしろい。杉の御社（は、さぞ）靈驗があらうと、おもしろい。事のまゝの明神は、誠に頼もしい。「さのみ聞きけん」と言はれなかつたのがおもしろい。蟻通の明神は、貫之が、馬の病氣した時、この明神がお癒し下さらうと歌を詠んで奉つたらば、驗のあつたのが誠におもしろい。此の蟻通とつけた縁起は、ほんとうかどうか知らぬが、昔ある帝が、たゞ若い人ばかり御好きで、四十歳になると殺

社は、

布留の社。生田の社。立田の社。はなふちの社。みこもりの社。杉御社の社。効驗あらんと興し。任事明神甚頼し。然のみ聞けんと言れ給んと思ぞ甚興しき。蟻通明神、貫之が馬の病けるに、此の明神の止せ給として、歌詠て奉りけん、止め給けん甚興し。此の蟻通と命名たる意は、實にやあらん。昔在しける帝の唯若き人をのみ思し召て、四十に成ぬるをば、放逐せ給ければ、他の國の遠に往き隠れなどして、更に都の中に然る者なかりけるに、中將なりける人の、甚き時の人にて心なども賢かりけるが、七十近き親兩人を持ちけるが、斯う四十をだに制あるに、況て甚恐しと懼ち

しておしまひに成たので、遠い他國に隠れたりして、都の中には、一向年寄が居なくなつてしまつた處、中將だつた人が、威勢が盛んで性質も賢かつたが、七十近い兩親を持つて居た。四十ですらなくしてしまふ掟だのに、どうしやうと（親が）心配するのを、非常に孝行な人で、「遠方へはやれない。一日に一度は見ないでは居られない」と、毎晩こつそり、家の中の土を堀つて、その中に家を建て、そこに兩親を隠して置いて、時々往て見る。そして、公儀にも知人にも、没つたと知らせた。（一たい）家の中に居る者を、生きやうが死なうが、かまひはなさうなものだが、いやな時代もあつたものだ。中將などを子に持つて居た處を見ると、親は上達

社は

騒ぐを、甚う孝ある人にて、遠き所には更に住せし。一日に一度見では得あるまじとて、密に夜々家の内に土を堀て、屋を建て、其に籠め居て往つゝ見る。公儀にも人にも亡せ隠れたる由を知らせてあり。何てか家に入り居たらん人をば、知でも在せかし。憂てありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、中將など子にて持りけんは。甚心賢く万の事知たりければ、此の中將學識あり用意賢くして、時の人に思すなりけり。唐土の帝、此の國の帝を、如何で謀りて、此の國討ち取んとて、常に試み、争議をして送り給けるに、艶々と圓に美し氣に削たる木の二尺ばかりあるを、「是が本末何處ぞ」と問ひ奉りたるに、惣て知べきやうなければ、帝思し召し煩たるに、最惜くて、親の許に行て、中將斯々の事なんある」と言ば、親唯急からん川に、立ながら横方に投げ入れ見んに、廻轉て流ん方を末と記して遣せと教ふ。參内て、我知り顔にして中將「試み侍ん」とて、人々具して投げ入たるに、頭に

部でもあつたらう。中々才があつて、何でも心得て居た。この中將も、若いけれど才があり、萬事に堪能で、帝の御氣に入りだつた。唐土の帝が日本の帝をどうかして欺して、日本國を討ち取らうと、しどう何か難題をこしらへてはよこして居たが、ある時、つやつやと眞丸く削つた木の二尺ほどのを、「これは、どつちが本です」と尋ねて来たが、どう分りやうもないので、帝が困つて居らつしやつた。それが、御いたはしさに、親の處に往つて、

「中將」かうかうの事が御座ります」といふと、親「何でもない。立つたまゝで、流れの急な川に、木を横仆しに投げ込んで、その木が引くり返つて、先になつて流れてゆく方を末と書いてやりなさい」と教へた。參内して、自分の知慧のやうにして、「試して見ませう」と、皆なをつれて往つて投げ入れて、先になつて往く方に、しるしをつけてやつたら、教への通りだつた。又二尺ほどの蛇二本を、「これは、どれが男ですか女ですか」と奉つた。これも又、誰も知らない。例の通り中將がきゝに往くと、親「二尾並べて、尾の方に細いずはえを傍にやつて、尾を動かす方を雌と思へ」と言ふので、すぐ又その通りに、内裏で、したらば、ほんとうに、一尾の方は動かさず、一尾は動かしたので、又しるしをつけてやつた。暫くたつて又、七曲に曲りくねつた玉の中を通つて、左右に口のある小さい玉を奉つて、「これに緒を通して

して往く方に、印を付けて遣したれば、實に然なりけり。又二尺許なる蛇の、同じ如なるを、「是は孰か雄雌」と奉れり。又更に人得知す。例の中將往て問は、親「二を並べて、尾の方に細き楚を差し寄んに、尾働さんを雌と知れ」と言ければ、即て其を、内裏の裡にて然爲ければ、實に一方は動かさず、一方は動しけるに、又印付けて遣しけり。程久うて、七曲に踊りたる玉の中通りて、左右に口明たるが、小きを奉りて、是に緒通して給らむ。此の國に皆爲侍る事なり」と奉りたるに、甚からん物の上手不用ならん。許多の上達部より始めて、在と在る人知すといふに、又往て斯なると言ば、大なる蟻を二尾捉て、腰に細き糸を付け、又其に今少し太きを付けて、彼方の口に蜜を塗て見よ」と言ければ、然申て蟻を入たりけるに、蜜の香を嗅て、實に甚疾う、穴の口に出にけり。然て其の糸の貫れたるを遣したりける後になむ、仍日本は偉かりけり」とて、後々は然る事も爲ざりけり。此の中將を甚き人に思し

召て「帝」何事を爲、如何なる位をか賜るべき」と仰られければ、中將「更に官位をも賜らじ。唯老たる父母の隠れ亡て侍るを尋て、都に住する事を許せ給へ」と申ければ、甚う易き事とて、許れにければ、万の人の親是を聞て悦ぶ事甚かりけり。中將は大臣までに成せ給てなんありける。然て其の人の神になりたるにやあらん、此の明神の許へ詣たりける人に、夜現れて宣ける。「七曲に曲る玉の緒を貫て、蟻通とも知すやあるらん。」と宣ける」と人の語し。

ふるのやしる 大和國布留郡石上にありて同村並に四十八村の氏神なり素戔尊、出雲國にて八岐の大蛇を斬り給ひし劍を天羽斬と號して、こゝに祀りたりといふ、蛇を羽といふ故なりとぞ。拾遺集「いそのかみ、ふるのやしるのゆふだすき、かけてのみやは戀ひんと思ひし」○いくたの社 攝津武庫郡、生田宮村にあり祭神稚日女尊。夫木集「尋ねつ、生田の池に玉藻刈る、袖より秋の露も置きけり」○立田社 大和國生駒郡立野村にあり級長戸邊命(立田姫)級長津彦命(風神といふ)を祀る。立田山、立田川立田社など名高し、古今集「たがみそぎ夕つげ鳥か唐ころも、立田の山にをりはへてなく」○はなふちの社 陸前國宮城郡花洲濱にありといふ。一本には「いなふち」の社となりあり○みこもりの社 大和國吉野、丹治村にあり六

下さい。私の國では誰でもします」と申上げた。ふだん功者な人も一向役に立たず、多勢の上達部を初め誰も誰も知らないといふので、又親の處に往つて、かやう／＼と咄すと、親「大きな蟻を二尾つかまへて、腰に細い糸をつけ、又それに、もうちつと太いのをつけて、向うの穴に蜜を塗つて御覽」と言ふので、その通りを申上げて、蟻を入れた處が、蜜の香ひをかいで、ほんとうに、早速に、穴の口に出た。そこで、その糸の通つたのをやつた處が、やつと日本は中々賢いと、その後は何も言つて來なくなつた。帝は、この中將に、すつかり御感心になつて、帝「どいふ褒美をやつて、どんな位をやらう」とおたづねになると、中將「官位は一つ

帖に「片戀は苦しきものと水隠の、神にうれひて知らせてしがな」他本「みくりの社」とあれど大方は京都附近のなるべしと、この方をとる○杉のみやしる 大和國三輪山をいへるか、「三輪の山しるしの杉」「みしめ引く三輪の杉むら古りにけり」「春くれば杉のしるしも見えぬ哉、霞そたてる三輪の山もと」など三輪をいふには必ず杉をいへれば。さらば祭神は大己貴命(美彥雄命の御子)なり○このまの明神 遠江國周智郡にある一ノ宮なり、「言の隨」にて願言のまゝに、かなへ給ふを頼もしいふなり○さのみき、けむ 古今集評語歌に「れぎ言をさのみ聞きけむ社こそ、はては歎きの森となるらめ」言はれ給はむと思ふぞ」は「言はれ給ひけんぞ」とあるべき處なり、例の誤寫にや○あり通しの明神 和泉國泉南郡にあり貫之集に「紀の國に下りて、かへり上る道にて俄に馬の死ぬべく煩ふ所に、道ゆく人立ちとまりていふやう、「これはこゝにいまする神のし給ふらむ、年頃やしるもなく、しるしも見えぬぞ、いとかしこくいましける神なり、さき／＼かやうに煩ふ人ある所なり祈り申し給へよ」といふに、みて、ぐらもなければ何業すべくもあらず、たゞ手を洗ひ、ひざまづき伏し拜むに、神おはしげもなしや「そも／＼何の神といふ」といへば、「ありとほしの神となむ申す」といふなき、て詠みて奉りける、その驗に馬の心地止みにけり「かきくもりあやめもしらぬ大ぞらに、ありとほしをば思ふべしやは」云々(蟻通しに「有り」と星)をかけたる歌なり)○まことにやあらむ「事實はどうか分らぬ」の意○思しめして「お好きにて」なり○さる者「老いたる者」なり○制ある「禁制あるに」なり○なぞてか 俗に「何だつて」なり「家の中に居る者が、何歳だとして、御存じなくて在られてもよき／＼な事を」の意。

も頂きますまい。只、年とつた父母が、何處かへ往つてしまひましたのを探し出して、都に住ませる事をお許しを頂きたい」と申たので、「それは何でもない事」とお許しになつた。何處の親もこれをきいて悦ぶまい事か。中將は後々大臣までになされた。その中將が神になつたのと見えて、この明神の社へお詣りをした人に、夜あらはれて、「七曲に曲れる玉の緒を貫きて、

蟻通しとも知らずやありけむ。」

(七まがりにも曲つた玉に蟻で糸を通して、それ故、蟻通明神と世人がいふのを、知らないで居るかしらん)と被仰つたと咄した人があつた。

降るものは、

雪、霰(が)おもしろい。霰はいやだけれど、雪の眞白なと交つて降るのは、よい。雪は檜皮葺(に降つたの)が實に美しい。少し消えかゝつた時や、又澤山には降らないのが、瓦の目毎に入つて、黒く眞白に見えたの(も)、實によし。時雨(もよし)。霰は板屋。霜も板屋(によく)庭(によし)。

降るものは

降るものは、

雪。霰は憎けれど、雪の眞白にて交たる興し。雪は檜皮葺甚愛たし。些消え方になりたる程、又甚多は降ぬが、瓦の目毎に入つて、黒く眞白に見たる、甚興し。時雨、霰は板屋。霜も板屋。庭。ひはだぎき 檜の皮にて葺きたる屋なり、○黒う 瓦のなり○ましろ 雪なり○しぐれあられ 一本に「時雨とあられば」とあり、時雨は、秋冬の際に且つ降り且つ晴る、小雨の名。折々はら／＼と打つは、板屋の方風情あるべし。

日は 月は 星は

入日がいよいよ。入りきつた山際に、光だけ残つて赤く見えるのに、薄黄ばんだ雲が棚引いて居るのは實によい。

月は、

有明(が)、東の山の端に、細く出る時がよい。

星は、

すばる。牽牛。明星。ゆふづゝ。(がよい)夜這星がなかつたら、(星といふものは)なほ(よからう)。

ともいふ。日出前及び日没後に殊に輝くにより、宵の明星、あけの明星などいふ。こゝはあけの明星をいへり。(ゆふづゝは後に擧げたり)○ゆふづ、宵の明星をいふ。夕續の義にて、翌日の朝に續く意なり(金星)○よばひ星 婚星の義。その轉行する事、男の

日は、

入日。入り果ぬる山際に、光彩の仍留て、赤う見るに、薄黄ばみたる雲の搖曳たる、甚興なり。

月は、

有明、東の山端に、細て出る程、興なり。

ありあけ 月は空にありながら夜の明るる事、十六日以後の月にいふ○東の山の端に「宮仕人の里なども」の條に「冬の夜を居明して、人の出でぬる後も見出だしたるこそ、なかしけれ。有明などは、ましてなかし」とある如く、この頃の人は起臥の時間不規律にて、廿日すぎの有明月の出づるを見る事も多かりしなるべし

星は、

すばる。牽牛。明星。長庚。流星をだに無らましかば、況て。

すばる 星の宿の名。七星相聚り統べ括られたる如き象の名、七曜星なり○よばひ織女星の夫とす。牽牛星といふ○明星 金星をいふ。一に長庚星、又、大白星

女に就くが如き意といふ。流星をいふ

雲は、

白い(と)、紫(がよい)。黒い雲もおもしろい。風が吹く時の雨雲(だの)、明けはなれる時の黒い雲が、だん／＼白くなつてゆくのも、誠におもしろい。「朝に去る色」とか文にも作つてあつた。月のきら／＼と明るい上に、薄い雲のかゝつたのは實によい。

騒がしいもの(は)、

はねる火。板屋の上で、烏が、齋の生飯をたべるの。十八日に清水にお籠りし合つたの。(又)暗くなつてまだ火もつけない時分、あちこちから大勢、人が來合せたの。まして、遠い所や他國か

雲は さわがしきもの

雲は、

白き。紫。黒き雲興なり。風吹く折の天雲。明け離る程の黒き雲の、漸う白う成り行も甚興し。「朝に去る色」とかや、文にも作りけり。月の甚明き面に薄き雲、甚興なり。

あしたに去る色 本文の出所不明なり、「且爲三朝雲」暮爲三行雨この巫山の故事に據りたる句にてもあるべし。

騒がしいもの、

走り火。板屋の上にて、烏の齋の生飯食ふ。十八日清水に籠り合つた。暗なりて未だ燈も灯ぬ程に、外々より人の來集りたる。況て遠き所、他國などより家の主人の上りたる、甚騒し。近き邊に火出で來ぬといふ。然ど燃は付ざりける。物見果て、車の歸り騒

ないがしろなるもの

ら、家の主人が戻つたときたら、大騒ぎだ。近所に火事が出来たといふの。けれど騒いだだけで、燃えつきはしなかつた。物見がすんで、澤山の車がどか／＼と歸る時も、(騒ぎだ)。

だらしないもの(は)、

女官達が髪上げた姿。唐繪の皮の帯の裏。聖の動作。

ども俗にだらしく見苦しきなるべし○唐繪の草の帯のうしろ。表の美きに比例して裏の見苦しきなるべし、錦の裏に同じ○ひじり世に阿れる心なければ行ひの放埒なるなり。宇治拾遺に「増賀上人とて尊き聖おはしけり、ひとへに名利をいとて頗る物狂はしくなん、わざと振舞ひける」とて三條皇太后落飾の戒師に召されし時も妄言を吐き、簀子に脱糞などしたり。

蔑なるもの、

女官どもの髪上げたる姿。唐繪の草の帯の後。聖僧の動作。

女官どもの髪上げたる。女官は女嬋などの如き下級の女房なり、同じ髪上げた姿なれば

ぐ程。

はしり火。はれ火。衣などにつきてはさわぎなるべし○ときのさば。齋は午前中の僧の食事をいふ、午後の是非時といふ。食膳に向ふ時、衆生飯とて飯の上部を密にて七粒とり、飲食の祖神に供ふるを、散飯又生飯といふ、食後にその生飯を屋上に打ち上ぐるなり○十八日。毎月觀世音の縁日なり、多人數籠り合ひたるは騒がしかるべし○くらくなりて。夕暮になりてなり。觀音の處にはあらず別の事なり○家のあるじの上りたる。任國などよりあるじの歸りたる時の騒がしさなり○物見はて祭など見物し果て、なり。

詞づかひの失敬なもの(は)、

宮の女の祭文讀む人。船頭。雷鳴の陣の舍人。(それと)相撲(だ)。

言語蔑げなるもの、

宮の女祭文讀む人。船漕ぐ者們。雷鳴陣の舍人。相撲。

厄拂のやうに家々にて行ひしにてもあるか。拾芥抄に宮昨祭文として「維永承年歲次其月壬午、年ガ中ニ月ヲ擇ビ、月ガ中ニ日ヲ擇ビ、日ガ中ニ時ヲ擇ビテ、掛、長支宮、咩五柱笠間ノ廣前ニ從四位上行、官姓名、恐美恐見モ申給ク、絹ハ乍レ編、綿ハ乍レ結、進物ハ高坏ガ彌高々ニ、飯ノ方毛利加ニ清ク、酒ノ草ニ、堅酒ノ堅ニ、橋ノ忽ニ、餅ノ持テ榮エ、鯛ノ平ニ、鱒ノ彌益々ニ、鱒ノ好々ニ、鮑ノ片思ニ、鰻ノ振寄テ、養ノ庭佐良須、殿ク聞食シ、受納給テ、壽長ク身全クシテ、天地ノ不祥、内外ノ惡事未レ前以前ニ、豫テ遠ク拂セ退ケ給テ、官辭如ク意ニ叶シメ給テ萬世ニ子孫繁昌ノ門ト有シメ、夜ノ守リ、日ノ守リニ、常磐堅磐ニ、守リ幸ヘ給ヘトカシコクモ申ス」と載せあり(五柱笠間は大宮之寶神に他の四神を合せて稱せしなり)○船こぐ者ども。船頭は後世も聲高く詞あら、かなり○すまひ。他本に「とれりすまひ」と前の句に續けたるもあれど、一本に「神なりの陣の舍人、ふねこぐ者ども、宮のべのさいもんとむ人、すまひ」とあるに徴して「とれり」にて切りたる本に従ふ、すまひの詞もあしきものなりしなるべし。かんなりの陣は公事根源に「昔雷の聲三度高く鳴り傳れば、近衛の大將以下次將まで弓箭を帶して御殿(清涼殿)の孫廂に候して御門を守護し奉りしなり、將監以下は蓑笠をして同じく雨殿(紫宸殿)に候ふ、これを雷鳴の陣とは申すなり」とあり自然勇猛の舍人を撰ぶやうになりて物言ひも荒々しきなるべし。

小さかしいもの(は)、

此頃の三才兒。乳兒の祈り(に)、祓などする女たちが、祓の材料を(病家から)もらつて來て祈りの物など作るのに、

賢きもの、

今様の三年子。兒の祈禱、積などする女ども。物の具乞ひ出て、祈禱の物ども造るに、紙數多押し重て、甚鈍き刀して切るさま。

ことばなめげなるもの。さかしきもの

紙を澤山重ねて、ひどいなまくらで切る様子が、てんで切れさうにもないのに、その爲の双物だからと、自分の口ま
で曲げて、うん／＼言つて切り、切目の多い紙を幣に掛け、竹を切つたりして、ありがたさうにこしらへ、それを振つて、えらさうに拜む。そして「何の宮様、又はどこの若様が御大病であつたのを拭いてとつたやうにお癒し申したから、かづけ物を澤山に頂だいした」とか、「誰それをお召しになつたけれど験がなかつたから、私ばかりすつとお呼びになる。ありがたい事だ」となど
と咄すのもおもしろい。又下衆の家の女房は、小さかしいものだ。極つて馬鹿な亭主が連添つて居るのもよい。でも賢い夫でも、やつぱり世話をやいて教へて居る。

上達部は、

東宮大夫。左右の大将。權大納言。權中納言。宰相中將。三位中將。東宮權

上達部は、

春宮大夫。左右の大将。權大納言。權中納言。宰相中將。三位中

一重たに斷べくも見ぬに、然る物具となりければ、己が口をさへ引き曲て押し切り、切目多るものども幣かけ、竹打ち切などして甚神々しう仕立て打ち振ひ、祈る事ども甚賢し。且は何の宮の、其の殿の若君、甚う在せしを掻い拭たるやうに止め奉しかば、祿多く賜りし事。其の人々召たりけれど、験もなかりければ、今に女をなむ召す。御徳を見る事」など語るも興し。下種の家の女主人、痴たる漢添しも興し。實に賢き人をも教へなすべし。
その人々「たれそれをしなり○女を 自身をさすなり。

大夫。侍從宰相、(などがよい)。

將。東宮權大夫。侍從宰相。

かんたちめ 大臣以外の三位以上の官人をいふ○だいが 長官の時、かく讀む「たゆう」とよむは五位○東宮大夫 相當從四位下なり、執柄の息、大臣の子孫にして大中納言となる人の兼官○左右の大将 左近衛、右近衛の大将なり相當從三位。譜代の華族にあらずれば任ぜられず、多くは大納言中、譜代の上臈の任ぜらるゝ官○權大納言 寛平の御時大納言に正二人權一人あり、その後權官加増す、相當正、從三位。右大臣と與に天下の事を參議す故に亞相の官といふ○權中納言 相當三位。この官に任ずるは參議の勞二十年以上、もしくは檢非違使別當、もしくは大辨宰相、もしくは攝政關白の子にして二位三位の中將たる者といふ○宰相中將 參議にて中將を兼ねたる者○三位中將 職原鈔に「二位三位中將非大臣子若孫者不任之」○春宮權大夫 職原鈔に「權大夫二人」とあり○侍從の宰相 侍從にして參議を兼官せるもの。以上いづれも光榮の官なり。

殿上人は、

君達は、

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衛佐(がよ)。

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衛佐。

要する辨官を兼ねるなれば極めて榮譽の官なり○頭中將 これも藏人頭にして近衛中將を兼ねたる榮譽の官○四位中將 三位中將と同じく大臣の子もしくは孫に非れば任ぜられず○藏人辨 藏人にて辨官を兼ねたる者○春宮亮 職原鈔に「亮、相當從四位下、名家四位有二人等者任之、坊中事一向所奉行也」

法師は、

法師は、

律師、内供(がよ)。

律師。内供。

きんだちは はふしは

女は、みやづかへところは

律師 僧官。僧部に次ぎて正権あり五位に准ず、衆僧に戒律を示すもの。○内供 朝廷に内道場ありて海内より戒律智徳勝れたる僧を十人置き、朝暮天皇の息災延命を祈願せしむ。内供奉、又十禪師ともいふ。

女は、

女は、

典侍(がよ)。内侍(がよ)。

典侍。掌侍。

内侍のすけ 内侍所の二等官にして相當從四位。大中納言の女の任ぜらるゝ官。○内侍 内侍所の三等官、掌侍をいふ、相當從五位。公卿殿上人諸大夫の女も任ぜらるゝ、これの第一を勾當といふ。清少も清内侍とよばれたしとは希望せる所なりし(尙侍は内侍所の一等官なれども、この頃はすでに天子の妃にして實務はせぬ事となりたり)

宮仕所は、

宮仕所は、

主上。后宮。その御腹の姫宮、それも一品宮など申上げる方。齋院は罪深いけれど、おもしろい。まして今の(齋院)は結構だ。春宮の御母女御(もよい)。

内裏。后宮。其の御腹の姫宮、一品宮など申たる。齋院は罪深いれど興し。況て此の頃は愛たし。春宮の御母女御。

うち 主上の御殿。○一品宮 品は親王の位にて四品までありその次を無品といふ(こゝは皇后宮の所出にして一品に叙せられたる内親王に仕ふるがよしの意)○罪深けれど 賀茂大神に奉仕する爲、佛に仕ふる事ななめをいふ、齋院は山城國愛宕郡にあり紫野院ともいふ。天皇即位の年、内親王の花山、及び當代一條まで重任せる聲望家なれば齋院趣味も横溢したるべし○春宮の御母女御 女御にても春宮の御母ならば勢力あるべし。

生れかはずたといふのは、

身を代へたらん人などは、斯やあらんと見るもの、

かういふのかと見えるの(は)、平女房でお仕へして居たのが、御乳母に成たの。唐衣も着ず、裳の用意もまだなく、白衣で御前に添ひ臥して、御帳の中を自分の居所にして、女房たちを呼んでつかひ、局へ用を言つてやつたり、文を取り次がせたりして居る様子は大したものだ。雑色が藏人になつたのも大したものだ。去年の霜月の臨時祭に、御琴を持つて居た人とは別人のやうだ。若い殿上人達と連立つて歩くのは、何處の人だらうと思はれる。藏人所以外から成た藏人は、それほど眼立たない。

只の女房にて侍ふ人の、御乳母になりたる。唐衣も着ず裳をだに用意なく、白衣にて御前に添ひ臥て、御帳の中を居所にして、女房們を呼び使ひ、局に物言ひ遣り、文取り次せなどしてある状よ、言ひ盡すべくだにあらす。雑色の藏人に成たる愛たし。去年の霜月の臨時祭に、御琴持ちし人とも見えず、君達に連て歩くは、何處なりし人ぞとこそ覺れ。外より成たるなどは、同じ事なれど然しも覺す。

身を代へたらん人などは 俗に「生れ代つたやうなのは」なり○雑色 藏人所以にて雑役に服するもの。良家の子弟之に補す。禁秘抄に「本員數八人、代々皆轉藏人」○臨時の祭 去年十一月の賀茂臨時祭になり○御琴もたりし 江次第賀茂臨時祭の條に「所雑色若衆昇御琴」云々。

雪が高く積つて、まだ降つて居る最中

雪高う降つて、今も仍降に、五位も、四位も、色美しう若やかなる

身を代へたらん人などは 雪高う降りて

に、五位でも四位でも、顔色の美しい若々しい人が、大層きれいな袍に、革の帯の痕のついたのを宿直姿の上に引張つて、紫の指貫も、雪の爲に余計引立つて濃く見えるのを横から、真紅か、濃い山吹の袖を出して、傘をさして居る。風が強くて、横から雪を吹きかけるので、少しからだを斜にして歩いて来る、深履や半靴の際まで真白に雪がかゝつて居るのがよい。

細殿の遣戸を朝早くあけると、御湯殿の馬道から下りて来る殿上人の、萎えた直衣だの、指貫が澤山綻びて、色々の衣がこぼれ出て居るのを押し込んだりして、北の陣の方へ行くのに、あいて居る遣戸の前を通る時、櫻を引ばつ

が、袍の色甚美麗にて、革の帯の形付たるを、宿直姿に引き加て、紫の指貫も雪に映て濃さ増りたるを着て、袖の紅ならすは、多大しき山吹を出して、傘をさしたるに、風の甚く吹て、横方に雪を吹き掛れば、少し傾きて歩み来る深履、半靴などの際まで、雪の甚白くかゝりたるこそ興しけれ。

童の帯のかた 袍の上にする石帯のあとなり○雪にはえて 雪にはゆる衣の色を賞美せる事この頃の書の隨所に見えたり。大鏡に、義孝少將の、縹色の衣に雪のか、りたるさま。道長の、黒き衣に紅の單のかさなりたるに、雪の色のもてはやされしさまなど○深靴 革にて深く作り雨雪の日に用うるもの○半靴 深沓の頭の短きもの。

ほそどの 廊の遣戸、甚疾う押し開たれば、御湯殿の馬道より下て来る殿上人の萎たる直衣、指貫の甚く綻たれば、色々の衣どもの溢れ出たるを押し入などして、北の陣の方々に歩み往に、啓たる遣戸の前を過とて、櫻を引き越して、顔に塞て過ぬるも興し。

御湯殿 清涼殿の西北隅にあり主上の湯浴せらるゝ處○馬道 御湯殿にゆく廊

て顔を塞いで通るのも、おもしろい。

やたらに逝つてしまふもの(は)、
帆を上げた船。人の年。春夏秋冬。

眼立たないもの(は)、
年とつた女親。凶會日。

五六月の夕方、赤衣を着た男が、青い草を細く揃へて切たのを両手に一杯持つて、小さい笠を着てゆくのが、何だか

只過ぎに過ぐるもの

殊に人に知られぬもの

下、こののは切馬道とて短き橋を廊にわたしあるなり○櫻 冠の後ろに垂れたる羅。二條ありて燕尾ともいふ。後世のは一條にて、兩端に骨を入れて羅を張りたり○ひきこして 後ろより前へ引こして艇起の顔、ぬくたれの髪を恥て隠すさまなり。

只過ぎに過るもの、
帆上たる船。人の年。春夏秋冬。

人のよはひ 三十才以上なる清少の實感なるべし○春夏秋冬 春と思ふ、やがて、過ぎ、夏も秋も冬も、かくして年の積りゆくなり、いつの代の人と同じ思ひなるべし。

殊に人に知られぬもの、
人の女親の老たる。凶會日。

人の女親のおいたる 父の方は官職もありて世に交はりもすべし○凶會日 一ヶ月に三日以上十四日ほどもあり、頻繁にありて避くるに難きため、守る事なきなるべし。

五六月の夕方、青き草を細く揃へて、赤衣着たるをこの、
小さい笠を着て、左右に甚多く持て往こそ漫に興しけれ。

五六月の夕つかた

おもしろい。

賀茂へお詣りする途中で、女たちが新しい折敷のやうな物を笠にして、多勢で歌をうたひながら、起きたり臥たりするやうに見えて、何をすることもなく後退りするの、何をして居るのだらう、おもしろいを見て居る中に、時鳥をひどくけなして歌ふので、いやになつた。「ほととぎすよ、おれよ、かやつよ、おれ鳴きてぞ、われは田に立つ。」と歌ふのを聞くと、「甚くな啼きそ」と賞翫した人もあつたのと思ふ。仲忠の童生ひをけなす人と、「鶯の方が時鳥よりよい」といふ人は、ほんとうに面憎い。

國に漂流して仙客に學びたる神技を傳へたるなり朱雀院行幸の時供奉せる父、兼雅、母子を見、家に伴ひかへる。仲忠京に出で、より學ぶ所一として通曉せざるなし、十八にして侍従となり廿一にして正四位左近中将たり。神泉苑の紅葉賀の時絶技を奏す、觀感の余り女一の宮を賜ふ。大納言に思進、二位に叙せらる。その幼時の卑しかりし人、人憎しとなり○いたくな啼きそ。万葉集「時鳥いたくな鳴きそ」が聲を、五月の玉とあえぬくまでに「玉」は藥玉、「それにあえて（似せて）貫くほどになり。

八月晦日頃、太秦にお詣りに往つた時、穂の出た田に、人が多勢居て、がやがやして居る。稻を刈るのだつた。「早苗とりしかいつの間に」とは、ほんとうの事だ。ほんに、先達て賀茂に詣つた時見たのが、大きくもなつたものだ。これは女も交らず、男が片手に、眞赤な稻の、根もとの青いのを持つて、刀だか何だかで、さく／＼と根もとを切る様子が、樂々と面白さうで、自分でもして見たい。どうしてあゝ出来るのだから、(そして)穂先を上にして並べて居るのが誠に面白い。庵の様も、住居する普通の庵とは、ちがつて居る。

は月つこもりがたに

青き草 一本「あふひくき」とあり、又「菖蒲」と註したる書もあれども五六月とひろく言ひあれば、それとも限らず夏草なるべし○そのこ 一本に「こちこ」とあり。

賀茂へ詣る道に、女どもの新き折敷の如なるものを笠に着て、甚多く立りて歌を歌ひ起き伏す如に見て、唯何爲ともなく後方に往は、如何なるにかあらん興しと見る程に、杜鵑を甚無禮く歌ふ聲ぞ厭き。「時鳥よ。汝よ。彼奴よ。汝啼てぞ我は田に立つ」と歌に、聞も果す。如何なりし人か、「甚くな啼き」と言けん。仲忠が童生言ひ貶す人と、「鶯に杜鵑は劣る」といふ人こそ、甚辛う憎けれ。

折敷のやうなる 淺き笠なるべし○うしろさまにゆく あとじさりしつゝ田を植ふゆくさまなり○おれよ「おのれ」の略語の「おれ」は自稱なるを、他稱に用うるは極めて卑しきなり、他をさして「われ」といふに同じ、この歌の意は「時鳥の奴め、手前が啼くおかげで、此方が田に立たねばならぬ」なり、五月雨の時鳥啼く頃に苗を植ふつくるなれば○仲忠の童生ひ 空穂物語中の主要の人物幼時家貧、四才にして自ら魚を釣り果實を拾ひて母に供ふ。七歳にして母に琴を習ふ妙を極む、その祖後蔭が異

八月晦日方に、太秦に詣つて見れば、穂に出たる田に人多くて騒ぐ、稻刈なりけり。「早苗取しか何時の間に」とは實に實に先づ頃賀茂に詣つて見しが、あはれにも成にけるかな。是は女も交らず、男の片手に、甚赤き稻の、根は青きを刈り持て、刀か何にかあらん、根を切る様の易氣に愛たき事に、甚爲ま欲く見るや。如何で然爲らむ。穂を上にて並み居る、甚興しう見ゆ。庵の體も殊なる。うづまさ 山城葛野郡太秦の峰岡にある廣隆寺なり。秦河勝の建立。今、夫婦の木像あり、藥師如來奉安○さなへとりしか 古今集秋上「昨日こそ早苗とりしか何時の間に、稻葉そよぎて秋風ぞ吹く」○あはれにも 「何とまあ大きくも」なり。

いみじくきたなきもの
せめておそろしきもの
頼もしきもの

いみじくきたなきもの
甚く汚きもの
頼もしきもの

蛞蝓。つまらない板敷を掃く筈。殿上の合子。

蛞蝓。汚板敷の筈。殿上の合子。

合子 蓋ある漆椀、殿上の間に供へ置きて殿上人が裏盤にて食事の時用うるもの、誰のとなしに用ゐて永き年月をふるなれば汚きなるべし、されば後にはなるべく殿上にて飲食せぬやうになりたり。

堪らなく恐しいもの(は)、

夜の雷鳴。近所に盗人が入つたの。自分の家へ入つたのは、夢中だから何とも感じない。近火も亦恐しい。

切て恐きもの、
夜鳴る神。近き隣に盗人の入たる。我が住む所に入たるは、唯、物も覺ねば何とも知す。近き火、亦恐し。

頼もしきもの(は)、

氣分のわるい時に、多勢の坊さんを頼んで、修法したの。戀人の病氣の時に、心底頼もしい人が、深切に慰めて力をつけてくれたの。物恐しい時に親達の傍に居るの。

頼もしきもの、

心地悪き頃、僧數多して修法したる。思ふ人の心地悪き頃、眞に頼しき人の言ひ慰め頼めたる。物恐き折の兩親の傍。
修法 吉凶禍福疾病をすべて僧の修法にのみ依頼せる頃なれば、多くの僧を集めて修法せるは、頼もしき事の限りなりしなるべし。

いみじう仕立て、

大層な支度をして迎へたのに、間もなく來なくなつてしまつた鞆が、然るべき場所などで、鼻に逢つたのは、さすがに氣の毒に思ふだらう。ある人が、大さう時めく人の鞆になつて、一月もろくに來ないでしまつたので、家中で、腹を立て、乳母たちなどは呪ひの詞などをいふのもあるのに、翌年の正月に、藏人になつた。「どうしてまあ、こゝのお家とかういふ間柄になつたのに、昇進したらうと、世間では、不思議に思ふだらう」など、噂し合ふのは、鞆にも聞えるだらう。六月に、さる處で八講なかつた所に、多勢集つて聽聞して居ると、その藏人になつた鞆が、綾の表袴、蘇枋製、黒牛臂など、非常に美々しく着飾つて、不縁にした娘

甚う仕立て鞆取たるに、甚程なく住ぬ鞆の、然べき所などにて男に逢たる、最惜とや思らん。或る人の甚う時に逢たる人の鞆に成て、一月も抄々しうも來で止にしかば、惣て甚う言ひ騒ぎ、乳母など如の者は、禍々しき事ども言もあるに、其の復る年の正月に、藏人に成ぬ。「驚しう斯る仲らひに、如何で」とこそ人は思たぬれ」など言ひ扱ふは聞らんかし。六月に、人の八講し給し所に、人々集りて聞に、此の藏人に成る鞆の、綾の表袴、蘇枋製、黒牛臂など、甚う鮮麗にて、忘にし女の車の齋の尾に、牛臂の緒引き懸つばかりにて居たりしを、如何に見るらんと、車の人々も知たる限は最惜がりしを、他人ども、「平然居たりしものかな」など、後にも言き。仍男は物の最惜さ、人の思ん事は知ぬなめり。
れう「あや」を音讀せるなり○すはうがさね 紅染に似て少し暗きに白を重ねたるもの○牛臂 兩袖なき短き衣にて東帯の時に袖と下襲との間に用うるもの。袖の中わづかに一寸五分、臂の牛に至るほどにて、下に巾七寸ほどの紐をつけたるを襦といふ。左右の脇に十二づ、鬘をたむ。三位以上の料は冬は小葵、夏は三重

の車の鵝尾カモシに、半臂の緒を引かけないばかりに近く居たのを、その娘は、何と思つて見て居たらうと、男の供たちも、事情を知つて居るのは、皆な氣の毒がつた。よその人たちも、「よく平氣で、あんなに傍に居られた事だ」など、あとも評判した。やつぱり、男は、人の氣の毒さや、思はくなどは、察しないものらしい。

世の中で、一番つらいのは、人に憎まれる事だ。氣狂でよい限り、人に憎まれたと思ふ者はあるまい。けれども、自然官仕所でも、親兄弟の中でも、可愛がられるのと、憎まれるのがあるのは、困つたものだ。貴人は更なり、下衆などでも、親などの

可愛がる子は、人の眼に立ち、見上げられて、大切に思はれる。見る効のあるよい子は、可愛い筈だと思はれ、格別でもない子なら、又親なればこそと感心する。親にでも、君にでも、すべて親しく話し合ふ友達にでも、思はれる位、よい事はない。

男といふものは、どうも不思議な心持を持つて居る者だ。非常に美しい人を棄て、見ともない女を持つて居たりする。禁裏に入る男や、その子息たちは、澤山の中で、よりぬき美しい人に、命がけで懸想するがよい。(雲に梯かたはしのやうな)及びもつかないさうなのでも、氣に入つたら、懸想するがよい。人の娘だとか、又まだ見た事もない人でも、

男こそなほいとありがたく

袴ハカマのやうの穀コメを用ゐ、四位以下は冬、平絹、夏は無紋の穀織物なり。補は別に羅ワを用う。倍子金フシガネにて染むる故、黒半臂といふ〇縷ワ忘緒ワセといふ。夏冬ともに羅を用う。幅二寸五分長さ一丈二尺なる紐をたゞみて、左の腰の前通りに垂る〇とみのを車の前ナカにある轆ナゲ、後ろにあるを「とみのな」といふ。

世の中に、仍なほ甚い心こころ憂うれきものは、人に憎にくれん事こそあるべけれ。誰たれてふ物狂か、我人われびとに然さ思おもれんとは思おもはむ。然さど自然しぜんに、宮仕所みやつかへところにも、親兄弟おほはなからの中なかにても、思おもは、思おもれぬがあるぞ、甚い佗たしきや。貴きき人の御事おんごは、勿論もちろんなり、下種げすなどの程ほども、親おやなどの可愛かたしうする子は、眼立めだち見立みだちられて、勞いたはしうこそ覺おぼれ。見る効かひあるは道理道理、如何いか思おもはらむと覺おぼゆ。殊ことなる事ことなきは、又是またこれを可愛かたしと思おもはらんは、

親おやなればぞかしと哀あはれなり。親おやにも君きみにも惣すべて打ち語うたふ人ひとにも、人ひとに思おもはむばかり、愛めでたき事ことはあらし。

男をとここそ仍なほ甚い有あり難がたく、奇あやし心地こころしたるものにはあれ。甚い美よ麗び氣げなる人ひとを捨すてて、憎にく氣きなる人ひとを持もつるも、奇あやし。公おほやけ儀ぎに入り立たちする男をとこ家いへの子こなどは、有ある中なかに妍よからんこそは、撰えりて思おもひ給たまは。及およまじからむ際きまをだに、愛めでたしと思おもはむを、死しぬばかりも思おもひ懸かれかし。人ひとの女むすめ、未まだ見みぬ人ひとなどを、妍よかと聞きをこそは、如何いかでもと思おもはれ。それに女の眼めにも、醜みにくしと思おもは思おもは、如何いかなる事ことにかあらむ。容貌かたち甚い妍よかく心こころも情なさけ趣しゆき人の、手ても巧かう書かき、歌うたをも怜あはれに詠よみて越こせなとするを、返事へんじは賢さかしらに打うち爲なるもの乍は、寄より着つかず、可愛かたし氣げ

美人の評判のある人を、熱心に懸想するのは、普通だ。だのに、女が見てすら、見ともないと思ふ人を懸想するのは、何故だらう。容貌が飛びぬけてよく、心もしやれて、美事な手蹟で歌を上手に詠んでよこしたりするのを返事は小器用にしながら、寄り付かず、可愛い様子で泣いて居るのを、見捨てたりするのを見ると、あきれ返つて、法界腹が立つて、その女の親兄弟の心持も氣の毒だけれど、男は、一向そんな事も思つて居ないらしい。

何よりも、人情の深いといふ事が、男は勿論、女でもよい事だ。一寸した詞でも、にべのないのは、いやなものだ。大して感じないでも、氣の毒な事を「氣の毒な」とも、哀れな事を「ほんに、どんなに悲しからう」などと言つたと人傳に聞くと、面と向つて言はれたより嬉しい。どうか、その人に、ありがた

に打ち泣て居たるを、見捨て往などするは、驚嘆う公憤ちて、眷屬の心地も心憂く見べけれど、身の上にては、露心苦きを思ひ知ぬよ。

かつ「それなのに」なり、一本「それに」とあり。

万の事よりも、情ある事は、男は勿論なり、女も愛たく覺れ。苟且の詞なれど、氣憎きは口惜き事なり。切に心に深く入ねど、最惜き事を最惜とも、哀なるをば實に如何に思らんと言けるを、傳て聞たるは、差し向て言よりも嬉し。如何で此の人に思ひ知りとも見にしがなと、常にこそ覺れ。必思べき人、訪べき人は、然べき事なれば、取り分れしも爲す。然もあるまじき人の應答をも心易くしたるは、嬉き事なり。甚易き事なれど更に得あら

く思つて居ると知らせたいと、いつも思ふものだ。當然同情してくれるべき人だの、見舞つてくれるべき人は、

格別に嬉く感じもしないけれども、さうでもない人が、一寸した詞に情のこもつたのは、嬉しい事だ。だが、わけのない事のやうで、中々さうはゆかないものだ。大たい、好い人で、才智もあるといふのは、男も女も、六かしい事だ。が、さういふ人も、中々あるのだらう。

人の事を悪くいふのをきいて、腹を立てる人の氣が知れない。何故だらう。自分のあらをさしおいて、そんなに人の悪口を言ひたい事はない(けれども、よく／＼だからこそいふのだに)。しかし、人の悪口はたしかに、よい事ではない。自然聞えれば、恨みもする。つまらない事だ。又、思ひ棄てがたい關係の者なら、(言ふのも)氣の毒だと、了簡すれば、言はずにもすんでしまふ。それ程でもない(人の)なら、あら

ぬ事ぞかし。大方心好き人の、實に才あるは、男も女も有り難き事なんめり。又然る人も多かるべし。

人の上言を、腹立つ人こそ甚理なけれ。如何でかはあらむ。我が身を擱きて、然ばかり詳しく言まほしき者やはある。然ど怪らぬ如にもあり。又自然聞き付て恨もぞする。効なし。又思ひ放つまじき邊は、最惜など思ひ解ば、念じて言ぬをや。然だになくば、打ち出で笑も爲つべし。

を言つて笑ふのも、あり勝の事だ。
人の顔の格別よい處は、見る度に、
あゝよい、一寸類がないと思はれる。
繪などは、幾度も見ると眼立たなくな
る。傍に立てゝある屏風の繪など、い
くらよくても、見向きもしない。(や
つぱり)人の容貌は、おもしろいもの
だ。いやな道具でも、一つよい所があ
ると、じつと見る。見ともない顔も、
その通りだらうと思ふと、情ない。

嬉しいもの(は)。

まだ見ない物語が澤山あるの。又一巻
見て堪らなくあとが見たいと思ふ二巻
目が、手に入つたの。(でも)大した
事もなかつたと思ふ事もある。人の破
り棄てた文を見て居て、その續きを澤
山見つけたの。どんな事があるのだら

人の顔に取り分て美と見る處は、度毎に噫美し珍しとこそ覺れ。
繪などは數多度見れば、目も立たずかし。近う立る屏風の繪などは、
甚愛たけれども見も遣れず。人の貌は興しうこそあれ。憎氣なる
調度の中にも、一つ好き所の目成るゝよ。醜きも、然こそはあら
め、と思こそ佗しけれ。

嬉しきもの、

未だ見ぬ物語の多かる。又一巻を見て甚う欲見う覺る物語の、二
巻を見つけたる。心劣のするやうもありかし。人の破り棄たる文
を見るに、同じ續數多見付たる。如何ならんと思ふ夢を見て、恐
しと胸潰るに、事にもあらず占せなどしたる、甚嬉し。貴き人の
御前に、人々數多侍ふ所に、昔ありける事にもあれ、今聞し召し、

うと、胸がどきくする處を、見ても
らふと、何でもない事に占つてくれた
のは、實に嬉しい。貴人の御前で、多勢
お傍に居る時、昔あつた事でも、今お
聞きになつた世間で評判の事でも、お
咄しになる時、自分の顔を御覽になつ
て居らしたり、特別にお咄しかけにな
るのは、誠に嬉しい。遠方なら勿論、都
の中でも、大切に思ふ人の病氣と聞い
て、どうだらうと案じ歎いて居る
中、癒つたしらせをきくのも嬉しい。思
ふ人が、人にも譽められ、(まして)
貴いお方が、お褒めになつたり、何か
の時のや、人と贈答した歌が、評判に
なつて褒められ、打聞などに書き入れ
られるなど、自分はさういふ眼にもま
だあはないけれども、人の事でも、ど

うれしきもの

世に言ける事にもあれ、語せ給を、我に御覽じ合て宣せ言ひ聞
せ給る、甚嬉し。遠き所は更なり、同じ都の内ながら、身に此上
く思ふ人の惱むを聞て、如何に如何にと覺束なく嘆くに、癒りた
る消息得たるも嬉し。思ふ人の、人にも譽られ、貴き人などの
口惜からぬ者に思し宣ふ。物の折、若は人と言ひ交したる歌の聞
て褒られ、内聞などに褒らるゝ、自身の上には未だ知ぬ事なれど、
仍想像るゝよ。
甚う打ち解たらぬ人の言たる、故き事の知ぬを、聞き出たるも嬉
し。後に物の中などにて見付たるは、興しう、唯是にこそありけ
れと彼の言たりし人を興しき。檀紙。白き色紙。普通のも白う
清きは、得たるも嬉し。憚しき人の歌の本末問たるに、偶と憶た
る、我ながら嬉し。常には記憶る事も、又人の問には、清く忘て
止ぬる折多る。頓に物探るに見出たる、只今見るべき文などを
探め失て、萬の物を反覆見たるに、探し出たる、甚嬉し。物合、

んなに嬉しからうと思はれる。大して悪意でもない人が言つた故事の分らなかつたのを、聞き出したのも嬉しい。後に何かの中で見つけたのはおもしろく、あゝこれだつたのかと、それを言つた人が氣に入る。檀紙。白い色紙（も嬉しい。）色紙でなくとも、白くて清らかなのが手に入ると嬉しい。氣のおける方が、歌の上の句か下の句を問はれた時、ふと思ひ出したのは、自分ながら嬉しい。いつもは知つて居る事でも、ひよいと聞かれるときれいに忘れて思ひ出せずにはまふ時が多い。いそぐ探しものがすぐ出た（の）。今すぐ見たい書などを見失つて、あれこれ引くりかへして探して居る中に、見つけたのは誠に嬉しい。物合せだ、何だと、勝

何彼と挑む事に勝たる、如何でか嬉からざらむ。又甚う我はと思ひ得意顔なる人、寡り得たる。女同志よりも男は勝りて嬉し。是が答は必ず爲んずらんと、常に用意せらるゝも興しきに、甚平然、何とも思たらぬ體にて、油断め過すも興し。憎き者の悪き眼見るも、罪は得らんと思ながら嬉し。刺櫛摺せたるに、趣致氣なるも亦嬉し。思ふ人の上は、我身よりも勝りて嬉し。御前に人々所も無く居たるに、今上りたれば、少し遠き柱許などに居たるを御覽じ付て、宮「此方來」と仰られたれば、道開て、近く召し入たるこそ嬉けれ。御前に人々數多、物仰らるゝ序などにも、清「世間の腹立しう煩しう、片時あるべき心地も爲で、何地も何地も往き失なばやと思に、普通の紙の甚白う清らかなる、好き筆、白き色紙、檀紙など得つれば、斯ても暫時ありぬべかりけりとなん覺え侍る。又、高麗縁の疊の筵青う細に、縁の紋鮮麗に黒う白う見たる、引き擴て見

負事に勝つたのは、堪らなく嬉しい。又非常に高慢に得意然として居る人を、うまく欺したのは、女同志より、男の場合は殊に嬉しい。この返報はきつとするだらうと始終用心されるのも、おもしろいのに、平氣でそのまますつぽかして居るのも、おもしろい。憎らしい奴が、ひどい眼にあふのも、罪だとは思ひながら、嬉しい。刺櫛を作らせたのが、しやれて出来たのも、また嬉しい。好きな人のよい事は、自分によい事があつたよりも嬉しい。御前にぎつしり人が詰めて居る處へ、あとから上つたから、少し離れた柱の許などに居るのを御覽じつけて、宮「此方來」と仰せられるので、皆なが道をあけて、お傍へ召されてゆくの嬉しい。

れば、何か仍更に、此の世は得思ひ放まじと、命さへ惜くなんある」と申ば、宮「甚く些き事も思むなるかな。姥捨山の月は、如何なる人の見るにか」と笑せ給ふ。侍ふ人も、「甚く易き息災の祈禱かな」と言ふ。然て後に程絶て、漫なる事を思て、里に在る頃、愛き紙を二十包に裹て賜せたり。仰事には、宮「疾く參れ」など宣せて、「是は聞し召し置たる事ありしかばなむ。悪かんめれば、壽命經も得書まじげにこそ」と仰られたる、甚興し。無下に忘たりつる事を思し置せ給りけるは、仍常人だに興し。況て疎ならぬ事にぞあるや。心も擾て、啓すべき方も無れば、只、「掛まくも畏きかみの験には、鶴の齡に成ぬべきかな。余にやと啓せさせ給へ」とて、參せつ。臺盤所の雑仕ぞ、御使には來たる。青き單衣などを取せて、實に此の紙を草紙に作て持て騒に、煩しき事も紛る心地して、興しう心の中も覺ゆ。二日許ありて、赤衣着たる男の、疊を持て來て、「是」と言ふ。下女「彼は誰ぞ。顯露

宮様の御前で、大勢の女房達とお咄に
なる序などにも、清「世の中が腹が立
つて不愉快で、もうすぐにも、何處か
へ往つてしまひたいと思ふけれども、
たゞの紙の白いきれいなものと、よい筆
と、白い色紙と、檀紙でも出来るかと、
これなら、もう些と居てもよいと思ふ。
それと、高麗紙の墨の筵が眞青で、編
目が細かく、縁の紋がくつきりと黒く
白く見えるのを、引き展げて見ると、
やつぱり、此の世は思ひ捨てられない
と、命まで惜くなる」と申したら、
宮「何といふ少なさ望みだらう。さう、
ぢきによい氣持になれるなら、姥捨山
の月は、どんな人が見るのだらう」と
お笑ひになる。お傍の人たちも、「何
といふわけのない、息災の御祈禱なん

なり」など、もの憚なう言ば、差し置いて往ぬ。清「何處よりぞ」と
問すれば、下女「罷にけり」と取り入れたれば、殊更に御座といふ
墨の體にて、高麗など甚美麗なり。心の中には、然にやあらんと
思ど、仍不安きに、人ども出し探さすれど、失にけり。奇しがり
笑ど、使の無れば言ふ効なし。所違などならば、自然も又言に來
なむ、宮の邊に案内しに參せま欲けれど、仍誰漫に然る事は爲む。
仰事なめりと甚う興し。二日許音も爲ねば、疑も無くて、左京の
君の許に、清「斯る事なんある。然る事や氣色見給し。忍て有様
宣て、然る事見ずば、斯く申たりとも、勿漏し給そ」と言ひ遣
たるに、左京「甚う隠せ給し事なり。努々塵が聞たるとなく、後に
も」とあれば、然ばよと、思しも著く興しくて、文書で又密に御
前の勾欄に置せしものは、感ける程に即て掻き落て、御階の許に
落にけり。

うちぎ、「一寸さく」の意より轉じて、それを書きつけおく事をいふ○さしぐし

でせう」といふ。その後、大分経つて、
何だか、くさくして里に居たらば、
結構な紙を、二十包に裏んで賜はつた。
仰言には、宮「はやく來よ」など被仰
つて、宮「これは、聞し召し置いた事
があるから、上げる。よくない(紙だ)
から、壽命經も書けまいが」と、仰せ
られたのが、誠におもしろい。すつか
り忘れて居た事を、お覺えになつて居
たのは、普通の人でもおもしろいのに、

すらせ 挽きたるを土賊などにて摺り磨けば櫛を製する事を「すらせ」といふ○墨
う白う 疊の高麗べりとして白地の文に雲形又は菊花など織り出だせるもの、新き
なり○まほすて山 古今が雜上に作者不詳のうた「わが心なぐさめかねつ更科やを
ばすて山に照る月を見て」(見て)の下に「あり」の意あり)○いかなる人の見るに
か「さやうにたやすき事にて慰むならば、はるく信濃の、をばすて山まで心なぐ
さめにゆく人はあらじ」となり○息災の祈りかな 息災の祈りを頼むには、何都にか
づけ物(衣)にそへて絹、麻などを多く、伴僧にも米布等を與ふるなり○壽命經 唐
の不空三藏の譯にて一卷あり壽命陀羅尼經といふ、この經を受持するは長壽を祈る
爲なり○かけまくも 「口にかけむもなり」むを「まく」と延音にせるなり。延音は
同行(むとま)と同段(むとく)との兩方に延ぶる音○かみ 神に紙をかけたなり○
ござ 貴人の席とする上げ疊なり、今、誰の居る疊○左京の君 清少の別業なり○
まろ 自身の事を親き人にいふ詞なり。

まして、大したものだ。頭もこんがらかつて、申上げる詞も出ないから、たゞ、
清「かけまくもかしこきかみのしるしには、
つるの上はひになりぬべきかな。

(口にかけて申上げるも畏れ多いお恵みの紙の驗で、鶴ほども長生をいたしませう)

(鶴とはあまり)大げさで御坐りませうかと申上げて下さい」とさし上げた。臺盤所の雜仕が御使に來たのだつた。青
い單衣など與へて、早速その紙を草子に作つて、大切に持つて居たら、うるさい事も忘れた氣分になつてしまつた。
二日ほどたつて、赤衣を着た男が、墨を持つて來て、「これさし上げます」といふ。(下女が)「まあ誰だらう、こんな

物を「など、大聲でいふと、さし置いて往た。清「何處から？」ときかされると、下女「もう往つてしまひました」と取り込んだのは、格別（上品）に、御坐といふ疊の様子で、高麗の縁などが誠にきれいだ。心の中には、もしやと思ふ事もあるけれども、しかとは分らないから、人を出してさがさせたけれど見えなかつた。皆なが不思議がつて、彼はいふけれども、使が居ないから、分りつこない。所たがへなどで、一寸置いて往つたなら、又言ひに来るだらう、宮様のおそばの人たちにきいて見やうかと思ふけれども、そんな事をしさうな人もない。被仰りつけにちがひないと、堪らなくおもしろい。二日ほど音さたがないので、疑ひもなく左京さんに、清「かういふ事がある。さういふ事を遊ばした御様子があるか、こつそりおしらせ下さい。そんな御様子がなくば、かう伺つたとも、御口外下さるな」と言つてやつたら、左「非常に内しよで遊ばしたので、決して私が申上げたと被仰るな、後でも」といふ返事なので、やつぱりさうだつたと、おもしろくて、文をかいいて、又そつと御前の勾欄に置かせたのに、使が下手をやつて掻き落したので、御階の處に落ちて、御手許には届かなかつた。

關白様が、二月二十日頃、法興院の積善寺といふ御堂で、一切經を供養なさつた。女院や宮様もお出でになる爲、二月朔日頃、二條宮にお入りになつた。もう夜更けで眠たかつたから、何にも見ない。翌朝、日がうらゝかにさし出

關白殿（道）二月二十日の程に、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ。女院（子）宮（子）の御前も在すべければ、二月朔日の程に、二條宮へ入せ給ふ。夜更て眠く成にしかば、何事も見入す、翌旦日の麗かに射し出たる程に起たれば、甚白う雅致氣に造たるに、御簾より初て昨日掛たるなめり。御装具、獅子、

た時分起きたら、眞白い木で、しやれて造つた御殿で、御簾なども昨日懸けたらしい。御部屋の御裝飾品や、獅子狛犬など、何時の間に入つたんだらうと、おもしろい。櫻の一丈位のが、一ぱい咲いて、御階の處にあるから、大層早く咲いたものだ、今は梅の盛りだのにと、よく見たら、造り花だつた。花のつやなども、ほんとうの花と同じで、何といふ美事さだらう。雨が降つたら萎むだらうと見えるのが惜い。小家などのごちやくした所にお建てになつたのだから、木立などのながめはまだない。たゞ御殿の様子が氣がきいてしやれて居る。

狛犬など、何時の程にや入り居けんぞ興しき。櫻の一丈許にて、甚う咲たるやうにて、御階の許にあれば、甚疾う咲たるかな。梅こそ目下盛なめれと見るは、作たるなんめり。惣て花の匂など咲たるに劣す如何に美かりけん。雨降ば萎なしかしと見るぞ口惜き。小家などいふ物の多りける所を、今造せ給れば木立などの見所あるは未だ無し。唯宮の體ぞ氣近く風流氣なる。

殿（道）渡せ給り。青鈍の固紋の御指貫、櫻の直衣に紅の御衣三ばかり、唯直衣に襲てぞ奉りたる。御前（子）より初て、紅梅の濃き薄き織物、固紋、龍紋など、ある限着たれば、唯光満て、唐衣は萌黄、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給て、物など聞させ給ふ。御答の有ま欲さを、里人に僅に覗せばやと見奉る。女房們を御覽じ渡で、關白宮に何事を思し召らむ。許多愛たき人々を並べ居て御覽するこそ、甚美しけれ。一人醜き人なしや。これ家の女ぞかし。憐なり。好く眷顧てこそ侍せ給め。然ても此の宮

ばかりをお襲ねになつた。宮様を初め、紅梅の濃いのが、淡い織物、固紋、龍紋など、皆さんお召しになつたので、そこら一杯きら／＼して、唐衣は萌黄だの柳だの、紅梅だのだ。宮様の御前にお坐りになつて、何かお咄しになる。御返事振りのよさを、里人に一寸でも覗かせたく拜見する。女房たちを御覽じ渡して、關白「宮は嘸御満足でせう。こんな多勢、立派な女房達を据えて御覽になるとは、實にお美しい。(ほんに)一人として醜いのではない。いづれも、一かどの家の娘ばかりだ。大したものだ。大切にしておやりなされ。それにしても、この宮の御心を何と思つて、皆は集つて來たぞ。ひどく吝な宮で、私は、お生れになつてから、一生懸命

(定)の御心をば、如何に知り奉りて、集り参り給るぞ。如何に卑く物客せさせ給ふ宮とて、我は生れさせ給しより、甚う仕う奉れど、未だ下しの御衣一つ賜ぬぞ。何か後言には聞ん」など宣ふが可笑きに、皆人々笑ぬ。關白「真ぞ。愚なりとて、斯く笑ひ在するが耻し」など宣する程に、内裏より御使にて、式部丞某(理)参り。御文は、大納言殿(伊)取り給て、殿に奉せ給は、引き解て、關白「甚ゆかしき文かな。許可侍ば披て見侍ん」と宣すれど、關白「奇しと思いたんめり。畏くもあり」とて奉せ給は、取せ給ても披させ給ふやうにもあらず、擧止せ給ふ御用意などぞ有り難き。隅の間より女房褥差し出て、三四人御几張の許に居たり。關白「彼方に罷て、祿の事爲し侍ん」とて立せ給ぬる後に、御文御覽す。御返事は、紅梅の紙に書せ給ふが、御衣の同じ色に匂たる、仍斯しも推し量り参する人は無やあらんとぞ口惜き。今日は殊更にとて、殿(隆)の御方より祿は出させ給ふ。女の装束に、紅梅の

御奉公申上げるが、まだ、お召古し一つ頂いた事がない。蔭ではいはぬ」など、被仰るのが、をかしいので、皆な笑つた。關白「ほんの事を言ふのだが、愚だと笑ひなさが恥しい」など被仰る處へ、内裏からの御使で、式部丞某が参つた。御文は、大納言さんがお取りになつて、殿(隆)にお上げになると、お解きになつて、關白「拜見致したいお文の様子だ、お許しがあるならあけて拜見しやう」と被仰つたが、それともと思しめたと見えて、關白「變な事をすると思すらしい。恐れ多くもある」とお上げになる。おうけ取りになつても、ひろげて御覽にもならない御用意などが、有がたい。隅の間から、女房が、敕使の褥をさし出して、三四

細長添たり。盃などのあれば、酔さま欲けれど、式部丞「今日は甚き事の行事に侍り。吾が君許させ給へ」と、大納言殿に申て立ぬ。君達など甚う化粧じ給て、紅梅の御衣ども劣じと着給るに、三の御前は(名)、御匣殿なり。中姫君よりも大に見え給て、上など聞んに好んめる。上(貴)も渡せ給り。御几帳引き寄せて、新しく参たる人々には見え給ねば、恨き心地す。差し集て、彼の日の装束、扇などの事を言ひ合るもあり。又挑み交して、女房「應は何か、唯有んに任てを」など言て、他の女房「例の君」など憎る。夜さり罷出る人も多り。斯る事に罷出れば、得止めさせ給す。上(貴)日に渡り、夜も在す。君達など不在すれば、御前人少からねば、甚好し。内裏の御使、日々に参る。御前の櫻、色は増らで、日などに直而て萎み醜うなるだに佗しきに、雨の夜降たる翌且、甚う無得なり。甚疾く起て、清泣て別ん顔に、心劣こそすれ」といふを聞せ給て、宮實に雨の氣息しつる

人は(房女)御几帳の傍に居る。關白「彼方に退つて、祿の事を取はからひませう」と、お立ちになつたあとで、御文を御覽になる。紅梅の紙にお書きになつたのが、御衣と同じ色で美しい。でもこれほどお美しいとは、誰も想像すまいと残念だ。今日は特別にと、殿(道)の御方から、祿はお出しになる。女の装束に、紅梅の細長が添へてある。盃などがあるから、酔はしたいけれど、式部丞「今日は大切な御用が御坐います。どうかお許し下さい」と大納言さんに言つて立つた。姫君たちなど、お立派にお化粧なされて、紅梅の御衣などを劣らじとお召になつた。三の御前は御匣殿だ。中の姫君よりも大きくお見えになつて、上(北)など申上げて

ぞかし。如何ならん」とと驚せ給に、殿(道)の御方より、侍の者們、下種など來て、數多花の許に、唯寄に寄て引き倒し取て、「密に往て、未だ暗からんに取れ」とこそ仰られつれ。明け過にけり。不便なる事かな。疾く疾く」と倒し取に、甚可笑くて、「言ば言なん」と兼澄が事を思たるにやとも、よき人ならば言ま欲けれど、清「彼の花盗む人は、誰ぞ。悪かんめり」と言ば、笑て甚ど逃て引もて往ぬ。仍殿の御心は風流う在すかし。枝どもに濡れ纏れ付て、如何に見る効なからましと、見て入ぬ。掃殿寮參て、御格子參り、主殿の女官御掃除奉り終て、起させ給るに、花のなければ、宮「噫驚し。彼の花は何地往にける」と仰らる。宮「曉、盗人ありと言なりつるは、仍枝などを些折にやとこそ聞つれ。誰が爲つるぞ。見つや」と仰らる。清然も侍す。未だ暗くて熟も見侍ざりつるを、白みたるもの、侍ば、花を折にやと不安きに申し侍りつる」と申す。宮然とも斯は如何でか取ん。殿

もよさうだ。上(道隆)もお渡りになつた。御几帳を引よせて、新參の女房たちにはお顔を拜ませられないから、つまらない気がする。寄り集つて、供養當日の装束や扇などの事を相談するもあり、又競争し合つて、女房「私は、何にも持たない、只有合せですませる」など言て、「又初まつた」などと憎まれる。夜になつて退出する人も多い。支度の爲に退るなどは、お留めにならない。上は、毎日お出でになり、夜もお出でになる。姫君達もお出でになるから、御前が賑かで、誠によい。主上の御使は毎日來る。御前の櫻が、色は増さないで、日などにあつて萎み、わるくなるだけでも情ないのに、雨が夜降つた翌る朝、ひど

(道)の隠させ給るなんめり」とと笑せ給ば、清いで豈夫侍じ。春風の爲て侍ならん」と啓するを、宮斯く言んとて隠すなりけり。盗にはあらで、降にこそ降なりつれ」と仰らるゝも、珍き事ならねど甚う愛たき。殿在せば、寢顔の朝顔も、時ならずや御覽せんと、引き入る。在す隨に、道「彼の花失にけるは。如何に斯は盜せしぞ。寢穢かりける女房達かな。知ざりけるよ」と驚せ給は、清「然ど、我より先にとこそ思て侍つれ」と忍やかに言を、甚疾く聞き付させ給て、道然思つる事ぞ。世に他人出て見付じ。宰相と其許との程ならんと推し量つ」とて甚う笑せ給ふ。宮然氣なるものを、少納言は春風に負せける」と宮の御前(定)の打ち笑せ給る愛たし。宮虚言を負せ侍なり。今は山田も作るらん」と打ち誦ぜさせ給るも、甚優雅きて興し。道然ても憾く見付られにけるかな。然許り誠めつるものを、人の所に斯る痴者のあるこそ」と宣す。道春風は空に甚興うも言ふかな」と誦せさせ給ふ。宮尋常言

くわるくなつてつまらない。早く起きて見て清「別れの泣顔で、興醒めがする」といふのを聞きになつて、宮「ほんに雨の音がした。どうなつた。」とお眼覚めになると、殿(降道)の御方から、侍の者や下部が来て、多勢で、花の許によりかゝり、引たふし取つて、侍「そつと往つて暗い中にとれと被仰つたのに、明け過ぎてしまつた。具合がわるい。早く〜」と倒して取るから、をかしくて、「言はゞ言はなむ」と兼澄の例を思つたのかと、咄の分る人間なら言ひたい處だけでも、清「あら花を盗むのは誰? いけないよ」と言ふと、笑つて、大急ぎで櫻を引いて逃げて往つた。殿は、やつぱり、しやれて居らつしやる。あのまゝ置いたら、花が枝

には巧く思ひ寄り侍つかし。今朝の態、如何に侍まし」とて笑せ給を、小若君、然、然ど其は甚疾く見て、雨に濡たるなど而伏なりと言ひ侍つ」と申し給は、甚う憾がらせ給も興し。然て八日九日の程に罷出るを、宮「今少し近うなして」など仰らるれど、出ぬ。甚う常よりも長閑に照たる晝つ方、宮花の心開たりや。如何に如何に」と宣せられたれば、清「秋は未しく侍ど、世に九度なん上る心地し侍る」など聞させつ。出させ給し夜、車の次第も無く、先々と乗り騒が憎ければ、然べき三人と、清「仍、此の車に乗る體の甚騒しく、祭の歸途などの如に倒ぬべく感ふ、甚見苦し。」「只遮莫乗べき車なくて得参すば、自然聞し召し付て賜せてん」など笑ひ合て、立る前より、押し凝て感ひ乗り果て、宮司「斯か」と言に、清「未だ爰に」と答れば、宮司「寄り来て、宮司「誰々か存する」と問ひ聞て、宮司「甚奇しかりける事かな。今は皆乗りぬらんとこそ思つれ。此は何どて斯は後れ

などに引ついて、どんなに汚くならうと、見て入つた。

掃部寮が参つて、御格子を上げ、主殿の女官がすつかり掃除をしてからお起きになると、花がないので、宮「あらツ。あの花は何處へやつた?」と被仰る。宮「曉方盗人が来たと言つたのは、枝でも少し折つたのかと思つた。誰が皆な盗たのか、見たか?」と被仰る。清「いえ、まだ暗くて、よくも見ませんでした。白つぼい者が居りましたから、花を折るかとお心配に咎めました」と申上げる。宮「だつて、こんなにすつかり盗れるものではない。殿がお隠しなされたのだらう」とお笑ひになる清「まさか。春風の仕業で御座いませう」と申上げると、宮「さう言はう

させ給る。今は得選を乗んとしつるに、珍なりや」など驚きて寄さすれば、清「然ば、先づ、其の御志ありつらん人に乗せ給て、次にも」と言ふ聲聞き付て、宮司「怪からず、腹穢く在しけり」など言は乗ぬ。其の次には正に御厨子が車にあれば、火も甚暗きを笑て、二條宮に参り着たり。御輿は疾く入せ給て、皆準備ひ居させ給けり。宮「爰に呼べ」と仰られければ、右京、小左近などいふ若き人々、参る人毎に見れど、無りけり。下るに隨ひ、四人づゝ御前に参り集て侍ふに、宮「如何なるぞ」と仰られけるも知ず、在る限下り果てぞ、辛じて見付られて、左京など「斯許仰らるゝには、何ど斯く遅く」とて、率て参るに、見れば、何時の間にか斯は、年來の御住居の體に、在し着たるにかと興し。宮「如何なれば斯う何かと尋ねばかりは見ざりつるぞ」と仰らるゝに、兎角も申ねば、諸共に乗たる人「甚理なし。最終の車に侍ん人は、如何でか疾くは参り侍ん。是も殆々得乗まじく侍つるを、御厨子が最惜がりて、

とて隠すのだ。盗つたのではなくて、降りてこそ降れなのだ」と被仰るのも、珍い事ではないが。御秀句だ。殿(隆)がお出でになつたから、寝くたれの朝顔を、時分外れと御覽にならうと引込んだ。御出でになるとすぐ隆(隆)あの花がないな。どうして盗られた。寝坊な女房達だな。知らないで居たのか」と被仰る。清(清)あら、私共より、とうに御存じのくせに」と小聲でいふのを、耳ばやにお聞き付けになつて、隆(隆)さうだらうと思つた。誰も外に見つける者はあるまい。宰相か其許の中だと思つて居た」と大笑ひなさる。宮(宮)まあ。だのに少納言は、春風のせいにして」と、宮様もにこ／＼遊ばして居らつしやるのがよい。宮(宮)春風のせいになど

譲り侍つるなり。暗う侍つる事こそ佗しう侍つれ」と笑々啓するに、宮(宮)行事する者の甚拙きなり。又何かは心知ざらん者こそ憚め。右衛門などは言かし」など仰らる。右衛門「然ど如何でか、走り先立ち侍む」など言も、傍の人、憎しと聞らんかし。宮(宮)體悪うて、斯く乗たらんも、偉かるべき事かは。制定たらんさまの、やんごとなからんこそ好しからめ」と不快氣に思し召たり。清(清)下り侍る程の、待遠に苦きによりてにや」とぞ申し改す。御經の事に、明日渡せ在さんとて、今宵参りたり。南院の北面に、差し覗たれば、高坏どもに火を點して、二人、三人、四人然べき同志、屏風引き隔つるもあり。几帳中に隔たるもあり。又然でも集り居て、衣ども綴ち重ね、裳の腰刺繡し、化粧する様は更にも言す。髪などいふものは、明日より後は有り難氣にぞ見る。女房(女房)寅の時になん渡せ給るなり。何か今まで参り給ざりつる。扇持せて尋ね聞る人ありつ」など告ぐ。さて實に寅の時かと装束き

して、「今は山田も作るらむ」とお誦じになるのも、誠に御優雅でよい。隆(隆)「さても残念な事。あれほど見つけられなと注意したのに、頓馬な奴で困る」と被仰る。隆(隆)「春風と空にいふのは、しやれて居る」と又お誦じになる。宮(宮)「たゞ言にしては、上手に思ひ付きました事で、今朝花をとつた様子は見たう御座いました」とお笑ひになるのを、小若君が、「いえ、少納言は、すつかり見て、「雨にぬれたのが、見ともない」と申ました」と被仰るので、殿(隆)が非常に御残念がられるのもおもしろい。さて八月か九月頃、私が退出するのを宮(宮)「もう少し、供養の間際まで」などと被仰るけれど、退出した。いつもより

立てあるに、明け過ぎ、日も差し出ぬ。西の對の唐廂になん、差し寄て乗べきとて、在る限渡殿へ往く程に、未だ初々しき程なる新參們は、甚憚し氣なるに、西の對に殿(隆)住せ給ば、宮(宮)「定」にも其處に在して、先づ女房、車に乗させ給を御覽すとて、御簾の中に、宮(宮)「定」淑景舍(原)三、四の君(名不詳)殿の上(貴)其の御妹三所立ち並て在すに、車の左右に、大納言(周伊)三位中將(隆)二所して、簾打ち上げ、下簾引き上げて、乗せ給ふ。皆打ち群てたにあらば、隠れ所やあらん。四人づゝ書立に隨て、某々と呼び立て、乗せ給に、歩み行く心地甚う實に驚しう、顯證なりとも尋常たり。御簾の中に、許多の御眼どもの中に、宮(宮)の御前(子)の見苦しと御覽せんは、更に佗しき事限なし。身より汗の流れれば、粧ひ立たる髪なども、上りやすらんと覺ゆ。辛じて過たれば、車の許に、甚う憚し氣に、清げなる御装ともして、打ち笑て見給も、現ならず。然ど倒す、其處までは往き着ぬこそ、偉き顔も無かと覺れど、

大層のどかに晴れた晝頃、宮「花の心は開けたか、どうか、どうか」と仰せ越されるので、清「秋にはまだ早う御座います、夜に九度も昇る心地が、致します」などと御返事申上げた。

(二條宮へ)御退出の夜は、車の順序もなく、我勝ちに乗らうと騒ぐのが憎らしさに、親しい三人と、清「どうしてかう車に乗る時に大騒ぎで、祭の歸路などのやうに、倒れさうにあわてるのだらう、見ともなし。よいわ、車がなくて乗り損つたと、おきよになつたら車を下さるだらうから」などと、笑ひ合つて立つて居る前で、押し合つて一かたまりわい／＼と乗つてしまふと、宮司「これだけですか」といふ、清「まだ此處に」と返事をする、宮司が傍

皆乗り果ぬれば、引き出て、二條大路に榻立て、物見車の如にて立て並たる、甚興し。人も然見るらんかしと、心躍動せらる。四位、五位六位など、甚う多う出で入り、車の許に來て、飾ひ物言などす。先づ院(子)の御迎に、殿(道)を初め奉りて、殿上と地下と、皆參ぬ。其れ渡せ給て後、宮(中)は出させ給べしとあれば、甚待遠しと思ふ程に、日さし上りてぞ在す。御車籠に十五。四輛は尼車。一の御車は唐の御車なり。其に續て尼の車。後口より水精の珠數、薄墨の袈裟、衣など、甚くて、簾は上ず。下簾も、薄色の裾少し濃き。次に只の女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅押し渡し、練の表着ども、甚う優雅し。日は甚麗なれど、空は淺緑に霞み渡るに、女房の裝束の艶ひ合て、甚き織物の色々、唐衣などよりも優雅しう美き事限なし。關白殿(隆)其の御次の殿ばら、在る限厚遇き奉り給ふ、甚う愛たし。是等見奉り騒ぐ。此の車どもの、二十立て並たるも、亦興しと見ゆらんかし。疾か出

へ來て、司「どなたと、どなた？」ときいて、司「いかな事。もうすつかりお乗りの事と思つた。どうしてこんなにお後れになりました。今度は得選を乗せやうと存じました。これは／＼」などとびつくりして、車を寄せさせるので、清「ではまあ、その御志の人をお乗せなさつて、そのあとでも」といふ聲を聞いて、(宮司が)「そんなに意地のわるい事を被仰らんで」といふから、乗つた。次の車は、ほんとうに御厨子の車なので、松明の火も暗いから、ぶつ／＼言ひながら二條宮についた。御輿はとうにお入りになつて、設けの御座に居らつしやる。「爰に呼べ」と被仰つたさうで、右京だの小左近だのといふ若い人達が、車の着くたんびに

させ給ばなど、待ち聞えさするに、如何ならんと待遠く思に、辛じて、采女八人、馬に乗て引き出ゆり。青末濃の裳、裙帶、領巾などの、風に吹き遣れたる、甚興し。豊前といふ采女は、典藥頭重正が知る人なり。蒲萄染の織物の指貫を着たれば、「重正は禁色許れにけり」と、山井大納言(道)は笑ひ給て、皆乗り續て立るに、今ぞ御輿出させ給ふ。愛たしと見奉りつる御有様に、是は比ぶべかりけり。朝日輝々とさし上る程に、木の葉の甚花やかに輝きて、御輿の帷子の色艶などさへぞ甚き。御綱張て出させ給ふ御輿の帷子の、打ち動きたる程、實に頭の毛など人の言は、更に虚言ならず。然て後に髪悪からぬ人も啣ちつべし。驚嘆う、嚴しう、仍如何で斯る御前に馴れ仕う奉るらんと、我が身も恐しう覺る。御輿過させ給ふ程、車の榻ども、副車に掻き下したりつる、又牛どもかけて、御輿の後に續たる心地の、愛たう輿ある有様言ふ方なし。在し着たれば大門の許に、高麗唐土の樂して、獅子狛犬踊

見ても、居なかつた。おりた順に四人づゝ御前に参り集るのに(居ないので、宮様が)「妙だ。どうしたのだらう」と被仰つたも、此方は知らず、ありたけ下りてしまつてから、やつと見つけられて(左京さん達が)「右、あんなに被仰つてだのに、どうしてかう遅く」と引ばるやうにして(宮様の處へ)参る。何時の間に、こんなにもとの通りのお住居にお歸りになつた事ぞとおもしろい。宮「何處に居たの大騒ぎをして探させた」と被仰る。何とも申上げないで居たら、一緒に乗つた人が「でも、一番終ひの車にのりましたので御座いますもの。とても早くなんか上れません。それすら、とても乗れさうも御座いませんでしたのを、御厨子が氣

り舞ひ、笙の音、鼓の聲に物も覺えず。此は何處の佛の御國などに來にけるにかあらんと、空に響き上るやうに覺ゆ。内に入ぬれば、色々の錦の揚張に、御簾甚青くて掛け渡し、屏幔など引たる程、凡て單に此の世と覺す。御棧敷に差し寄たれば、又彼の殿門立ち給て、「疾く下よ」と宣ふ。乗つる所だにありつるを、今少し明う顯證なるに、大納言殿(伊)甚物々しく清げにて、御下襲の裾、甚長く所狭氣にて、簾打ち上て、「疾」と宣ふ。繕ひ添たる髪も、唐衣の中に膨み、奇う成たらん。色の黒さ赤さ、へ見分れぬべき程なるが、甚化しければ、直とも得下す。女房「先づ後なるこそは」など言ふ程も、其も同じ心いや、女房「退せ給へ、畏し」など言ふ。伊「羞ぢ給かな」と笑て立ち返り、辛じて下ぬれば、寄り在して、伊「致孝などに見せて、隠て下せ」と、宮(定)の仰らるれば、來たるに、諒解なき」とて引き下して率て参り給ふ。然聞させ給つらんとおも、畏し。参たれば、初下ける人どもの、物の見ぬ

の毒がつて、讓つてくれましたので。眞暗でいやになりました」と笑ひくく申上げると、宮「行事する者がわるいのだ。なぜ又黙つて居たの。勝手を知らない者なら遠慮といふ事もある。右衛門などはさう言へばよかつたのに」と被仰る。右衛門「でも、とても追ひ抜けませんでした」などいふのも、他の人は憎らしいと聞いて居るだらう。宮「だつて、見ともなく、こんなに乗り後れるのも、感心した事ではない。ちやんと、きまつた通りの順に乗つたらよからう」と御不快さうだ。清「私がぐづ／＼して居りましたので、待遠しさに先へ乗つたので御座いませう」と言ひ直した。

御經供養の爲に、明日(積善寺へ)お出

べき端に、八人ばかり出で居にけり。一尺と二尺許の高さの、長押の上に在す。伊「自身に立ち隠て、率て参たり」と申し給へば、宮「何處」とて几帳の此方に出させ給り。未だ唐の御衣も奉りながら、在すぞ、甚き。紅の御衣尋常からんや。中に唐綾の柳の御衣、蒲萄染の五重の御衣に、赤色の唐の御衣、地摺の唐の羅に、象眼重たる御裳など奉りたり。織物の色更に一般似るべきやうなし。宮「我をば如何見る」と仰らる。甚うなん候つるなども、言に出ては平凡にのみこそ。宮「久うやありつる。其は宮の大夫(道)の、院の御供に來て、人に見ぬる同じ下襲ながら、宮の御供にあらん醜しと、人思なんとして、殊に下襲縫せ給ける程に、遅きなりけり。甚好き給り」など打ち笑せ給る。甚明かに晴たる所は、今少し明瞭に愛たう、御額上させ給る釵子に、御分目の御髪、聊偏て著く見させ給などさへぞ、聞ん方なき。三尺の御几帳、一双を交叉て、此方の隔にはして、其の後には、疊一枚を長方に縁をし

かけになるから、その前夜に(里から)上つた。南の院の北面の處から覗いたら、高坏などに火を灯して屏風を隔てに、二人、三人、四人と同じ位な人たちが、居るのもあり、几帳を間に立てたのもあり、又さうでなく、かたまつて、衣ものなどを綴ちかさね(たり)、裳の腰をさし(たり)、化粧は勿論、髪など(大さわぎしてひねくつて居るの)は、明日きりのものゝやうだ。ある女房が「寅の時間にお出かけになるのですよ。なぜもつと早くお出でにならないかつたの。扇を持つた使が探して居ましたよ」などと告げる。ほんとうに寅の時から支度して居ると、明け過ぎて日が出てしまつた。西の對の唐庇に車を寄せて乗ると、皆なが渡殿へ、往く

て、長押の上に敷て、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衛督忠君と聞けるが御女。宰相の君とは、富小路右大臣(藤原)の御孫。それ二人ぞ、上に居て見え給ふ。御覽じ渡で、宮宰相は彼方に居て、殿上人の居たる所往て見よ」と仰らるゝに、心得て「幸」爰に三人甚精く見侍ぬべし」と申ば、宮「然ば」とて召し上させ給ば、下に居たる人々「殿上許さるゝ小舎人なんめり」と笑と、下の人「こは笑せんと思ひ給るか」と言ば、下の「馬副の程ぞ」など言ど、其所に入り居て見るは、甚面目し。斯る事などを自ら言は、吹語にもあり、又君の御爲にも軽々しう、斯許の人をさへ思しけんなど、自ら物識り、世間批判などする人は、あいなく畏き御事に係りて、畏けれど、噫、畏き事などは又如何は。實に身の程過たる事も有ぬべし。院の御棧敷、所々の棧敷ども見渡したる、爰たし。殿(隆)は先づ院の御棧敷に参り給て、暫時ありて爰に参り給り。大納言二所(伊周)三位中將(隆)は陣近う参りけるまゝにて、

時、まだ初々しい新参の人などは堪らなく極りが悪さうだのに、西の對に殿はお住居なので、宮様もそこにお出で、まづ女房の車に乗るのを御覽になると、御簾の中に、宮、淑景舎、三四の(姫)君、殿の北の方、その御弟、と御六人並んで居らつしやる。車の左右に大納言殿、三位中將とお二人で、(車の)簾を上げたり、下簾も引き上げておのせになる。一群りになつて居るなら、隠れ所もあるのに、四人づゝ書立の通りに、「誰それ」と呼びたてゝは、お乗せになるので、歩いてゆく氣持が堪らなくいやで、むき出しとも何ともいひやうがない。御簾の中で大勢御覽の中でも、宮様に見ともないと御覽になられるのが一番辛い。汗が流れ

調度を負て甚相應しう美うて在す。殿上人四位五位夥う打ち連て、御供に侍ひ並み居たり。入せ給て、見奉せ給に、女房有る限裳唐衣。御匣殿まで着給り。殿の上は裳の上に小袿をぞ着給る。圖(繪)に書たる如なる御容どもかな。今以來今日はと申し給そ。三四の君、宮の御裳脱せ給へ。此の中の主君には、御前こそ在せ。御棧敷の前に陣を据させ給るは、尋常の事か」とて、打ち泣せ給ふ。實にと見る人も涙含しきに、赤色に櫻の五重の唐衣を着たるを御覽じて、圖(法)服一領足ざりつるを、俄に感しつるに、是をこそ借り申すべかりけれ。然すば、若し又、然様の物を切り縮たるにか」と宣するに、又笑ぬ。大納言殿(周)少し退き給るが、聞き給て、伊「清僧都のにやあらむ」と宣ふ。一言として興しからぬ事ぞ無きや。僧都の君(隆)赤色の羅の御衣、紫の袈裟、甚薄き色の御衣ども、指貫着給て、頭容の青う美しげに地藏菩薩の御様に、女房に交り歩き給も、甚興し。女房僧綱の中に、威儀具

るから、一生懸命繕つた頭も、ぞと髪が立つだらうと思ふ。やつと(御簾の前を)通り過ぎたらば、(今度は)車の處に、堪らなく氣まりの悪いほどきれいな御様子で(大納言様たちが)にこ／＼して御覽になつて居るから、もう氣が遠くなりさうだ。でも倒れもしずどうかうか車の中まで往きついた顔付は、どんなだつたらうと思ふけれども、とにかく皆な乗つてしまつたので、曳き出して二條の大路に榻を立てて、物見車のやうに立て列べたのはよい。人もさう見るだらうと胸がどきつく。四位や、五位や、六位の人などが多勢出入り、車の傍に来て、氣どつて何か言つたりする。

先づ、院(帝の御母)の御迎へに、殿(降道)

を初め殿上人地下などが皆な参つた。その御渡りがすんでから、宮様はお出ましになるといふので、待遠に思つて居ると、日がぼつてから(女院様が)お渡りになつた。御車を入れて十五、その中の四つは尼車で、(お召の)一の御車は、唐の御車だ。その次が尼車で、前、後ろから水晶の珠數や、薄墨の袈裟や衣などが殊勝げで、簾は上げず、下簾も薄色の末濃で、次に尼でない女房(車)が十、櫻の唐衣や薄色の裳や、おもには紅の表着に、鎌のも交つて、誠に優雅だ。日は誠にうら／＼かだけれど空は淺緑に霞み渡つて居る處へ、女房の装束が映りがよくて、派手な織物の、いろんな色の唐衣などよりも、優美で誠によい。關白様や、その次々の

足しても在さで、見苦う女房の中に」など笑ふ。父の大納言殿(伊)の御前より、松君率て奉る。蒲萄染の織物の直衣、濃き綾の打たる紅梅の織物など着給り。例の四位五位、甚多り。御棧敷に、女房の中に入れ奉る。何事の過失にか、泣き騒り給さへ、甚映々し。事始りて一切經を蓮の花の紅きに、一花づゝに入て、僧俗上達部、殿上人、地下、六位何彼まで持て渡る、甚う尊し。大行道、導師参り、回向。暫時待て、舞などする。終日見るに眼も怠く苦う、内裏の御使に、五位藏人参りたり。御棧敷の前に胡床立て居たるなど、實にぞ仍愛たき。夜さりつ方式部丞則理参りたり。「即て夜さり入せ給べし。御供に侍へ」と、宣旨侍つ」とて歸りも参らず。宮は仍宮歸て後に」と宣すれども、又藏人辨(高階)参て、殿(降)にも御消息あれば、道唯仰の隨に」とて、入せ給なんとす。院(子)の御棧敷より、「千賀の鹽竈」などやうの御消息、雅趣き物など持て参り通ひたるなども愛たし。事終て院還せ給ふ。

院司、上達部など、此の度は一半ぞ仕う奉り給ける。宮(中)は内裏へ入せ給ぬるも知ず、女房の従者們は、二條宮にぞ在さむとて、其處に皆往き居て、待ど待ど見ぬ程に、夜甚う更ぬ。内裏には宿直物持て來んと待に、清く見ず。新調なる衣の、身にも着ぬを着て、寒き隨に、憎み腹立ど効なし。翌旦來たるを、清如何に斯く心なきぞ」など言は、陳る事も然言れたり。翌日雨降たるを、殿は、道是になん、我が宿世は見え侍ぬる。如何御覽する」と聞させ給ふ。御安堵道理なり。

二月二十日 正暦五年のなり○法興院 もと攝政藤原兼家の邸にて二條院といひたりしを正暦元年改造したるもの○積善寺 法興院中に建てたる堂○一切經供養 一切經は大藏經といふ。釋迦所説の經典を編輯したるもの。それを書寫して寺院に寄附したる時に行ふ法要をいふ○女院 一條天皇の御母后○二條宮 中宮の里第、前に小二條とありし所。この前々年の十一月落成○あまにび 青みが、りたる風色○かたもん 綾の紋を糸をしづめて固く織りたるもの○たゞ直衣に 出衣などせず、すぐ直衣に重ねたる略式のさまなり○紅梅 紅梅の色にて初めは桃色なりしを後には紫と紅と混じたる色となりたり○龍紋 「綾文」の詠りにて、白絹の織物の地厚く強く緯糸多くして織目斜に高く光澤なし、無文の平絹に對して有文の綾なり○何かし

殿ばらなど、ありたけのお人が、大切に
おせわをなさる様子も誠に結構だ。
拜見して感じ騒ぐ私達の車が、二十立
ち並んで居るのも、(向うからは)やつ
ぱり立派に見えるだらう。宮様は、ま
だか〜とお待ちして居ると、中々永
い。どうなされたらうと思ふ中、や
つと采女を八人、馬に乗せて曳き出し
た。青裾濃の裳、裙帯、領巾などが、
風になびくのが誠によい。豊前といふ
采女は、醫師重正の馴染の人だ。蒲荷
染の織物の指貫を着て居るので、「重
正は色をゆるされたわい」と、山の井
の大納言はお笑ひになる。すつかり乗
り續いて車を立て、居ると、そこへお
輿が出た。女院様のよりも、又格段に
お立派だ。はなばなとさし上げる朝日

りう言には聞えん「決して蔭では申さぬ」なり。女を皇后もしくは中宮としたる父
の得意のさま見るやうなり。紫式部日記に藤原道長がこの同じ帝、一條天皇に女彰
子を上りて、その御産の御五十日の祝ひに、「宮の御て、(父)にてまろわらからず、
まろが娘にて宮わろくおはします、母もまたさいはひなりと思ひて笑ひ給ふめり、
よいなとこ(自身をさす)は持たりかしと思ひたんめり」など戯れ、ことしけるも同
じ心地なるべし○かたじけなくも 天皇に對してなり○三の御前 道隆の三女は神
宮敦道親王の北方と系圖にありて四女は御匣殿なれど三女もしばらく御匣殿たりし
にもあらんか○中姫君 吏宮の女御淑景舎なり、幾人ありても第二女を中姫君とい
ふならはしなり○上など「たれそれの北方など」なり○任せてを「は余情を含め
たる助辭、この下に「あらん」の意あり○例の君 「いつものあなたのかせ」俗に
「又初まつた」なり○いはゞいはなむ 後撰集に花山にて道隆酒たうべける折に素
性法師「山守は言はゞ言はなむ高砂の、尾上の櫻折りてかざむ」とありて兼澄と
はなし。同じやうの歌を兼澄もよみおけるにや、(この歌はなけれど後拾遺集に兼澄
の歌數首見えたり)○よき人ならば「歌の事をいひてわかる人間ならば」なり○春
風のして侍り 「春風の到りたらぬ里はあらじ、咲ける咲かざる花の散るらん」の
歌もあれども、あとの方に宮の詞「たゞ言にては」とあれば、たゞふと言へるなるべ
し○隱す 殿のせしとは言はぬとなり○ふりにこそ降るなりつれ 後撰集なる「神
無月時雨と、もに神なびの、杜の木の葉のふりにこそふれ」の句を思ひよせて言は
れしなるべし○今は山田も作るらむ 新敎撰集に「山田さへ今は作るを散る花の、か
ことは風に負せざらなむ」(貫之) 田を作る頃ともなれるなれば花の散るは是非な
し、風のとがとは思はじの意の歌なり○人の所に 人間の所にも、こんな馬鹿者が
居るといふ程の、罵りたる詞。俗にいはゞ「飛んでもない困つた奴だ」なり○そら

に、葱の花がきら〜輝いて、御輿の
帷子の色や艶までが、堪らなくお見事
だ。御綱を張つてお通りになる御輿の
帷子が、ゆれる時には、全く髪の毛が
よ立つなど、人のいふのも嘘ではな
い。あとでは、髪の毛の悪くない人でも、
愚痴をこぼす事だらう。何とも言へず
莊嚴で、又いつもの、どうして、かう
いふ御前に、近々と馴れて御仕へ申せ
るのだらうと、自分のからだを恐ろし
く思はれる。御輿がお通りになる間、
皆な車の榻に一時にかきおろして置
いたのに、又牛をかけて御輿のあとに
續ける心もちのよさ、おもしろさ、い
ひやうもない。
いよ〜お着きになると、大門の處で
高麗や唐土の樂をし、獅子狛犬が踊り

に「ひよいと」の意に、風は空に吹くものなればかけて、言へるなるべし○ずんせ
せ「春風」の詞をなるべし○小若君 伊周の子、松君をいふ。幼稚の時に誰をもいふ
代名詞○雨にぬれたるなど 浪花ゆゑになり○花の心開けたりや 白氏文集、長相
思(詩)に「九月西風興、月冷 霜華凝、思君秋夜長、一夜魂九升、二月東風來、
草折花心開、思君春日遲、一日鴈九廻」云々とあり○得選 采女の中より選ば
るればいふとぞ。御厨子所の女官○みづし 御厨子所の女官の略。得選をいふ○御
經の事 史料綜覽正曆五年二月廿日の條に「關白道隆積善寺ヲ供養ス中宮、東三
條院行啓アラセラル」とあり、その前十七日の條に「關白道隆ノ奏請ニ依リ積善寺
ヲ以テ御願寺ト爲ス」とあり(積善寺は道隆の父兼家の經營せるもの。成るに及ば
ず薨去ありしかば、道隆その志を嗣ぎ、同じく亡父の造り置きたる法興院の中に造營
し落成したるなり)南の院 道隆の邸。東三條の南の院なり○高つき 燈臺○實の時
今の午前四時○西の對 南の院のなり○からびさし 屋根をそらせたる唐風の庇○
三四の君 三の君は冷泉院の皇子敦道親王の配となりしかども中絶えて、後には一
條わたりに敵かにてありしといふ。四の君は御匣殿とて一條天皇の皇子敦康親王の
母代にて容貌美なりしかど早世したり○おんおとうと三所 高階氏の系圖に貴子の
妹は一人なり「三所」は「六所」を誤れるか、一本には、「そのおんおとうとに、
いつところち並みて」とありさらば惣てにて六人なれば數合ひたり○下すだれ
すだれの中に又かくる帷。白絹の裾を紫にほかしたるなど○書きたて 目錄をいふ。
こ、は乗車の順番をしるしたる書付をいふ○唐の御車 車の屋根を唐様の破風に作
りたるもの。總體に高く大きく乗降には棧による○薄色 例の紫のなり○かとり
堅織の約。こまかに織れる絹布○髪あしからぬ 髪よからぬ人ならずとも、そ、
け亂れて、かこたむとなり○獅子狛犬 その形したる舞人○あげばり 上下四方に
幕をまといて宮室に象れるもの「醒舎」といふ○屏幘 幕の類○むねたか 藤原氏

舞ひ、笙の音や鼓の聲で有頂天になつてしまふ。これはまあ何處の國に來たのだらうと(思ふほど)空まで響き上るやうに聞える。中に入ると、色々の錦で出來た帷舎に、眞青な御簾をかけ渡し、屏帳など引いてある様子が、この世のものとは見えない。御棧敷の處へ車をつけたら、又さつきの若殿達が立つて居らつしやつて、「早く下りよ」と被仰る。乗つた所よりも、こゝは又一層明るくてむき出しなのに、大納言様(伊)は大層もの／＼しくお美くて、御下製の裾を長々と所狭げにお引きになり、(車の)簾をあげて「はやく」と被仰る。(上氣して)、繕ひ添へた鬘の毛も、唐衣の中でふくらみ、變になつたにちがひない。その髪の毛と、

なり○はし 几帳、屏風などの障間なり○よろしからむや 俗に「よい位ではない」にて激賞せるなり。先づ上着をほめて、次に下に着られしものより、順に又上着をいへり○柳 表白、裏青○唐のうすもの 羅なり、支那製のうすもの○象眼かざね 象眼は金銀などにて細く繪もやうなかけをいふ、「かざね」とは地摺の文ある上に金銀にて又もやうなかける故にいふ○忠君 右大臣藤原師輔の子○富小路右大臣 左大臣藤原時平の次男○小舎人 禁秘抄に「横敷角柱付藤芳綱」付、鈴召小舎人○之時藏人引之」とありてさるべき時に殿上に召さる、なれば少納言を下より召し上せられしを女房の妬み言ふなり○馬さへ 馬副をいふ。宰相の父重輔は右馬頭なれば、宰相の君の傍に清少の召し上げられたるを、馬と馬副の男とに擬へて戯れ誹れるなり○あいなく 何となくなり、漫然と。それが目的ならずとも宮様をもそのやうにならんと恐多しとなり○陣 近衛陣なり○あか色に櫻の 赤地に櫻のしやうを白く出せるなり○五重の唐衣 紛はしき書き方なれど、三色の糸にて模様を織り出だせるを三重の織物といへば、こゝは、五色の糸にて櫻のしやうを織り出だせる唐衣の意と見るべし○法服 「ころも」なり○濟備都 清少納言の事を戯れていふなり○うすき色 例の紫のなり○打ちたる 艶を出したるをいふ。この下に「柏」の意あり○紅梅の織物 單なり、紅梅はたて糸紫、よこ糸紅にて織りたるをいふ○大行蓮 法會の時、衆僧列を止して經をよみつ、佛の周圍を轉廻するなり。この下に「あり」の意あり○回向 「回」衆善「向」菩提の意。讀經して亡靈の菩提を念すること○胡床 後世の床机なり腰かくるもの。漆にて塗り、糸にて飾りあり○夜ざりつ方 「夜」しありつ方の約音にて「夜」になりてから「なり」○入らせ給ふべし 天皇の御詞なり。中宮に宮に參られよとなり○藏人辨 藏人にて辨官を兼ねたるなり辨官は太政官に屬し左右に分れて大中少あり(左大辨、右中辨の如し)宮中の庶政を司る。才人の官なり○千賀のしほがま 女院の、中宮と近くおはししながら御對面なかりし事を、古

かもじの、赤い黒い差別もよく見えさうなのが堪らなく辛くて、容易に下りられない。「まあ、あとの人から」などと言ふと、同じ心持と見えて、(あと)の車の人も)「お退き下さいまし、勿

たいなう御座います」など、言つて居る。大納言極りが悪いのだな」とお入りになつたが、やつと下りたら又居らして、大「むねたかなどに見せないで、隠しておろせ」と宮様が被仰るから來たのに、察しの悪い」と、引きおろして、連れて往つて下さる。(まあ)さう仰せつたのかと思ふのも、恐れ多い。

上ると、先に下りた人たちが、物の見えさうな處に、八人ほど出て居た。一尺餘(いや)二尺ほどの高さの長押の上に、(宮様は)お出でになる。大納言さんが、「立ち隠して連れて参りました」と被仰ると、「どれ」と宮様が几帳のこちらへお出になつた。まだ唐衣のお召のまゝで居らつしやるのが、お立派だ。紅の御衣が、一通りのお美さではない。中に唐綾の柳の御衣、(その上に)えび染の五重の御衣、それから赤色の唐の御衣で、地摺の唐のうすものに象眼をした御裳など、召して被居る。御配色が似るものがないほどよい。宮様が「今日の私はどうだつた？」と被仰る。「大層お立派で居らつしやいました」なども、口で言ふと月並になつてしまふ。宮「待遠しかつた？。宮の大夫が院の御供で來て、(その時)見られたのと同じ下製のまゝで、宮の御供をしたら、何とか批判されるだらうと、別の下製を縫はせなかつた爲に、手間どれたの。おしやれさん」とお笑ひになる。明るく晴れ／＼したこゝでは、一しほ美しく、御額髪をお上げになつた釵子に、御分け目の御髪が一寸片よつて、眼立つなどまでが、堪らなくお美しい。三尺の御几帳一双をさしちがへて、

歌の意にて御消息ありしなり續後撰集、詠者未詳「みちのくの千賀のしほがま近ながら、からきは人に逢はぬなりけり」千賀の浦に近をかけ、しほがまのしほの縁語に、からきといへり)○院司 女院の院の長官(司は積み重なる義にて首長、頭目といふ)○かたへぞ 一半は中宮に供奉せしなるべし○さいはれたり これも誤寫なるべし、意味は口譯の如くあるべき處なり○これになん 御法事の時に晴れて、翌日雨なるをいふ。

此方との隔てにして、その後ろには疊一枚を横長に縁を見せて、長押の上に並行に敷いて、中納言さんといふのは、關白様の叔父様の兵衛督忠君といふ方の御娘だし、宰相さんといふのは、富小路右大臣さんの御孫、この二人の上臈が、長押の上の座に居て御覽になる。宮様は、その邊を御見わたしになつて、「宰相は彼方へ往つて、殿上人達の居る所で御覽」と被仰ると、御意を汲んで、空「こゝで、三人は結構に見られませう」と申上げなされる。宮「では（そこにお上り）」と（私を）お召し上げになると、下に居た友達が、「おや／＼殿上を許された小舎人のやうだ」と笑ふと（一人が）「あんな事を笑はせやうと思つて」といふと、又一人の女房が、「丁度馬副だ」なんていふけれども、そこに上つて見るのは誠に面目だ。こんな事を自分でいふと自慢のやうでもあり、又宮様の御爲にも軽々しく、この位の人間をまで御寵愛になつたのかなど、何かと心得て批評などする人は、自然宮様をまで御批難申上げるだらうと勿體ないけれども據どころない。全く身に過ぎた事もあるものだ。

院の御棧敷や、あちこちの棧敷の見渡しがまことにお立派だ。殿は先づ院（女院）の御棧敷にお出でになり、暫らくして、此處へお出でになつた。大納言お二人、（それから）三位の中將は陣に御出仕のまゝで、弓箭を負つて、さも武官らしく立派な御様子だ。殿上人や、四位や、五位が、大勢並んで御供をして來た。（關白様が）お入りになつて、（宮様を）お見上げになると、ありたけの女房が裳や唐衣で、御匣殿も御同様だ。殿の上（貴）は、裳の上に小桂をお召しになつて居る。（關白様が）「あゝ繪に書いたやうな皆さんの御様子だ。あとで、今日は窮屈だつたなどは被仰るな。（が）三四の君は、宮様に御裳をおぬがせ申せ。この中の主君は宮様だ。御棧敷の前に、陣をお据ゑになるといふのは、一通りの事ではない」とお泣きになる。ほんにと拜見する人も涙含ましいのに、（私が）赤色に櫻の五重もやうの唐衣を着て居るのを御覽になつて、「法服が一着足らなかつたので當惑したが、これを借りればよかつた。ひよつとしたら、それも法服

を切り縮めたのではないか」と被仰るので又笑つた。大納言様が少し離れて居らしたが、お聞きになつて、「清僧都の衣の事ですか」と被仰る。一言々々をかしい事ばかりだ。僧都さん（隆）は赤の羅の御衣、紫の御袈裟と、ずつと薄色の御衣に指貫をお着になり、おつむりが青く、きれいで、（まるで）地藏菩薩のやうな御様子で、女房と交つて、お歩きになるのも風情がある。「僧綱の中に、勿たい振つても居らつしやらないで、女房の中に見ともない」など笑ふ。お父様の大納言さん（伊）の處から、松君をお連れ申した。えび染の織物の直衣、濃い綾の打つた桂、紅梅の織物の單などをお召しになつて居る。御供に例の四位五位が多勢だ。御棧敷で女房の中に抱いてお入れ申す。どういふ龜相があつたか、おむづかりになるのまでが、はえ／＼しい。

式が初まつて、一切經を、蓮の造り花の紅いのゝ、一花づゝに一卷を入れて、僧、俗、上達部、殿上人、地下六位その他の人にまで持つて渡るのが誠に尊い。大行道の後に、導師が參つて回向し、暫らくして舞樂がある。一日中見て居ると、眼も疲れて草臥れる。主上の御使に、五位の藏人が參つた。（宮様の）御棧敷の前に、胡床を立て、居るなどが、誠によい。暗くなり頃に、式部丞則理が參つた。「今夜すぐにおかへりになる。お供をして參れ」と宣旨が御座いました」と言つて、そのまゝ居る。宮様は、やつぱり「一度（二條宮へ）歸つてから」と被仰るけれども、又藏人の辨（順）が參つて、殿（隆）にもその事について宣旨があつたので、隆「仰せのまゝに遊ばせ」とて、御所へお入りの事となる。

院の御棧敷から、「千賀の鹽がま」などいふ御手紙や、しやれた物などをお持たせになつたのもよい。御法事がすんで院はお還りになる。院司や上達部など、此の度は半分ばかりだつた。

宮様は、内裏へお入りになつたとも知らず、女房の下女どもは（主人が）二條の宮にお出でだらうと、皆なそこに往つて、待てども／＼主人たちが來ない中に、夜半になつてしまつた。内裏の（私たちの）方では又、宿直物を持つて來さうなも

のと待つのに、きれいに来ない。新しい晴衣の、からだに馴染まないのを着て、寒さに憎み腹立つても、何ともならない。翌る朝早く来たから、「どうして、あんな氣のきかない事をするの」など、言つても、言ひわけも尤もでもある。翌る日、雨が降つたら、殿は「これで私の運の強さは分つた。如何御覽になる？」とお申上げになる。御安堵なされたも御もつともだ。

貴いもの(は)、

九條錫杖、念佛の回向。

尊きもの、

九條錫杖、念佛の回向。

九條錫杖 錫杖經といふ書名なり、九條より成る。作者未詳。一條を唱へ終る毎に錫杖を振ふ法なるにより名づく。錫杖は上部を錫、中部を木、下部を牙又は角にて作り、頭を塔婆形にして一の大環をはめ、それに又數箇の小環をつく。もと印度にて僧侶が途を行く時、響を發して猛獸毒蛇を避くる用としたりしもの○念佛の回向 念佛の後に唱ふる回向文なり。觀無量壽經の「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」の十六字をいふ。

歌は、

杉立てる門。神樂歌もおもしろい。今様は、長くて曲折のあるのがよい。風俗を上手に歌つた(のもよ)。くば、とぶらひ來ませ杉立てる門よりとりたる諸物なるべし○神樂歌 神事に奏する歌。樂器は和琴、大和笛、拍子なり。後に萬葉

歌は、

杉立てる門。神樂歌も興し。今様は長く、癖付たる。風俗巧く歌たる。

歌、こは諸物をいへり○杉立てる門 古今集雜の「わがいはは三輪の山もと戀しくば、とぶらひ來ませ杉立てる門よりとりたる諸物なるべし○神樂歌 神事に奏する歌。樂器は和琴、大和笛、拍子なり。後に萬葉

を加ふ、歌曲の例「榊葉の香をなつかしみ、とめくれば、八十氏人ぞまとあせりける」神垣の三室の山の榊葉は、神の御前に茂り合ひにけり」○今様 古き諸物の神樂、催馬樂などに對して當世風の歌の義。字數も長短不同なりしが漸く七五七五と重ねゆくいは歌の體となりたり、「古き都を、來て見れば、淺茅が原とぞ、なりにける、月の光は、隈なくて、秋風のみぞ、身にはしむ」の類○くせづきたる 節長くて曲折のあるをいふ○風俗歌 雅樂に用うる歌曲の一種。古代諸國に行はれたる歌謠、即ち國風歌なり。大嘗會の時、悠紀主基兩國より來るをいふ。

指貫は、

紫の濃い(と)萌黄(がよい)。夏は二藍(がよい)。ひどく暑い時分に、蟬の羽の色をしたのも、涼しさうでよい。

指貫は、

紫の濃い萌黄。夏は二藍。甚暑き頃、夏虫の色したるも、涼し氣なり。

指貫 袴の一種にて「さしぬきのほかま」なり衣冠、直衣、狩衣の時に用ゆ。裾を絲にて指しぬきて足にくくりつくる故にいふ。平絹或は織物にて作る、一名絹の狩袴、○二ある 赤藍と青藍との間色○夏虫 蟬をいへり、蟬の羽の色。

狩衣は、

香染の淡いの(と)白(と)ふくさの赤色(や)松葉色。(がよい。それと)青葉(や)さくら(や)やなぎ(や)又青い(のも)藤(も、すべて)男は何色でも似合ふ。

狩衣は、

香染の薄き。白き。伏紗の赤色、松の葉色したる。青葉。櫻。柳。又青き。藤。男は何色の衣も。

香染 丁子にて染む、淡紅に黄を帯びたるもの○ふくさ うち表同じ色を合せたる

さしぬきは かりぎぬは

ひとへは わろきものは

もの○あか色 黄檀に茜をまぜたる色。織物ならば経紫、緯赤なり○青紫 染色にも織色にも、この色の名なし、一本には「襖は」とあり(襖は袖の兩腋あきたるもの)されども文勢、狩衣の色の續きらしければ流布本のまゝとす○櫻 表白く裏濃き蘇芳色○柳 表白く裏青きをいふ○藤 淡紫。

單衣は、

白(がよい)。東帯の時の紅の單衣などを、無雜作に着たのは(又)よい。でも、やつぱり、汚れて、色の黄ばんだ單衣など着たのは、嫌なものだ。練色のを着る事もあるが、やはり單衣は白いのが、男も女も引立つ。

よくないものは、

詞の字を變に使つたのだ。只文字一つで、へんにも上品にも、下品にもなるのは、どういふものだらう。でもさう思ふ當人すら、格別上手な書き方をす

單衣は、

白き。晝装束の紅の單衣、柏など、假初に着たるは好し。然ど仍色ばみたる單衣など着たるは、甚厭し。練色の衣も着たれど、仍單衣は白てぞ、男も女も萬の事勝りてこそ。

單衣 裝束の下に重ねて着る裏なき衣○ひとへあこめ あこめは間籠にて衣の間に着る、裏附のものなれども、單衣のものあり。桃華菫葉に「或紅打柏一重ニテモ」とありて單衣の兼用に着たるなるべし○かりそめに 曇き時など東帯姿ならずして東帯下の柏單衣を一寸着たるが碎けておもむきありの意。

醜きものは、

詞の文字悪く用たるこそあれ。唯文字一つに奇くも、貴にも、賤くもなるは、如何なるにかあらん。然は斯う思ふ人、萬の事に優ても得有じかし。孰を善き、悪きとは知にかあらん。然とも人を

るでもないから、どれがよい(文だ)とか、わるい(文だ)とか分るものではない。けれどもまあ、たゞ一寸さう思ふだけだ。何か一寸言ふにも、「その事を然せんとす」「言はんとす」といふのに「と」の字をなくして、たゞ「言はむする」「里へ出でんする」などいふと、何だか大へんにへんだ。まして、文に書くのに、それでは仕方がない。(又)物語などこそ、書き損じなどすると、つまらなくなつて、作つた人までが値打がさがる。書き直して、(傍に)

「なほす」「定本のまゝ」など書きつけてあるのが、誠に残念だ。「一つ車に」を「ひてつ車に」などいふ人もあり、「もとむ」といふ事を、「みとむ」とよくいふ。男などが無雜作に、わざとへんな言ひ方をしたりするのは、まあよい。さも間ちがつて居なさに、言ひなれて居るのが、見劣されるのだ。

わろきものは

知じ。唯然打ち覺るも言めり。難義の事を言て、「其の事然爲んとす」と言んといふを、「と」文字を失ひて、唯「言んする。」「里へ出んする」など言ば、即て悪し。況て文を書ては、言べきにもあらず。物語こそ拙う書などすれば言ひ効なく作者さへ最惜けれ。「訂す。」「定本の儘」など書き付たる甚口惜し。「一つ車に」など言ふ人もあり。「もとむ」といふ事を、「みとむ」と皆言めり。甚賤き事を、男などは、特と繕はで、殊更に言は悪からず。我が詞に持て付て言が、輕侮するなり。定本のまゝ 不明なるはかく記しおくなり。

下がされは 扇の骨は ひあふきは

下襲は、

冬は、躑躅。搔練がさね。蘇枋襲(がよ)。夏は二藍。白襲(がよ)。

下襲は、

冬は躑躅。搔練襲。蘇枋襲。夏は二藍。白襲。

扇の骨は、

青地(の紙に)は、赤(のがよく)、紫(の紙に)は、緑(がよ)。

扇の骨は、

青色は赤き。紫は緑。

檜扇は、

無地(か)、から繪(がよ)。

檜扇は、

無紋。唐繪。

檜扇 檜の薄板にて作れる扇。公卿は廿五枚、殿上人は廿三枚を合せ、糸にて綴づ。婦人の用うるは廿九枚にて、繪をかき、又綴糸の余りを垂る、拍扇といふ。皆官家の用なり○から繪 もろこし風の繪。

神は、

松の尾(がよい)。八幡(は)この國の天子で、おはしましたのが、誠に結構だ。行幸などに、菟花輦でお渡りになるなどが、誠によい。大原野(もよい)。賀茂は、言ふまでもない。稻荷(もよい)。春日は、又誠によい。佐保殿などいふ名までが、おもしろい。平野は、あいた家があるから、「こゝは何をする所?」ときいたら、「神輿宿」といつたのもよい。忌垣に、薦などが澤山かゝつて、紅葉のいろんな色があつた。「秋にはあへず」と、貫之が詠んだのも思ひ出されて、じいつとそこに立つて居た。みこもりの神も誠によい。

神は、

松尾。八幡、此の國の帝にて在しけむこそ、甚愛たけれ。行幸などに、菟花の御輦に奉るなど、甚愛たし。大原野。賀茂は勿論なり、稻荷、春日甚愛たく覺させ給ふ。佐保殿などいふ名さへ興し。平野は空虚なる屋ありしを、爰は何する處ぞと問しかば、神輿宿と言しも愛たし。忌離に薦など多く羅りて、紅葉の色々ありし。秋には敢ずと貫之が歌思ひ出られて、熟々と久う立れたりし。水分神甚興し。

松尾 山城葛野郡松尾村にある社、大山咋 命に市杵島媛を配祀す○この國の帝應神天皇を祭る故にいふ○大原野 山城國乙訓郡大原野にある藤原氏の祖、天兒屋根命を祀れる社○佐保殿 拾芥抄に「奈良、佐保殿、淡海公家、冬嗣大臣家」とあり大和添上郡佐保村にあり。藤原の人々春日社參の時に小憩する所。佐保山、佐保川など傍にあり○平野 山城葛野郡大北山村平野にある社。桓武天皇の御母の遠祖百濟國王を祀れりといふ○みこしやどり 車宿なるを、神のなればいふ○忌垣 齊ひたる垣の義にて社の周圍にある垣をいふ○貫之が歌 古今集秋下に貫之「ちはやぶる神の忌垣にはふ薦も、秋にはあへず移るひにけり」(あへずは俗に「かなはず」なり)○つくくと久しう立たれたりし 忌垣のつたに貫之の歌を思ひ出で、つく

神は

崎は 屋は 時奏する

づく久しう立ちたりしさま情趣深し〇みこもりの神 大和國吉野山にあり、御子守の義にとりて、ちこ好きなる心になかすと云へるか。

崎は、

唐崎。伊加が崎。三保が崎（などがおもしろい）。

崎は、

唐崎。伊加が崎。三保が崎。

ほとりにあり、「波の花沖からさきて散り来り、水の春とは風やなすらむ（伊勢）〇いかゞ崎 近江國滋賀郡石山の南、蜻蛉日記に「石山に参りて舟にて歸るといかゞ崎、山吹の崎などいふ所を見やりて云々」とあり〇三保が崎 駿河にも出雲にもあれど「三保ヶ崎」、「三保の浦わ」など古くより歌ひあれば駿河のをいへるか「風早の三保の浦わをこぐ舟の、船人さわぐ浪立つらしも」

屋は、

まろや。あづま屋（がよい）。

屋は、

丸屋。四阿屋。

まろ屋 葦茅などにてかりそめに作れる家、「旅人の茅刈りおほひ作るてふ、まろやは人を思ひ忘るな」はかなき處におもむきあるなり〇あづま屋 四方に屋を葺きおろし、四柱にして壁なき家づくりの名。これもかりそめなるにおもむきあるなり。備馬樂東屋あづま屋のまやのあまりの雨そゞぎ、我れ立ちぬれぬその戸開かせ」

時を申上げるのが誠におもしろい。ひ

時奏する甚う興し。甚う寒きに、夜半ばかりなどに、こぼ〜と

どく寒いのに、夜半頃などに、こぼこぼと音をさせ音を引ずつて来て弦打などして、「何家のなにがし、時丑三つ」（とか）「子四つ」とか上品な聲で言つて、時の杓をさす音がするなどは、たまらなくおもしろい。「子九つ」「丑八つ」など、間ちがつた呼び方を田舎者はするが、すべていつでも四つだけに杓はさすのだ。

こぼめき、履摺り来て、弦打などして、「何家の某、時丑三刻」「子四刻」など、上品なる聲に言て、時の杭さす音など、甚う興し。子九つ、丑八つなど、こそ、里びたる人は言へ、惣て何も何も四つのみぞ、杭はさしける。

時奏する 禁中にて夜替の武士の時刻を奏するをいふ〇丑三つ子四つ 一晝夜十二時を四つ、に小分し、すべてにて四十八刻となしありたれば、三つ四つといふ（一夜を戌、亥、子、丑、寅の五更とし一更を五刻又五點とす、鼓をうつに易の陽數九に始まり時ごとに倍して撃つ、子午の時を九つといひ、丑、未を八つ、寅、申を七つ、卯、酉を六つ、辰戌を五つ、巳、亥を四つといふは、九を相倍し、二九十八、三九二十七なるを各十位を捨て、その余を撃つに因るなり〇あてはか 近衛の武人は、いづれも自家の子弟なればなり〇時のくひ 清凉殿の殿上の間の小庭に、時を書ける簡あり、それを杓にさす。十二時の中、各時の第四刻にのみさす〇子九つ丑八つ 午前十二時（午の時）と午後十二時（子の時）共に鼓の數九、午前二時（丑の時）は鼓の數八、杓をさすは、すべて一時（今の二時間）の中の第四刻のみなるを、田舎者は、子九つ、丑八つなど間ちがへいふとなり。

日がうらゝかにさして居る晝頃（や）、又夜ふけて、もう、子の時々分だらう、（御寝成つてか）と思ひ申上げて居る時に、主上「男ども」とお召しになつたのが、誠におもしろい。（又）、夜中頃に、

日のうら〜とある

日の朗々とある晝つ方、甚う夜更で、子の時など思ひ参する程に、男們召たるこそ、甚う興しけれ。夜半ばかりに、又御笛の聞たる、

御笛の聞えたのが、堪らなくおもしろ
う。

成信の中將は、入道兵部卿宮の御子さ
んで、御きりやうが誠によく、御性質も
誠によい。伊豫守兼資の娘が、飽きら
れて、親が伊豫へつれて往つたのは、
どんなに悲しかつたらうと察しられ
る。曉に（その女が）出立するとて、前
の晩にお出でになつて、在明月にお歸
りになつた直衣姿などは（女が忘れ
ないものだつたらう）。
前から、しよつちうお出でになつて、
いろ／＼お咄しなされ、人の噂など、
悪い事は悪いと（打明けた評など）被

甚う愛たし。

まのことも 殿上の男は殿上人なり○御笛 一條天皇は笛の妙手におはしませしな
り。御輿出づれば深夜にも遊ばせしと見ゆ。御寂の中に主上の御笛の音をきく宮女、
ことに清少のやうなる人には感深かりしなるべし。

成信 中將は、入道兵部卿宮（平敦）の御子にて、容貌甚美し氣に、
性質も甚美う在す。伊豫守兼資が女の、忘れて親の伊豫へ率て下
向し程、如何に哀なりけんところ覺しか。曉に往とて、今宵在
して、有明の月に歸り給けん直衣姿などこそ。

在昔常に在して物語し、人の上など悪きは悪しなど宜しに、物忌
など、奇蹟しう爲る者の名を、姓にて持てる人のあるが、他人の子
になりて、平など言ど、唯舊の姓を若き人々言種にて笑ふ。有様
も、異なる事なし。兵部とて、趣致き方なども難きが、有繫に人な
どに差し交り心などのあるは、御前邊に見苦しなど仰らるれど、
腹汚く知り告る人もなし。一條院作れたる一間の所には、難面き

仰つた。

感心に物忌などよくする人が、名を姓
で呼ばれて居たが、よその養女になつ
て「平」などゝいつても、やつぱりも
とのまんまの名を言つては、若い人達
は噂の種にして笑つて居た。兵部と
いつて、様子も格別優な所もないのに、
さすがに出しやばる氣があるのを、宮
様はおいやがりになるけれども、意地
わるく、忠告してやる人もない。一條
院に作られた一間の處には、厭な人は
決して入れず、東の御門の真正面のし
やれた小廂に、式部さんと夜晝一緒に
居ると、宮様もいつも物見に（そこに）
お出ましになる。今夜は小廂でなく中
に寝やうと、南の廂に二人寝た後に、
恐ろしく叩く人があつたが「うるさい

人をば更に寄す、東の御門に直と向て興しき小廂に、式部の御許、
諸共に、夜も晝もあれば、宮も常に物御覽じに出させ給ふ。今宵
は皆内に寝んとて、南の廂に、二人臥ぬる後に、甚う叩く人のあ
るに、煩しなど言ひ合せて、寝たるやうにてあれば、仍甚う喧
う呼を、宮「彼れ起せ、虚寝ならむ」と仰られければ、此の兵部來
て起せど、寝たる體なれば、兵「更に起き給ざりけり」と言に往た
るが、即て居付て物言なり。暫時かと思に、夜甚う更ぬ。權中將
（成）にこそ有なれ。清「此は何事を斯は言ふ」とて、唯密に笑も、
如何でか知ん。曉まで言ひ明して歸ぬ。清「此の君、甚忌々しかり
けり。更に在せんに物言じ。何事を然は言ひ明す」など笑に、遣
戸を啓て女は入ぬ。翌旦例の廂に物言を聞ば、兵「雨の甚う降る
日、來たる人なん甚憐なる。日頃覺束なう憂き事ありとも、然て
濡て來たらば、憂き事も皆忘ぬべし」とは、何て言にかあらんを。
昨夜も、其が彼方の夜も、惣て此の頃は、打頻り見る人の、今宵

事」など、二人で言つて、寝たふりを
して居ると、いよくやたらに大聲で
呼ぶ。すると、(宮様が)「起しておや
り、空寝にちがひない」と被仰つたの
で、その兵部が起しに來たけれども、
すつかり寢込だふりをして居ると、(兵
部は)、「どうしてもお起きになりませ
ん」と(外へ)言ひに往たらしいが、
そのまゝ、咄し込んで居る。ぢき歸るか
と思ふ處が、夜半になつてしまつた。
權中將(成)らしい。「まあ何を言つて
居るんだらう」と(此方で)、こそ／＼言
つて居るのも知らず、とう／＼咄し明
して歸つた。「いやな人だ。今度來な
さつても何も言ふまい。何をあんなに
咄し明したんだらう」など、笑つて居
ると、遣戸を啓けて女は入つて來た。

も甚からん雨に障で來らむは、一夜も隔じと思ふなんめりと、憐
なるべし。然て日頃も見ず、待遠くて過さん人の、斯る折にしも
來んをば、更に又志あるには得せじとこそ思へ。人の心々なれ
ばにやあらむ。物見知り、思ひ知たる女の心ありと見るなどをば
語て、數多往く所もあり。舊よりの縁などもあれば、繁しも得
來ぬを、仍然る甚かりし折に來りし事など、人にも語り續せ、身
を賞られんと思ふ人の所爲にや。其も無下に志なからんには、
何しにかは、然も所作しても見んと思ん。然ど、雨の降る時は、
唯煩しう、今朝まで晴々しかりつる空とも覺ず、憎くて、甚き
廊の愛たき所とも覺ず。況て甚然ぬ家などは、疾く降り止めか
しとこそ覺れ。月の明きに來ん人はしも、十日、二十日、一月若
は一年にても、況て七八年になりても、思ひ出たらんは、甚う興
しと覺て、得逢まじう、理なき所、人目憚むべきやうありとも、
必ず立ながら物言て返し又留るべからんを、留などしつべし。

翌る朝、その廂で咄して居るのをきく
と、(兵部が)、「雨のどしや降りに來
る人は、ほんとに好きだ。いつもは疎
く薄情でも、大雨にぬれて來られると、
それまでの恨みもすつかり忘れてしま
ふ」とは、一體何を感じての咄なんだ
らう。

昨夜も一昨日の晩も、續けて通ふ人が、
今夜の大雨にも平氣で來ると、一夜も
隔てじと思ふんだらうと嬉しからう。
さうでなく、近頃一向來ないで、どう
したのかと思つて居る處に、そんな時
だけ來たのでは、別段志があるからだ
とも、好意に受とれない。人々の心持
だらう。物分りのいゝ、しやれた女な
どに馴染んで、彼方此方往く所も多く、
又もとからの本妻などもあるので、ち

月の明き見るばかり、遠く物思ひ遣れ、過にし事、憂かりしも、
嬉かりしも、興しと覺しも、只今の如に覺る折やはある。狛野の
物語は、何ばかり興趣き事もなく、詞も古向き、見所多らねど、
月に昔を思ひ出で、虫食たる扇取り出で、「舊來し駒に」と言て
立る門、憐なり。

雨は焦躁きものと思ひ染たればにや、片時降も甚憎くぞある。
尊き事、面白かるべき事、尊く愛たかるべき事も、雨に降れば、
言ふ効なく口惜きに、何か其の濡て啣ちたらんが、愛たからむ。
實に交野少將誹たる落窪少將などは興し。其も、昨夜、一昨
日の夜も來しかばこそ興しけれ。足洗たるぞ憎く汚かりけむ。然
では何か風などの吹く荒々しき夜來たるは、頼しくて興しうもあ
りなん。雪こそ甚愛たけれ。忘れめやなど獨語て、忍たる事は勿
論なり、甚然あらぬ所も直衣などは更にも言ず、狩衣、袍、藏
人の麴塵色などの、甚冷やかに濡たらんは甚う興しかるべし。緑

よい／＼とも来ないのに、やつぱりそんな凄惨な天気の時に来たなど、人にも咄して評判させ、自分を譽めさせやうと思ふからの仕業かも知れない。でも、まるきり志がないのなら、何しに、そんなこしらへ事までして、見せやうと思はう。(一たい)雨ふりといふものは、やたらとくさ／＼して、今朝まで晴々しかつた空とも思はれず憎くて、いつものやうにきれいな結構な細殿とも感じられない。ましてつまらない家などだと、早く降り止んでくれかしと思はれる。

月の明るい晩に来る人は、十日、二十日、一月、又は一年たつても、それ處か、七八年の後になつても、堪らなくおもしろく思ひ出される(ものだ。だ

袷なりとも、雪にだに濡なば憎かるまじ。昔の藏人は、夜など人の許などに、唯青色を着て、雨に濡ても搾などしけるが、今は晝だに着ざんめり。唯緑袷をのみこそ被きたんめれ。衛府などの着たるは、況て甚興しかりしものを、斯く聞て、雨に歩かぬ人やあらんすらん。月の甚明き夜、紅の紙の甚う赤きに、唯「あらず」とも書たるを、廂に差し入たるを、月に中て見しこそ興しかりしか。雨降ん折は然はありなんや。

兼資 源氏なり。その女は初め藤原隆家の妾なりしが後に成信に逢ひしなり○なほし妾などこそ 女の心に忘れがたかりけんとなり。こゝは女の所へ曉にゆくとして前夜清少の許に来て有明の月に歸りし直衣姿などこそ清少の心に忘れずと解してもよきかきざまなれども「心ばえいとをかしう」とあるによりて忘れし女なれども伊豫へゆくとき、これにてとぢめてもよきなり。のたまひしよと同じ意の余情を含めたる、てにをはたり○そうにてもたる 姓にて名を呼ばるゝなり藤式部、源内侍の如し○ことぐさにて 咄の種にする時、もとの姓にていふなり○兵部 源兵部又は藤兵部などいひしなるべし○あらんを 「な」は余情を含めたる、てにをはなり○もと来し駒に 後撰集戀五「夕やみは道も見えれどふる里は、もとし駒にまかせてぞ見る」とあり。韓非子説林の、「管仲、温朋、従て桓公春往冬反、迷惑失道、

から)逢ふのに都合の悪い場所とか、人眼のうるさい處でも、立ちながらでも返事をし、又ゆつくり出来さうならば引留めてしまふ。

(一たい)月の明るいを見るほど古い事を思ひ出させる事はない。過ぎ去つた、辛かつた事、嬉しかつた事、おもしろかつた事を、まるで今のやうに思はれる。狛野の物語は、どれほどおもしろい事もなく、詞も古くさく、つまらないけれども、月に昔を思ひ出して、

虫食ひの蝙蝠をとり出して、「もとし駒に」と言つて立つて居たのが、誠に風情がある。

雨はうつとうしい物と思ひ染みて居るせいか、片時降るんでも、誠に憎らしい。大切な御行事(でも)、おもしろかりさうな事(でも)、尊くお立派さうな事でも、雨が降つたら、もう駄目で残念なのに、何しに濡れて嘆息して居るのがよいものか。ほんに、交野の少將を悪口した落窪の少將などは、よい。それも前の晩も、その前の晩も往つたのだから、よい。足を洗つただけは汚なくていやだつたらう。でなければ、風などの吹く荒々しい晩に来たのは、頼もしくてよくもあらう。雪に来たのは、たまらなくよい。「忘れめや」など、獨言を言て、こつそり入るのは勿論、でなくとも直衣な

管仲曰老馬之智可用也、乃放老馬而隨之遂得道、より出づ○こゝろもとなきいつ晴れんと待ち久しきなり○交野少將 好色人の例には引出さるゝ名なり、源氏物語にも源氏の君の事を「さるはいといたく世を憚り、まめだち給ひけるほどに、なよびかにをかかしき事はなくて、交野の少將には笑はれ給ひけんかし」とあり落窪物語の右近少將が、交野少將をそしりたるとあるは「都の中に女といふ限りは、交野の少將めでまどはぬなきこそ、うらやましけれ」とあるないへるか○足洗ひたる 落くば物語に、右近少將、落窪の君のもとに雨の降る夜も通ひて、「帯刀(落くば)の君の家のこ」が曹司にて、まづ水もて御足すます」とあるなはいへり○忘れめや 萬葉集に「わが命またけむ限り忘れめや、いや日にけには思ひますとも」「あはずして戀ひわたるとも忘れめや、いやひにけには思ひますとも」などあれど、いづれも雨に縁なし、清少がその頃き、し歌をいへるか○あまいろ 青にして且つ黄なる色。天皇の御衣。六位藏人は拜領して着す○ろそう「緑袷」の音便にて六位の藏人の着る緑の袍○衛府 近衛府の官人なり○あらず 「別に用ではない、この月をどう御覧なされる」の意なり。

ち勿論、狩衣(でも)襦(でも)、藏人の青色などでも、冷たさうに濡れたのは、堪らなくよからう。縁杉位でも、雪に濡れたのは、おもしろい。昔の藏人は、夜など人の處に、只青色をきて、雨にぬれても、しぼりなどしたが、今は晝でも着ない。衛府などの着たのは、まして大さうよかつた。かう聞いたら、皆なが雨ふりに出歩くだらう。月の非常に明るい晩に、紅の紙の眞赤なのに、たゞ「あらず」とだけ書いて、廂にさし込んだのを、月にかざして見たのが、よかつた。雨降りでは、さうは出来ない。

いつも文をよこす人が、「あゝもう何も言ふ事はない」などと(腹を立てて)、次の日は音もしないので、さすがに、今まで夜が明けさへすれば、(さし出された)文の見えないのは淋しいものだと思つて、「余まりきつぱり過ぎる」などと、言ひ暮した。その次の日、雨がひどく降る。晝まで音もしないので「すつかり縁切りなのだ」など、言て、端の方に居た夕暮に、笠をさした童が持つて來たのを、いつもよりいそいで

常に文越する人の、「何かは今言ふ効なし」など言て、翌日音も爲ねば、有繫に明け立ば、文の見ぬこそ淋々しけれと思て、「然ても際々しかりける心かな」など言て暮しつ。翌日雨甚う降る。晝まで音も爲ねば、無下に思ひ絶にけりなど言て、端の方に居たる夕暮に、笠翳たる童の持つて來たるを、常よりも疾く披て見れば、「水増す雨の」とある、甚多く詠み出しつる歌どもよりは、興し。唯朝は然しもあらず、冴つる空の甚暗う搔き曇りて、雪の搔き昏し降に、甚心細く見出す程もなく、白く積りて仍甚う降に、隨身だちて細やかに美々しき男の、傘翳て、側の方なる塀の戸より

あけて見ると、「水ます雨の」とあるのは、澤山詠み出した歌よりよい。今朝はそれほどでもなさうだつた空が、ひどく眞暗に曇つて雪がどん／＼と降るのを、心細く見だして居る中に、忽ち眞白に積つて、その上をまだどん／＼と降つて居る處へ、隨身らしく、細そりと美々しい男が、傘をさして、端の方の塀の戸から入つて、文をさし入れたのが、よい。眞白なみちのく紙か、白色紙の結んだ上に、永く引いた墨が、書いて居る中にひよいと氷つた爲、末の方が薄くかすれてあるのをあけたら、細うく巻いて、結んだ巻き目がくちや／＼にへこんで居るのへ、墨を濃く薄く、行の間を狭く裏表に、ぎつしりくちや／＼に書いてあるのを引くり返し、手間どつて見て居るのは、何事が書いてあるのかと、傍から見るのもおもしろい。にこ／＼と薄笑ひして見て居る所は、余計にゆかしいけれども、遠くからでは、黒い字ばかりが、それかと思はれるだけだ。額髪が長く、顔だちのよい人が、暗い處で文を受とつて、火を灯す間もどかしいのか、火桶の

入て、文を差し入たるこそ興しけれ。甚白き檀紙、白き色紙の結たる上に、引き渡しける墨の、直と氷にければ、裾薄に成たるを開たれば、甚細く巻て、結たる巻目は、細々と回みたるに、墨の甚黒う薄く、行間狭に、裏表書き亂りたるを、打ち返し久う見ること、何事ならんと、他にて見遣たるも興しけれ。況て打ち微笑む所は、甚床しけれど、遠う居たるは黒き文字などばかりぞ、然なんめりと覺るか。額髪長やかに、面様好き人の、暗き程に文を得て、火點す程も焦躁きにや、火桶の火を挟み上げて、辿々しげに見居たるこそ興しけれ。

水ます雨の 引歌未詳、古今集に「まこも刈る淀の澤水雨ふれば、常よりことにまさる我が戀」とある意をいへるか○ひきわたしける墨 封じめの墨なり。

火をさみ上げて、やつと読んで居るのが、よい。

きらびやかなもの(は)、

輝々しきもの、

大將の御前驅。孔雀經の御讀經。御修法(で)は五大尊。藏人の式部丞が白馬の日に、大路を練つてゆく。御齋會。左右の衛門佐が摺衣を光らせた。季の御讀經。熾盛光の御修法。

大將の御前驅追たる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人式部丞、白馬の日大路練たる。御齋會。左右衛門佐摺衣瑩する。季の御讀經、熾盛光の御修法。

神のひどく鳴る時に、雷鳴の陣が堪らなく恐ろしい。左右の大將や中將、少將などが、御格子の前にすなりと並んで居なさるのが誠によい。鳴り止むと、大將が命令して、「のぼりおり」とか被仰る。坤元録の御屏風はおもしろい名だ。漢書の御屏風は、もの／＼しく聞える。月並の御屏風もおもしろい。

雷の甚く鳴る折に、雷鳴陣こそ甚う恐しけれ。左右大將、中、少將などの御格子の面に侍ひ給ふ、甚興しげなり。終ぬる折、大將の仰て、上下と宣ふらむ。坤元録の御屏風こそ、興しう覺る名なれ。漢書の御屏風は、雄々しくぞ聞たる。月並の御屏風も興し。

大將 近衛大將なり、弓箭兵仗を帶したる隨身八人前驅するなれば威儀堂々たるなり○みさぎ追ひ 人を拂ふ警蹕の聲の物々しきさま○孔雀經 一頭四臂にして孔雀に祝したる明王を本尊として修する大法○五大尊 中壇に不動明王、東壇に降三世明王、西壇に大威德明王、南壇に軍荼利明王、北壇に金剛夜叉明王を請じて祈禱する法式を五壇の御修法といふ。五大尊は眞言密教にて立てたる神にて、いづれも忿怒の形相をなしたり○藏人式部丞 白馬の官人皆武官なるに、これのみ文官にて練るなり藏人を兼ねたれば麴塵の輝麗にて優美なるべし○大路ねりたる 白馬は天

皇御覽の後、三宮(太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮)東宮、齋院等に參る。それにつきて式部丞大路をれるなり○御齋會 正月八日より同十四日まで七日の間、宮中の大極殿にて國家護持の爲、最勝王經を講せしむる法會をいふ○すり衣えうする 山藍、月草(はたる草)その他のものにて種々のかたちを摺りたる衣を、こすりて、つやを出すなり○季の御讀經 毎年二月と八月の春秋二季に四日間衆僧を宮中に集め大般若經を轉讀せしむるをいふ○熾盛光 金輪佛頂を本尊として天變兵亂を鎮むる爲に修する法○かんなりの陣 禁中にて雷高く鳴る事三度なる時は近衛の將官、弓箭を帶し殿側に伺候し守護する處○のぼりおり 指揮する語なり。北山抄に「上卿仰云、陣解、將監共稱唯、畢左先召、御殿昇(二音)近衛稱唯、仰云下、將監取笠懸三大刀(復三本列)云々○こん元録の御屏風 支那の地誌坤元録に載りある山河の形を描きたる御屏風。村上天皇の天曆三年巨勢公忠の圖。大江朝綱文學博士楠直幹、大内記菅原文時等の詩。右衛門佐小野道風の書にて、すべて八帖○漢書の御屏風 漢書は後漢の班固の著にて前漢の歴史なり、その中の事蹟を繪きたる御屏風。すべて八帖○月なみの御屏風 年中行事を繪きたる御屏風。月なみは「月並び」にて連月の意。

方違などして夜ふけて歸ると、ひどく寒くて、願なども落ちてしまひさうなのを、やつと歸りついて、火桶を引き寄せ、黒い處のちつともない赤い大きな火を、灰の中から掘り起したのは、堪らなく嬉しい。咄に夢中になつて、火の消えたのも知らずに居る處へ、他人が来て、炭を入れて熾すのは、實に憎ら。でも、まはりに置いて、中に火を

かた、がへなどして

方違などして、夜深く歸る、寒き事甚理なく、願なども皆落ぬべきを、辛じて來着て、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、露黒みたる所なく愛たきを、細なる灰の中より起し出たるこそ、甚う嬉しけれ。物など言て、火の消らんも知ず居たるに、他人の來て、炭を入れて熾すこそ甚憎けれ。然ど、周圍に置いて、中に火を在せたるは好し。皆火を外方に掻き遣て、炭を重ね置たる頂上に、火ども置たるが、甚厭し。

おいたのはよい。すつかり火を外へ掻き出してしまつて、炭をかさねたてつべんに、火を置いたのが、實に氣に障る。

雪が大へんに高く降つたのを、何時になく、御格子をおろして、炭櫃に火をおこして、大勢で咄などしながら伺候して居ると、宮様が「ねえ少納言、香爐峯の雪はどんなだらう」と被仰つたから、御格子を上げさせて、御簾を高く巻き上げたら、お笑ひになる。誰でも、そんな事は知り、歌にも詠むけれども、思ひ付かないと見える。皆なが「やつぱりこの宮様のおそばには、丁度よい人だ」といつた。

方がへ 陰陽家の方にて他出の方角に吉凶をいふこと。天一神のある方を避くといふ。行くべき方角の凶なる時は前夜、他の家に宿し方角を遠へてゆく、天一神は長神といふ。中神とあやまりいふ。十二神將の主とし、星なるが如し。この神の遊行する方をふたがりといひ、天に上りてある十六日間を天一天上といひて四方にゆくに障りを言はず。

雪甚高く降たるを、例ならず御格子參せて、炭櫃に火熾して物語などして集り侍ふに、宮少納言よ、香爐峯の雪は如何ならん」と仰られければ、御格子上て、御簾高く巻き上たれば、笑せ給ふ。人々も皆然る事は知り、歌などにさへ歌ど、思こそ寄ざりつれ。人々「仍此の宮の人には、然べきなんめり」と言ふ。

香爐峯 白氏文集に「香爐峯下新卜居」と題して「日高睡足、猶備起、小閣重金、不怖寒、遺愛寺鐘欲、枕聽、香爐峯雪、擬簾看、匡廬便是、逃名地、司馬仍爲、送老官、心奉身寧、景歸處、故鄉可、獨在、長安」とあり。○笑はせ給ふ 會心の御笑みなり。簾を擧げて看るの詩の心にて仰せられしを、清少の疾く合點して爲したるさまなり。○なほこの宮の人には 他の女房の清少を憂むるなり、やはりこの宮様には丁度よい人なのだの意。中宮定子の母は高二位貴子とて學者なり。(高階成忠の女)

陰陽師の傍について居る童こそ、大さうな物しりだ。被などしに出た時、祭文など讀む間、皆な聞き入つて居るのに、そつと立ち走つて白い水をいかけよとも言はれない中に、ちやんとして歩く様子が、いつもの例を呑み込んで、主人に一言も言はせないのが美しい。ああいふ人を使ひたいと思はれる。

三月頃、物忌をしたいと、一寸した人の家に往つた處が、別段庭木などもない中に、柳といつて、普通の柳のやうな優美なのでなく、葉が廣く出て憎げなのを、「ちがふものだらう」といつたら、「かういふのもあります」といふから。

陰陽師の許なる童こそ、甚く物は知たれ。被などしに出たれば、祭文など讀む事、人は仍こそ聞け。密と立ち走りて、白き水沃注させよとも言ぬに、爲歩く様の例知り、些主に物言せぬこそ、羨しけれ。然ん人をがな使んところ覺れ。

被などしに出てたれば 清少の出でたるなり、被は水邊などに出で、神にいのりて災穢を除くこと。「水清み流る、川のさやかに、はらふる事を神もきかなむ」○そと立ち走りて 童の敏捷なるさまなり。○白き水 鹽水、もしくは鹽湯をあびて被ふ事あり、こゝはたゞ川の清き水の意なるべし。

三月ばかり、物忌しにとて、假初なる人の家に往たれば、木どもなどはかくしからぬ中に、柳と言て、例の如に優雅しくはあらで、葉廣う見て憎氣なるを、非ぬものなんめりと言はば、斯るもありなど言に、

清賢らに柳の眉の廣りて、春の面を伏る宿かな。」とこそ見しか。其の頃又、同じ物忌しに、然様の所に出たるに、二日といふ晝つ方、甚ど徒然増りて、只今も參ぬべき心地する程にしも、仰事あ

春のおもてを伏する宿かな。
(えらさうに柳の眉が廣がつて、
春の面目をつぶした家だこと。)

と思はれた。
その時分、又、やはり物忌をしに、同
じやうな處へ出たら、二目目のひる頃、
段々退屈になつて、今すぐでも宮中へ
参りたくなつた時に、丁度仰言があつ
たから、誠に嬉しくて拜見したら、淺
緑の紙に、宰相さんが、大層美しく書
きなさつた。

「宮、いかにして過ぎにし方を過ぐしけ
む、暮し煩ふ昨日今日かな。」
(どうして今までは過して來たの
だらう、昨日今日の暮しにくい事
暮しにくい事。)

と仰せられる。私としては、今日一日ですら千年もたつたやうに待遠しいから、なるだけ早く、曉方にでもお歸り下さ

れば、甚嬉くて見る。淺緑の紙に、宰相の君、甚興く書き給り。
幸「宮、如何にして過にし方を過しけん。暮し煩ふ昨日今日かな。」
となむ。私には、相「今日しも千歳の心地するを、曉だに疾く」と
あり。此の君宣んだに、興しかるべきを、況て仰言の様には、
疎ならぬ心地すれど、啓せん事とは覺ぬこそ。

清雲の上に暮しかねける春の日を、所がらとも詠めつるかな。
私には、清「今宵の程も、少將にや成り侍んすらむ」とて、曉に
参りたれば、宮「昨日の返し、暮し難けるこそ、甚憎し。甚う誹さ」と
仰らる。甚困惑う。誠に然る事も。

物いみ 神佛を祭る時などに若干の時日沐浴し飲食を慎みなどして身心を淨くし穢
れにふるゝを忌むこと○私には 仰言を書きたるあとに自身の意を述ぶるなり○少
將にや 深草の少將が小町のもとへ百夜通ひて心を見せんとし、九十九夜めに死せ
りといふ世がたりを思ひて、今夜も死なんかと思ふほど明日を待ちわぶるの意なり。

い」としてある。このお人の詞だけでもうれしいのに、まして仰せ言の御様子には、堪らない氣がするけれども、何と
申上げてよいか分らない(のが困る)。で、

清「雲の上に暮しかねける春の日を、
所がらともながめつるかな。」

(雲の上でお暮しかねになつた(長い)春の日を、(私は又)處がらかと存じました)
として、宰相さんへは、「今夜あたり、少將になるかも知れません」と言つて、曉方参つたら、(宮様が)、「昨日の返
事は、私の心も知らないで、たゞ暮しかねたと言つたのが、誠に憎らしい。皆なで悪く言つたよ」と仰やる。全くいけ
なかつたと、すまない氣がする。

清水に籠つた頃、ひぐらしが大層鳴く
のをおもしろく聞いて居た處へ、わざ
わざ御使で下された。

宮「山近き入相の鐘の聲ごとに、
戀ふる心の数は知るらむ。」

(山のそばでなる入相の鐘の聲の
たびに、(私が)戀しく思ふ心の數
はよみさうなものだ)

清水にこもりたる頃

清水に籠たる頃、茅蜩の甚う鳴を恰と聞に、特と御使して宣せ
たりし、

宮「山近き入相の鐘の聲毎に、戀る心の数は知らんものを、此上
なの長居や」と書せ給る。紙などの無禮ならぬも、取り忘れたる
度にて、紫なる蓮の花瓣に書て参する。

清水 京都音羽山なる清水寺。本尊は千手觀世音菩薩。阪上田村磨の建立なり○か
きて参らする、この下に御返歌のありしなるべし、よからずして自身に書きたるか、

ものを、こよなの長居や」(だのに、何といふ長逗留なのだらう)とお書きになつた。失禮でない紙なども忘れて来た際とて、紫の蓮の花びらに書いて、さし上げた。

十二月廿四日宮様の御佛名の、初夜の御導師のをきいて出る人は、夜中過ぎにもならう。里へ出るなり、又はこつそり夜遊びにゆくにも、合ひのりしてゆく道中がおもしろい。この頃降り続いた雪が今朝はやんで、風などがひどく吹いたので、垂氷が一杯さがり、地面こそ所々黒いが、屋根の上はすつかり白いので、汚い賤の家も雪に顔を包んで、有明の月の隅々まで明るいのが誠によい。(車の屋形はまるで)銀の

十二月廿四日、宮(子)の御佛名の初夜の御導師聞て出る人は、夜半も過ぬらんかし。里へも出で、若は忍たる所へも、夜の程出るにもあれ、合ひ乗たる路の程こそ興しけれ。日頃降つる雪の、今朝は止て、風などの甚う吹つれば、垂氷の甚う垂り、土などこそ叢々黒きなれ、屋の上は唯概て白きに、卑き賤の屋も面隠して、有明の月の隈なきに、甚う興し。銀など壓し剝たる如なるに、水晶の瀧など、言ま欲きやうにて、長く短く、殊更懸け渡したると見て、言にも余て愛たきに、下簾も懸ぬ車の簾を、甚高く上たれば、奥まで射し入たる月に、薄色、紅梅、白きなど、七つ八つは

箔でもおしたやうな上に、水晶の瀧とでも言ひさうに、わざと長く短く懸け渡したやうな(垂氷が)何とも言へず美しいのに、下簾も懸けない車の簾をぐつと上げて居るので、奥まで射し入つた月に、薄色だの紅梅だの七八枚着た上に(紫の)濃いきものゝ色が鮮かで、艶々と月に照り映えた美しい(女の)傍に、えび染の固紋の指貫、白い衣などを澤山と、山吹や紅などを着こぼして、直衣の眞白なのゝ紐を解いて居るから(直衣が)脱ぎ垂れられて、下の着物が澤山出て居る。指貫の片方は戸じきみの外に踏み出されて居るなどは、途で人が見たらば、しやれて居ると思ふだらう。月の明さにきまりがわるくて、奥の方に引込んで居るのを、男に

かり着たる上に、濃き衣の甚鮮明なる、艶など映て美しく見る傍に、葡萄染の固紋の指貫、白き衣ども數多、山吹、紅など着溢して、直衣の甚白き引き解たれば、脱ぎ垂られて、甚う溢れたり。指貫の片つ方は、軾の外に踏み出されたるなど、道に人の逢たらば、興しと見つべし。月影の顯露さに、後方へ迂り込たるを、引き寄せ露になされて、忙るも興し。「凜々として氷鋪り」といふ詩を、返々誦じて在するは、甚う興しうて、夜一夜も歩かま欲きに、往く所の近くなるも口惜し。

御佛名 禁中の公事なり陰曆十二月十九日より三日間、清涼殿にて僧に佛名經を誦み三世の諸佛の名號を唱へしめらる、六根の罪を滅すといふ。禁中に行はれたる後、中宮、東宮の方にて行はるゝなり○初夜の御導師 佛名會は初、午、後の三夜に分ち各その導師を異にす。初夜は亥の二刻より子一刻(昔は今の二時間を一時といひ、それを四分して一刻二刻といふ。さてその十二時に十二支を配し、子(午後十二時より午前二時まで)丑(午前二時より同四時まで)寅(午前四時より六時まで)卯(午前六時より八時まで)辰(午前八時より同十時まで)巳(午前十時より同十二時まで)午(正午より午後二時まで)未(午後二時より同四時まで)申(午後四時より同六時まで)酉(午後六時より同八時まで)戌(午後八時より同十時まで)亥(午後十時より同十

引ばり出され、あらはにされて困るのもおもしろい。「凛々として氷鋪けり」といふ詩を、くりかへて吟じて居らつしやるのは堪らなくよくて、夜中でも歩いて居たいのに、往く先の近づくのも残念だ。

宮仕する人たちが、里へ出て寄合つて、自分々の御主人の自慢をし、御所の内外のちよい／＼した事などを互ひに話し合ふのを、その家のあるじで聞いて居るのもおもしろい。家が廣くきれいで、親類ならばなほよし、でなくとも懇意な宮仕人を、家の一處に置いて居たい。何かの時には、一緒に咄をしたり、人の詠んだ歌を評し合つたり、誰かと手紙などよこしたら、一緒にあ

二時まで) 半夜は子の二刻より丑一刻に至り後夜は丑二刻より寅三刻に至り各導師を異にす。○里へも出て「里へ退出するにもせよ」なり、こゝより「合ひのりたる道のほどこそをかしけれ」までなき本もあり。されどある方、終りの文と合せて清少白身の事なる事見えて、人の事が、わが事が不明なるよりはと、削らす○下すだれ車の御簾の中に、かくるきれ○山吹表、薄朽葉、うら、黄なるないふ○ひきとき直衣の紐をなり○瀧々として氷しけり 則詠集に「秦匳之千余里、凜々、氷鋪漢家之三十六宮、澄澄、粉飾」とあり(秦國の周圍一千余里に明月の光牙え渡りて氷を鋪きたる如く、漢王の三十六の宮殿に澄み渡りて白粉を飾れるが如しとなり)

宮仕する人々が出で集りて、おのが君々の御事愛で聞え、宮の内外の端の事ども、互に語り合せたるを、其の家主にて聞こそ興しけれ。家廣く清げにて、親族は勿論なり、唯打ち語りなどする人には、宮仕人片つ方に据てこそ、有ま欲けれ。然べき折は、一所に集り居て、物語し、人の詠たる歌何彼と語り合せ、人の文なども持て来る、諸共に見、返事書き、又睦う来る人もあるは、清げに打ち裝飾ひて入れ、雨など降て得歸ぬも、興しう欸待し、參ん折は、其の事見入て、思ん様にして出し立など爲ばや。貴き人の

在す御有様など、甚床しきぞ怪らぬ心にやあらん。

けて見たり、返事も(相談して)書いたり、又睦じく訪ねて来る人でもあれば、きれいに室を飾つて通したり、雨など降つて歸れなくなれば泊めておもしろくもてなしたり、(さて)御所へ上る時は、親切に世話をし、思ふやうに支度をして、さし出したりしたいものだ。(自分がどうも)高貴の方のお暮しの御様子など知りたい、妙な癖があるせい(さう思はれる)。

真似るもの(は)、

欠伸。子供。生はんじやくのくだらない人間。

氣のゆるせないもの(は)、

悪い人間と評判のある者。それは善いと誰にも知られて居る人よりは、正直さうに(附合よく)見える。船の路(も)油断がならない。日がうららかなので、海上も至つてのどかで、淺緑の(きれの)打つ(て艶を

みならひするもの 打ちとくまじきもの

見ならひするもの、

欠伸。兒ども。生怪からぬえせ者。

打ち解まじきもの、

悪と人に言るゝ人。然は善と知れたるよりは、隔心なくぞ見る。船の路。日の麗かなるに、海の面の甚う長閑に、淺緑の打たるを引き渡したる如に見て、聊 恐き氣色もなきに、若き女の、粕ばかり着たる、侍の者の若やかなる諸共に、櫓といふもの押で、歌を甚う歌たる、甚興趣う、尊貴き人にも見せ奉らま欲う思ひ往

出し)たのを引き渡したやうに見えて、些とも恐ろしい様子が無いので、若い女の拍だけ着たのが、(つき人の)侍の若々しいのと一緒に、櫓といふものを押して、歌を高聲で歌つて居る様子が誠にしやれて、高貴な方にも見せ申たく見て居ると、風が大へんに吹き(出し)、海上がだん／＼荒れてくるので、夢中になつて船つきの處に漕ぎつけやうとすると、浪が船に打つかる様子など、あれほど穏かだつた海とも見えない。考へて見ると船にのつて旅行する人ほど心配なものはあるまい。さうひどく深くない處でも、板一枚のものに乗つて漕いでゆけるのは不思議だ。まして底しれず千尋もあらうといふ海に、澤山の品物を積み込むから、

に、風甚う吹き、海の面の唯荒に険うなるに、物も覺ず、泊べき所に漕ぎ着る程、船に浪の注たる様などは、然ばかり和かりつる海とも見すかし。思は、船に乗て歩く人ばかり、由々しきものこそなけれ。尋常き深さにてだに、形果敢き物に乗て、漕ぎ往べき物にぞあらぬや。況て底ひも知す、千尋などもあらんに、物を甚多く積み入れたれば、水際は唯一尺ばかりだになきに、下賤どもの、聊恐しとも思たらず、走り歩き、露荒くも爲ば、沈やせんと思に、大なる松の木などの、二三尺ばかりにて圓なるを、五つ六つ、ほう／＼と投げ入などすること甚けれ。蓬庫といふ物にぞ在す。然と奥なるは些頼し。端に立る者どもこそ、眼眩る心地すれ。早緒と命名て緩に着たる物の弱けさよ。絶なば何にかはなるらん、偶と落ち入なんを。其だに甚う太くなどもあらず。我が乗たるは清げに、帽額の簾かけ、妻戸、格子上などして、然ど、等う重げになどもあらねば、唯家の小きにてあり。他船見遣こそ甚けれ。

水際は一尺ほどもないのに、下賤達は平氣で走り歩き、少し荒く動いたら沈みはしないかと思ふのに、大きな松の木などの二三尺ぐらゐの丸太を五六本、ぼか／＼ 投げ入れたりするのは、えらい事だ。(よい方は)屋形といふ物にお出でになる。だが、奥の方だと少しは頼もしい。端に立つて居る者どもこそ、眼が昏れる心地がする。早緒といつてだらりと櫓に上げた物の頼りない事、きれたら何うするのだらう、すぐ眞逆様に落ちてしまふだらう(それも)太くでもある事か(細い)。自分の乗つたのはきれいで、帽額の簾をかけ、妻戸をあけ格子を上げなどして、別段外の船のやうに重さうでもないから、たゞ家の小さいのに居るやうなものだ

遠きは、實に、笹の葉を作て、打ち散したる如にぞ、甚酷く似たる。泊たる所にて、船毎に火點したる、興しう見ゆ。游船と命て、甚う小きに乗て漕ぎ歩く早旦など、甚憐なり。後の白浪は實にこそ消もて往け。貴き人は乗て歩くまじき事こそ仍覺れ。陸路も亦恐し。然ど其は、如何にも如何にも地に着たれば、甚頼もしと思に、海士の潜したるは、憂き業なり。腰に付たる物絶なば、如何爲んとなん。男だに爲ば、然ても有ぬべきを、女は尋常の心ならじ。男は乗て歌など打ち歌て、此の栲繩を海に浮け歩く。甚危く不安くはあらぬにや。海士も、上んとは、其の繩をなん引く。取り惑ひ繰り入る様ぞ、道理なるや。船の端を抑て、放たる息などこそ、實に唯見る人だに潮垂るに、陥し入て漂ひ歩く男は、眼も眩に淺まし。更に人の思ひ懸べき業にもあらぬ事にこそ有めれ。

のどかに 一本「櫓とかに」とあり。されど前に「櫓といふもの」とすでに知りたる

(けれども)、外の船を見わたすと誠に恐ろしい。遠くのは、ほんとうにまるで笹の葉で(舟を)造つてまいたやうだ。泊つた所で船ごとに火を灯したのが、しやれて見える。はし舟といつて、ひどく小さいのに乗つて、朝早く漕ぎ歩くのなど、誠にあはれだ。「あとのしら浪」とは、(實景で)、ほんとうに段々と消えてゆく。よい衆は乗つて歩くものではないと、つくづく思はれる。歩行路も、やつぱり恐ろしい。でも、それは、何としても地について居るから、よほど頼もしい。

海はどうでも恐ろしいと思ふのに、まして海士がかづきしに入るのは、つらい仕事だ。腰についたものがきれたら、どうするのだらう。男でももある事か、女はどんな気がするだらう。男は舟に乗つて、歌など歌つて、その桡を海に浮かして歩く。どんなにあぶなつかしく心配な事だらう。海士が上らうと思ふ時は、その繩を引ばる。男は大あわてで、(女を船に)たぐり入れる様子が、もつともだ。船の舷を押へて、ほつと息を吐くなどは、見て居ても涙がこぼれるのに、落し入れて船で漂ひ歩く男を見ると、眼がくらむほど淺ましい。人間の爲べき仕事ではない。

書きざまなるに對して、新に「櫓とかに」とおぼめきいふはあやしければ、流布本の方をとる。俗に「しつかりとせす、ぶらりとつけたる」といふほどの意なるべし。すげたるは櫓につけたること〇もかうのす。「もかう」は「帽額」の約言の轉じたるもの、御簾の抹額なるより轉用せる語。御簾の上邊に添へて横に長く引く舟、後世の水引簾のごときもの。縁に窠の紋を黒く散らして染む。そのつきたる簾なり〇つま戸。櫓戸の意が偶戸の意か。舞戸にて兩方に開くをいふ〇はし舟。端艇なり〇あとの白浪。拾遺集哀傷に沙彌前誓「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ、漕ぎゆく舟のあとの白浪」〇かち路。この頃は諸所に強盜の群など居て、行人をなやましたればいふ〇かづき。水を漕りて、あわびをとるなり〇たくなは「たくは」たへに同じ木綿の布をより合せてつくれる繩〇おとし入れて。なりはひなれども、見る者の眼に憐く映すれば、強いへり。

右衛門尉である者が、つまらない親を持つて、人に見られて外聞がわるいなど、思つて居たのが、伊豫國から上る時に海に落し入れたのを、人が情ながら淺ましがつた中に、七月十五日盆供養をすると言つて、支度をするのを御覽なさつて、道命阿闍梨が、

渡つ海に親をおし入れてこのぬしの盆する見るぞあはれなりける。

(海に親を投げ込んだ人が、(その親の爲に)盆供養をするのを見る
とあはれだ)
とお詠みになつたのが皮肉だつた。

又小野殿の母御は、普門寺といふ處に八講があつたとお聞きになり、(その)翌る日、小野殿に多勢集つて音楽をし、

右衛門尉なる者の 又小野殿の母上こそは

右衛門尉なる者の、醜親を持ちて、人を見るに面伏など、見苦う思けるが、伊豫國より上るとて、海に陥し入てけるを、人の心憂がり驚嘆しがりける程に、七月十五日、盆を奉るとて、準備を見給て、道命阿闍梨、
道渡つ海に親を押し入て子の主の、盆する見るぞ哀なりける。」
と詠み給けるこそ、最惜けれ。

右衛門尉 右衛門尉の三等官なり(將、佐、尉)〇道命あざり 大納言藤原道綱の長子。天王寺別當となる。歌人にて諷誦の名手なり(あざりは梵語阿闍黎耶の略、軌箭の義。僧の師となるべきもの。僧の稱號とす)

又小野殿の母上こそは、普門寺といふ所に入講しけるを聞て、翌日、小野殿に人々集りて、管絃し、文作りけるに、

詩文を作つた時に、

薪こる事は昨日に盡きにしを、

今日は斧の柄こゝにくたさむ。

(薪を樵る事は昨日でおしまひになつてしまつたが、今日は十分に斧の柄のくさるまで遊ぼう。)

と詠みなさつたのがよかつた。こゝは打聞になつたやうだ。

意あり○たきこる 釋尊が求法の心深くて阿私仙人に事へ薪を樵り、果を採り、水を汲みしことを思ひて、法を求むる爲に佛に事ふる八講をいへり○斧の柄こゝにくたさん 晋の王質、石室山に仙童の園基を見、一局も終らざるに、携へたる斧の柄の腐朽せるに驚きて家に歸れば、故舊は既に死に絶えたりし故事をいひて、斧の柄の朽つるばかり爰に永く遊ばんといへるなり○こゝもとは云々「打聞」とは聞きて記し置きたる歌をいふ。「この邊りは打聞きになつたやうだ」と自ら評せるなり。

又業平の母の宮様が、「いよ／＼見ま

く」と被仰つたのは、誠にあはれでおもしろい。引きあけて御覽になつた時の心持が、思ひやられる。

母上「薪樵る事は昨日に盡にしを、今日は斧柄爰に腐さん。」

と詠み給けんこそ愛たけれ。爰許は打聞に成ぬるなめり。

小野殿の母上 藤原道綱の母なり。歌人にして藤原兼家の妻の一人たり。蜻蛉日記を著はす。大鏡に「殿(兼家)のおはしましたりけるに門をおそくあげれば、度々御消息言ひ入れさせ給ふに女君(道綱の母)「なげきつゝ、ひとりぬる夜の明る間は、いかに久しきものとかはしる」とあり、山城葛野郡高雄の奥、及び比叺山の西麓に小野といふ所あり。こゝは高雄の奥に道綱の邸ありしなるべし○普門寺 葛野郡にあり(これによりて道綱の邸は高雄の奥の小野なりし事を知るべし)本尊聖觀音、毘首羯麻天の作。唐土よりもち來れる尊像なり○八講しけるを、この上に「人が」の

又、業平が母の宮の、「彌々見まく」と宣る、甚う哀に興し。引き披て見たりけんこそ、思ひ遣るれ。

○いよ／＼見まく 長岡に在りける業平の母(伊都内親王)が病ひを業平にしらする文に、詞はなくて「老いぬればさらぬ別れのありといへば、いよ／＼見まくほしき君かな」とありしをいふ(見たりけむ、この下に「業平の心情こそ」の意あり。

興しと思し歌などを、草紙に書て置たるに、下種の打ち歌たるこそ心愛けれ。讀にも詠かし。

貴き男を、下種女などの譽て、「甚う懐しうこそ在すれ」など言ば、即て思ひ貶されぬべし。識るゝは却々好し。下種に褒らるゝは、女だに悪し。又譽る隨に言ひ損ひつるをば。

うち歌ひたる 節つけてよむなり○そしらるゝは、なか／＼よし 相ひく所あればよしと思ふなれば、程度の低き者よりほめらるゝは、そしらるゝに劣るの意○いひそこなひ よくある事なり、比喻などしてほむるが當らぬなり。語尾の「をば」は俗に「だもの」にて「言ひ損つたりするんだもの」の意。

よいと思つた歌などを草紙に書いて置いたのを、下衆が見て歌つたりすると、いやになる。(でなければ)棒よみによむ(が、これもいやだ)。

身分のよい男を下衆女などが譽めて、「堪らなくなつかしい方だ」など、言ふと却つてその男の値打がさがる。わるく言はれる方が却てよい。下衆に譽められるのは、女でも估察がさがる。おまけに(變てこに)譽め損なつたりするんだから(堪らない)。

大納言(周伊)さんがお上りになつて、詩文のお講義をなさるのに、例の通りひ

大納言殿(周伊)参り給て、詩文の事など講じ給に、例の夜甚う更ぬれば、御前なる人々、一二人づゝ失て、御屏風几帳の後などに、

どく夜が更けたから、御前の人たちが、一人二人づゝ減つて、御屏風や几帳の後ろなどにいづれも隠れ臥してしまつたので、眠いのをこらへてお傍に居ると、丑四つと時申しが奏する。「あらもう明けるんだ」と獨り言を言つたら、大納言さんが「もう今更に御寝なりますな」と、寝ない事に極めて居らつしやるから、いやだ、言はなければよかつたと後悔するけれども、外に大勢居れば、紛れもするが(生憎一人だから胡麻かしやうもない)。主上がお傍の柱にお寄りかゝりになり、一寸おねぶりになつたのを、(大納言さんが)、「御覽遊ばせ、もう夜が明けたのにおやすみになるとは」と被仰る。「ほんに」などゝ、宮様もお笑ひになるのも

皆隠れ臥ぬれば、唯一人に成て、思睡きを念じて侍ふに、丑四と奏するなり。遣「明け侍ぬなり」と獨言に、大納言殿(周)「今更にな大殿籠在しましそ」とて、寝べき物にも思したらぬを、憂て何しに然申つらんと思ども、又人のあらばこそ紛も爲め。帝の御前の、柱に倚り懸りて、少し眠せ給るを、伊「彼見奉り給へ。今は明ぬるに、斯く大殿籠るべき事かは」と申せ給ふ。宮實に「など宮の御前にも、笑ひ申せ給ふも知せ給ぬ程に、長女が童の、鶏を捉て持て明日里へ往むとて、隠し置たりけるが、如何しけむ犬の見付て追ければ、廊の先に逃げ往て、恐しう鳴き騒るに、皆人起などしぬなり。帝も驚せ在して、帝「如何に在つるぞ」と尋させ給に、大納言殿の伊「聲明王の眠を驚す」といふ詩を、高う打ち出し給る、愛たう興しきに、一人思睡かりつる眼も、太に成ぬ。甚き折の事かなと、宮も興せさせ給ふ。仍斯る事こそ愛たけれ。翌日は、夜の御殿に入せ給ぬ。夜半ばかりに、廊に出て人呼ば、伊「下

御存じなく、おやすみの中に、長女の召使の童が、鶏をつかまへて、明日里へ往くとて隠して置いたのを、どうしてか、犬が見つけて追つかけたので、廊の先に逃げ込んで、ひどく鳴き騒いだ爲、皆なが起きて來たりした。上様もお眼覚めになつて、「どうしたのだ」とお尋ねになると、大納言さんが、「聲明王の眠りを驚かす」といふ詩を高聲でお吟じになる。見事におもしろいで、一人きりで眠たかつた眼も、大きくなつた。場合がよかつたと、上様も宮様もお興じになつた。やつぱりかういふ事は結構だ。

翌る日はお寝みになつた。夜半頃廊に出て召使を呼んだら、(大納言さんが)、「下りるのか、私が送つてやらう」と被仰るから、裳や唐衣は屏風に懸けたまま往くと、月が非常に明るくて、直衣が眞白く見えるのに、指貫を長く踏みだいて(私の)袖をつかまへて、「ころぶ

るか、我送ん」と宣ば、裳唐衣は屏風に打ち懸て往に、月の甚う明くて、直衣の甚白う見るに、指貫の半分踏み含られて、袖を控て「伊「休るな」と言て、率て在する隨に、「遊子仍殘の月に往ば」と誦し給る、又甚う愛たし。斯様の事愛で惑とて、笑ひ給と、如何でか仍甚興しきものをば。

購し給ふ 天皇になり○丑四つ 午前四時○あけ侍りぬなり 「なり」は味歌の「なり」にて、「さあもう明けてしまふ」の意○まぎれもせめ 多勢居れば一人位、席を退きても、わからぬなり○をさめ 下司の老女の稱○聲、明王の眠を驚かす 本朝文粹、都良香の漏刻策中の句「雞人曉唱 聲驚三明王之眠、覺鐘夜鳴響徹三暗天之聽」とあるをいへり、鶏人(時を告ぐる人)の曉を告ぐる時は朝政にいそしみ給ふ明王の朝寢し給はず疾く起き出で給ふといふ意にて、折から期吟せしなり。伊周の大納言たりしは正暦三年より五年までの間なれば主上は御十三歳乃至御十五歳(伊周十九歳)の御勉學時代なり。御伯父伊周の獎學されしさま見ゆ○袖をひかへて手を取る事はせで袖をひかふるなり、禮あるさま○遊子なほ云々 期詠集、買鳥の曉賦に「佳人盡飾於晨粧、魏宮鐘動、遊子猶行於殘月、兩谷鷄鳴」とあり魏宮は支那の魏の宮中、遊子は旅客、兩谷は關の名なり。

な」と言つて連れて居らつしやりながら、「遊子なほ残りの月に行けば」とお誦じになるのが又堪らなくよい。「さういふ事をやたらとよるこぶ」と、(宮様は)お笑ひになるが、やつぱり堪らなくおもしろいだから(仕方がない)。

僧都さんの御乳母のまゝと、御匣殿の御局に居たら、或る男が板敷のそばに近寄つて、「ひどい眼を見ました。どなたにかお咄したい」と泣かぬばかりの様子で言ふ。「どんな事」ときいたら「一寸よそへ参りました間に、むさい家が焼けてしまひましたから、この頃は、がうなのやうに、人の家に尻だけ入れて居ります。馬寮の御秣を積んであつた家から火が出ましたので、垣一つ隔てただけで御座いますから、寢處に居りました子供も、も少しで焼けて死ぬ處で、何一つ取り出しませんでした」など、言つて居る。御匣殿もおき

僧都の君(剛)の御乳母のまゝと、御匣殿の御局に居たれば、男あゝる板敷の許近く寄り来て、男「辛い眼を見候つる。誰にかは訴へ申し候むとてなむ」と泣ぬばかりの氣色にて言ふ。何事ぞと問ば、男「假初に他へ罷たりし間に、汚く侍る所の焼け侍にしかば、日頃は寄居虫の如に、人の家に尻を差し入てなん候ふ、厩察の御秣摘て侍ける家よりなん、出で参で来て侍なり。唯垣を隔て侍ば、夜殿に寝て侍ける童も、殆焼け侍ぬべくなむ。些物も取出侍す」など言ひ居る。御匣殿も聞き給て、甚う笑ひ給ふ。
清「御秣を燃すばかりの春の日に、夜殿さへ何故残さるらん」と書て、清之を取せ給へ」とて投げ遣ば、笑ひ騒りて、女房「此の在する人の、家の焼たりとて、最惜がりて給める」とて取せられたれば、男「何の御短冊にか侍む。價幾何許にか」と言ば、女房「先づ讀か

きになつて、ころ／＼とお笑ひになる。

清「御秣を燃すばかりの春の日に、

夜殿さへなど残らざるらむ。」

(御秣をやつと燃やす位の春の火に、どうして夜殿まで焼けてしまつたんだらう。)

と書いて、「これをおやりなさい」と投げてやつたら、(女房たちがおもしろがつて)笑ひ騒いで、「あの方が、家の焼けたのが氣の毒だとて、下さつた」と取り次ぐと、「何の御短冊でせう、値段はいくらほどで」といふ。「まあお読み」といふ。男「どういたしまして、せめて片目でもあいて居りません事には」といふので、女房「誰かに讀んでおもらひ。今お召だから(私は)急いで上る。そんな結構な物を頂いた

し」と云ふ。男「如何でか片眼も明き仕う奉では」と言ば、女房「人にも見せよ。只今召ば、頓にて上へ参ぞ。然許愛たき物を得ては、何をか思ふ」とて、皆笑ひ惑て上ぬれば、乳人にや見せつらむ。然と聞て如何に腹立む」など御前に参て、まゝの啓すれば、又笑ひ騒ぐ。御前にも、宮「何故斯く物狂しからむ」と笑せ給ふ。

僧都の君 大鏡に「皇后宮(定子)と一つ御腹(貴子)の男君、法師にて十余りの程に僧都になし奉り給へりし、それも卅六にて亡せ給ひにき」とある人なり隆圓といふ。○まゝ、名なり、乳母の通稱の如し○御匣殿、これも大鏡に「三條院の東宮と申し、折の淑景舎とて花やかせ給ひしも、父殿(道隆)亡せ給ひに後、御年廿三ばかりにて亡せさせ給ひにき」とあり。前に、中宮の方に入らせられし記事あり○がうな、蟹の類、古名カミナ、今轉じてガウナ。海岸に生じ、大きき寸に足らず、頭は蝦に似、はさみは蟹に似たり、空なる蟹の殻を借りて、その中に縮み入る。人の、室を借りて住むことになとて「がうなの如し」といふ○馬づかさ、左右あり、衛府に屬したる寮にて、馬を飼ひ馴し、又供御の乗具を掌る。長官を左馬頭、右馬頭といふ○夜殿、寢所なり○わらはは、自身の子ともなり○よどのさへ、山城の淀野によそへていへり、春、新草に火をつけて焚くを出火によそへていへるなり。火に日なかけ、淀野に夜殿をかけたなり。

ら、いふ事はあるまい」と皆なして、きやつくと笑つて、上つたんで、乳「誰かに見せたかしらん。分つたらどんなに怒るだらう」など、御前に参つて、まゝが申上げると、又(そこの)皆なが笑ひさどめく。宮様も。「何故さう、いたづらがしたいのだらう」と、お笑ひになる。

男は女親がなくなつて、男親ばかりになると、可愛くは思ひながら、面倒な北方が出来てしまふと、両親の傍へも寄せつけられず、装束などの事は、乳母や、又なくなつた母親の付き人などが世話をする。西東の對の邊りに、客間のやうにしゃれて、屏風や障子の繪も風雅に棲んで居る。殿上の勤め工合も、わるくもなく、上様の御氣色もよくて、いつもお召しになり、御管絃のお相手なども仰せ付けられるけれども、何となく屈託らしく、世間が氣

男は女親亡りて、父一人ある、甚く思ども、煩しき北の方の出で来て後は、内にも入られず、装束などの事は、乳母、又故上の女房どもなどして爲さす。西東の對の程に、客人居など興しう、屏風障子の繪も見所ありて、住居たり。殿上の奉仕の程口惜からず、人々も思たり、帝にも御氣色好て、常に召つ、御管絃などの敵手には、思し召たるに、仍常に物嘆しう、世の中心に合ぬ心地して、好色しき心ぞ偏なるまであるべき。上達部の二なきに、厚遇れたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事をも打ち語ひ、慰め所なりける。

にくはぬ氣持で、女好みの心が、見ともないほど強く、上達部のまたなき愛妻と冊かれて居る、自分の同母妹一人だけには、思ふ事を打明け咄して、心を慰めたりする。

「定澄僧都に桂なし、すいせい君に柏なし」といつたのもおもしろい。

「ほんとうに、下野に往きなさるか」と、きいた人に、

「思ひだにかゝらぬ山のさせも草、誰かいぶきのさは告げしぞ。」
(そんな處へ往かうなぞと、思つ

定澄僧都に まことや下野に下る

「定澄僧都に桂なし。すいせい君に柏なし」と言けんもこそ、興しけれ。

定澄僧都 丈高き故に桂を着ても柏ぐらゐに見ゆるを強くいへり○すいせい君 その頃居し僧なるべし、これは丈低き故に柏を着ても桂の如く見ゆるを同じく「なし」と強くいへるなり○いひけんもこそ 「いひけんも」の下にとりたて、「こそ」と強めいへり。

「實や、下野に下る」と言ける人に、

清「思ひだに懸ぬ山のさせも草、誰か伊吹のさは告しぞ。」
おもひだに おもひの「ひ」に「火」をかけ、させも草の「させも」に「然爲も」をかけ、「伊吹」に「言ふ」をかけ、「然とは」に「里は」をかけたなり、下野國都賀郡伊吹山なる標茅原あたりに多く産する艾を乾してさせも草(今、もぐさといふ)

或る女房の びなき所にて
て見た事もないのに、だれがそんな事を言ひましたか。

をつくるによりていへり、巧みなる歌なり。

ある女房が、遠江守の息子と懇ろにして居たが、同じ宮中の女房とも、また懇ろにして居るときいて、怨むと、その男が「親を證人にしてもよい、飛んでもない虚言だ、そんな女は、てんで夢に見た事もない」と言つた、何と言つてやりませう」と相談するから、清「誓へ君遠つあふみのかみかけて、むげに濱名のはし見ざりきや」
(全く片端も見た事がないなら、親の遠江守を證人にしてお誓ひなさい、たしかにある事だが)。

工合のよくない所で男に咄しかけた

或る女房の、遠江守の子なる人を語てあるが、同じ宮人を語ふと聞いて、恨ければ、女房「男親なども懸て誓せ給へ。甚き虚言なり。夢にだに見ず」となん言ふ。如何言べき」と言を聞いて、清「誓へ君遠つあふみの神かけて、無下に濱名の橋見ざりきや。」
ちかへ君 この歌も遠つ「あふみ」に「逢ふ身」をかけ「神」に「守」をかけ、「橋」に「端」をかけ、遠江にある濱名の橋をいひて詠みたり○無下に 一向。俗に「てんで」。

便なき所にて、人に物を言けるに、男「胸の甚う走る。何故斯ある」

ら、「胸がどきくする、なぜさう無遠慮なのか」と言つた返事に、

「逢阪は胸のみつねに走り井の、みつくる人やあらんと思へば」
(逢ふ時はいつでも胸がどきくする、だれかに見られさうで)。

と言ける答に、

清「逢阪は胸のみ常に走り井の、見付る人やあらむと思はば。」

逢阪は 京都と大阪とのわかれ道なる道分の東にある逢阪山に「逢ふ」をかけていひ、胸の走ることに、逢阪山のほとりに四時盛んに清涼甘味なる水を湧出せる「走り井」をかけ、見付くるにも「水清くる」をかけて巧みに詠みたり、この歌の上に「ほんに」の意あり。

女の表衣は、

薄色(か)、蒲萄染(か)、萌黄(か)、櫻(か)、紅梅(か)、すべて薄色の類(がよ)。

女の表着は、

薄色。蒲萄染。萌黄。櫻。紅梅。惣て薄色の類。うす色 例の紫のなり。

唐衣は、

赤色(か)藤(がよ)。夏は二藍(がよ)く、秋は枯野(がよ)。

唐衣は、

紅色。藤。夏は二藍。秋は枯野。

裳は、

大海(がよ)。

大海。

女のうはぎは からぎぬは 裳は

かざみは 織物は 紋は

大海 「海部」ともいふ、海の波に海松、磯貝などの模様を出したる織物。

かざみは、

汗衫は、

春は躑躅(か)、櫻(がよく)、夏は、青朽葉(か)、朽葉(がよ)。

春は躑躅。櫻。夏は青朽葉。朽葉。

つじ 表白、裏蘇芳○青朽葉 表経青、緯黄、裏青○朽葉 表経紅、緯黄にて藍の黄なるもの○織物 織もやうある布帛。綾、錦の類なり。

織物は、

織物は、

紫(か)、白(か、でなければ)萌黄に榊葉を織り出したの。紅梅もよいけれど、やつぱり、ひどく見せめがする。

紫。白。萌黄に榊葉織たる。紅梅も好れども、仍見冷此上なし。

紋は、

紋は、

葵(か)、かたばみ(か)、あられ地(がよ)。

葵。酢漿草。霞地。

紋 織物におり出したる紋がらなり○あふひ 葉の大きき二三寸間くして五つの縁をなし尖らず、二つづ、對生するを以て二葉草ともいふ。賀茂祭にこの葉をかざしにもし、御簾などにもかくるを以て賀茂葵ともいふ。それを模様織り出したるなり○かたばみ 小草の名。地に延び生ず。葉は互生して大きき五分、三瓣にして瓣ごとに一缺あり。その形を紋とす○あられ地 地紋の小石疊をいふ。その中に窠の紋あるなり。

ゆきが片方だけ長いを着て居る人は、見ともない。それを澤山かさねて着るものなら、片重りがして、(とて)着にくい。綿でもたんと入れたものなら、胸などがあいて、まことに見ともない。(やつぱり、普通のゆきのと)交せて、着るべきではない。昔の通り、ちやんと揃つたゆきを着る方がよい。右左(とも)同じに長ければよい。でも、それも、女房の装束には窮屈だ。男にしても何枚もかさねたら、片おもりがするだらう。(けれど)美しい織物や、薄物の装束まで、今は皆な、さういふ仕立にする。そんな風にして、折角よい姿の人がお召しになるのは、誠に馬鹿氣て居る。

容貌のよい君達が、彈正で居らつしやるのは、誠に見ともなくて(お氣の毒だ)。宮の中將(頼)などの不似合だつた事。

容貌美き君達の、彈正にて在る、甚見苦し。宮中將(頼)などの口惜しかりしかな。

片つ方のゆだけ かたちよき君達の

彈正 彈正蓋は宮城の内外を巡察し非違を糺彈する役なれば、優美なる公達には似合しからぬ役なるなり○宮の中將 村上帝の皇孫、母は左大臣源高明の女。正暦三

年輩正大弼に任せられ、長徳四年左近中将となる。美男にして三條院が東宮の時の尙侍姫子(兼家の女)に私したり。大鏡に「この御あやまちにより源宰相(頼定)三條院の御時は殿上もし給はで地下の上達部にておはせしに、此の御時(後一條)にこそは殿上し、捨非違使別當などになりてこそ亡せ給ひにしか」とあり。

病氣は、

胸(か)、靈氣(か)、脚の氣(か)、(でなれば)、たゞ何となくぶら〜と煩つて、何にも食べないの(などが、しやれて居る)。十八九位の女が、髪が格別美しく身丈と同じ位の長さで、下り端が房々とし、むつちりと肥えて色が眞白で、愛敬のある顔をして居るのが、齒痛みにひどくなやんで、前髪もびしよ〜に泣きぬらし、髪が亂れて顔にかかると知らず、(のぼせて)赤い顔を、おさへて居るのが風情がある。

病は、

胸。靈氣。脚氣。唯何となく物食ぬ。十八九許の人の、髪甚麗くて、身長許、裾房やかなるが、甚よく肥て甚う色白う、顔愛嬌付き妍と見るが、齒を甚く病み惑て、額髪も夥に泣き濡し、髪亂れ被るも知らず、面赤くて抑へ居たるこそ興趣けれ。八月許、白き單衣、柔軟なる袴、好き程にて、紫苑の衣の甚鮮麗なるを引き被て、胸甚う病ば、友達の女房達など、代る代る來つゝ、友甚最惜き事かな。例も斯や惱み給ふ〜など、事無風に問ふ人もあり。懸想たる人は、實に甚じと思ひ嘆き、人知ぬ中などは、況て人眼見て、寄にも近くも、得寄ず、思ひ嘆たるこそ興しけれ。甚麗しく長き髪を引き結て、物吐くとて起き上りたる氣色も、甚心苦

に引かけ(た女房が)胸をひどく痛がるのを、友達の女房などが、代る〜見舞に來る。室の外にも若やかな君達が大勢來て、「實に氣の毒な。いつもこんなに苦しがりなさるか」など、義理にきく人もあり、懸想でもして居る

紫苑 表薄紫、裏青。

人は、心から氣の毒がつて心配をし、内々言ひ交して居る男などは、一層氣になりながら、人目を思つて傍へは寄り得ず、(はら〜して)居るのがよい。美しい髪を引き結んで、嘔き氣がすると、床の上につき上つて居る様子も、誠にあはれで可愛らしい。宮様のお耳にも入つて、御讀經の僧の聲の美しいのを、お遣はしになつたので、几帳を引きよせて、(その外に)僧を据ゑて居る。狭いへやの中だから、見舞の女房たちが多勢來て、經を聽いて居るのも、見通しなので、(坊さんは、その女房達を)じろ〜見ながら、お經をよんで居るのが、罪になりさうだ。

癪なもの(は)、

何處かへ往つたり、寺へでもお詣りする日の雨。召使が、「私はお氣に入らない。誰それが、今ではお氣に入りだ〜

こゝろづきなきもの

厭忌きもの、

他へ往き、寺へも詣る日の雨。使ふ人の「我をば思さず、某こそ只今の人」など言を微聞たる。人よりは仍少し憎しと思ふ人の、

五〇五

などいふのを、ちらと聞いたの。少しきらひな位の人が、やたらに邪推を廻して怪氣をしたり、自分二人よい人ぶるの。氣立のわるい乳母に育てられた子。それは何も、その子に罪もないけれども、あんな者に育てられた子だと思ふせいかしらん。(その乳母が)、

「多勢のお子の中で、このお子一人、やすく御覽なさるのか(可哀さうに)、憎まれなさる」など、大聲でいふ。

子供は、何にも知らないのか、(乳母の)あとを追つては泣く。それが(親の)氣にくはないのだらう。大きくなつても、余まり(乳母が)世話をやき過ぎるので、却て子供の爲によくはない事が多い。氣に食はない、いやだと思ふ人が、無遠慮に(面と向つて)嫌ひだと言つてやつても、引ついて深切ぶるの。ちよいと氣分が悪いとでも言ふものなら、いつもにも増して傍に寝て、何か食べさせたり、いたはつたり、此方は何とも感じないのに、一人で引ついて、世辭たらしく、大さわぎで介抱する。

宮仕人の處に通ふ男が、そこで食事を

推量言打し、漫なる物怨し、我賢氣なる。心悪き乳母の養たる子。然は其が罪にもあらねど、斯る乳母にしもと覺る故にやあらむ乳

「數多あるが中に、此の君をば思ひ貶し給てや、憎れ給よ」など荒らかに言ふ。兒は思も知ぬにやあらむ、探て泣き感ふ。厭きなんめり。大人に成ても、思ひ後見もて騒ぐ程に、却々なる事こそ多んめれ。佗しく憎き人に思ふ人の、憚なく言ど、添ひ付て懇がる。聊氣分悪しなど言ば、常よりも近く臥て、物食せ最惜がり、其の事となく思たるに、纏れ追従し、周旋て感ふ。

宮仕人の許に來などする男の、其所にて物食ふこそ悪けれ。食す

するのは、誠にいけない。食べさせる人も、實に憎らしい。思ひ人が、「まあ(召上れ)」と、折角言ふのに、口を結んで顔を引込めるのも、嫌つたやうだと、食べて居るのだらう。ひどく酔つたりして、よんどころなく泊り込むやうな時でも、湯づけ一つ食べさせない方がよい。氣がきかないと、それ切り來ずば、來ずともよい。里に居る時に、勝手から(食事を)出したのは、よん所ないけれども、それすら、やつぱり、余り、よい事ではない。

初瀬に參詣して局に居たらば、身がらの低い者たちが、着物の後巾が重なり合ふやうに、ぎつしり詰まつて居た様子が、無作法だつた。一生懸命の奮發

初瀬に詣つて

る人も甚憎し。思ん人の、先など志ありて言んを、忌たる如にて、口を塞て、顔を持って退べきにもあらねば、食ひ居るにこそあらめ。甚う酔などして、理なく夜更て泊りたりとも、更に湯漬だに食せじ。心も無りけりと來ずば、然て有なん。里にて北面より爲出しては、如何せん。其だに仍ぞある。

北おもて 家の裏側。くりやなどないふ〇なほぞ「なほ」の下に「よからず」の意含まる。

初瀬に詣て、局に居たるに、汚き下賤們的、背差し交つ居並たる氣色こそ蔑なれ。甚き心を發して詣たるに、川の音などの恐しきに、樽階を上り困じて、何時しか佛の御顔を拜み奉んと、局に

心で参詣したので、川の音などの恐ろしい(のをきながら)博階をやつと登つて、早く佛の御顔を拜まうと局にいそいで入つたのに、蓑蟲のやうな者どもが集つて、立つたり坐つたり、おじぎをしたりして、ちつともはたの迷惑を思はずのさばつて居るのは、押し倒してやりたい氣がした。高貴の方のお局だけには、前拂ひをするが、普通の人では、何とも制しやうがない。懇意な法師を頼んで、言はせると、法「お前たち、少しあの方へ」など言ふけれども、(その人が)往つてしまふと、又もとの通りに出しやばつて居る。

いひにくきものは、

御主人の御消息や、お言傳の澤山ある

急ぎ入たるに、蓑蟲の如なる者ども集りて、立ち居額着などして、露ばかりも所をおかぬは、押し倒しつべき心地こそすれ。甚尊き人の局ばかりこそ、前拂あれ。尋常き人は制し煩ぬかし。頼し人の師を呼て言すれば、法師「足下們少し去れ」など言ふ程こそあれ、歩み出ぬれば、同じ様に成ぬ。

うしろさしませ 後布の次に後布のあるやうに、ゆき全たいに居す押し合ひ居るさまなり〇くれはし 木にて作りたる階段なり。今も初瀬寺はそこを上りて本堂に達するなり〇みの虫のやうなる 美きをひたもの愛で、みにくきをあはれとは見ずして厭ふ清少が例のさまなり。

言ひ難きもの、

人の消息仰言などの多るを、序の隨に初より奥まで甚言ひ難し。

返事又申し難し。尊しき人の物越せたる返事。成人に成たる子の、意外なる事聞き付たる、前にては甚言ひ難し。

のを、順序よく初めから終りまでは、誠に言ひにくい。(又、その)返事を、ちゃんと申上げるのも、六かしい。氣のおける方から、頂き物をしたお禮の言葉。大人になつた子の、かくし事を耳にした(のは)、ぢかには、誠に言ひにくい。

東帯は、

四位五位(の)は、冬(がよく)、六位(の)は、夏(がよい)。宿直姿も同様。男も女も、品格はありたいものだ。一家の奥方として居るのに、誰も、よい、わるいの批評はしないけれども、それでも批評眼のある使などが往くと、自然、(品がよいとか、わるいとか)噂をする。まして、宮中に御奉公する人は、品が一番大切だ。猫が地べたに下りた

東帯は

東帯は、

四位五位は冬。六位は夏。宿直姿なども。品こそ男も女も有ま欲き事なんめれ。家の君にてあるにも、誰かは善悪を定る。其だに物見知たる使人往て、自然言べかんめり。況て仕官する人は、甚此上なし。猫の土に下たる如にて。

四位五位は冬 四位の袍の色は黒、五位は淺き緋なれば、冬によしの意〇六位 深緑なれば夏向きなるなり〇とのゑ姿 東帯の時とは表の袴のかはるのみにて袍は同じなればいふ〇猫の土に 家の中のみある猫が、たま／＼土に下りたるやうに、所にそぐはぬ形をいふなるべし。

たくみの物食ふこそ 物語りもせよ
やうで(は、ありたくない)。

大工の物食ひは、ほんとに奇妙だ。寢殿を建て、東の對のやうな屋を造る時に、大工達が、並んで食べるのを、東面に出て見たら、持つて来るが早いか、汁をとつて、すつかり飲んで、(その入れ物の)土器を片よせてしまつて、次に、お菜をすつかり食べてしまふから、御飯は、いらぬのだらうかと見て居る中に、べろ／＼と平けてしまつた。二三人が、皆なさうしたから、大工の習性だらうと思つた。へんな事だ。

物語でも、昔物語でも、(よくはきかずに)知つたふりの返事を爲い／＼、外の人と、何かしやべつて居るのは、

工匠の物食こそ甚奇けれ。寢殿を建て、東の對だちたる屋を作るとして、工匠們居並て物食を、東面に出て居て見れば、先づ持つて来るや遅きと、汁物取て皆飲て、土器は突い据つ、次に菜を皆食つれば、御飯は不用なんめりと見る程に、即てこそ失にしか。二人三人居たりし者、皆、然せしかば、工匠の、然るなんめりと思なり。あいな事どもや。

寢殿 正寝、正殿などいふ。中央の殿舎なり○しるもの 主人方より出せる膳部にて汁と菜と飯と献立しあるなるべし○おもの 椀に高く盛りたるにて代りなせぬなれば、多く食する労働者は、たゞ二三口に食ひ盡せしなるべし○あいな の「あいな」となりある書あり、後人のさかしらなるべし。

物語も爲よ。昔物語も爲よ。賢らに答打して、他人と、物言ひ紛す人甚憎し。

物語もせよ「物語にもせよ」の意なり、次も同じ○さかしら「知つたふり」

殊に憎らしい(ものだ)。

ある所の中の君とか言ふ人の許へ、君達ではないけれども、しやれ者と評判される風流人が、九月頃に往つて、在明の月が非常に明るく風情があるので、(女に)名残を思ひ出させやうと、やさしい事の數々を並べて出るのを、女は名残をしげに、いつまでも見送つて居る様子が、誠に優美だ。出るやうに見せて立ち戻り、立蔭のあいた蔭の方に立つて、まだ行きやらない様も分らせやうと思つて居たら、(女が)「有明の月のありつゝも」と言ひながら、さし覗いた頭から、(かもしが)五寸ばかり離れて、眞赤に火を灯したやうな月影に照し出されたので、驚いて、そ

或る所に

或る所に、中の君とかや言ける人の許に、君達にはあらねども、其の心甚く好たる者に言れ、思慮などある人の、九月許に往て、有明の月の甚う照て面白きに、名残思ひ出られんと、言の葉を盡して言るに、今は去らんと、遠く見送る程に、得も言ず艶なる程なり。出る如に見せて立ち歸り、立蔭開たる陰の方に添ひ立て、仍往き遣ぬ様も言ひ知せんと思に、有明の月の在つゝもと打ち言て差し覗たる髪、頭にも、寄り來ず、五寸許退りて、火點したる如なる月の光催されて、驚さるゝ心地しければ、徐立ち出けりところ、語しか。

中のきみ 下に幾人ありても次女を必ずいふ、「何の君」となり居る書あれども、「何の君」といふ事あまりなし、この方をとる○きん邊 公達の字をあつ「君等」なり諸王、攝家、清華の子息、又大臣大将の子にて中納言中將に至れる人ないふ○あり明の月のありつゝも 拾遺集なる、人丸の「長月のあり明の月のありつゝも、君し來まさば、われ戀ひめやも」をいへり(夜の長くなる長月のあり明の月の如く、

つと退いたと(後に男が)咄した。

いつも〱變りなく君の來まきば、我は戀しさにせめらるゝ事なからんとなり。〇かみのかしらにもより來ず五寸ばかりさかりて 諸本「かしこより五寸ばかりをさつらの五寸ばかり、頭より、すり下りたるさまなり。それが火を灯したるやうなる月明に照し出されしを見て、男の興さめしさまをいへり〇かたりしか その男の後に清少に語りしとなり。

女房が、御所へ上つたり退つたりするのには、車を借りる時もあるが、機嫌よく貸しても、牛飼童が、妙に牛を下直に扱つて、ひどく打つては走らせるのが、氣になるのに、車副の男たちも、ふきげんで、「追立て、夜の更けない中に歸らなくちやあ」といつたりすると、貸し主の心も推はかられて、急な事があつても、二度とは借りまいと思ふ。業達の朝臣の車だけは、夜中でも、あけ方でも、人が借りて乗るのに、さういふ事が、決してなかつた。よくも、

女房の参り罷出するには、車を借る折もあるに、用意したる顔に打ち言て貸たるに、牛飼童の、例の牛よりも下品に打ち言て、甚う走り打も、噫憂てと覺かし。男們などの、物煩し氣なる氣色にて、「如何で夜更ぬ前に、追て歸りなん」と言は、仍主の心推量れて、頓の事なりと、再言ひ觸んとも覺ず、業達朝臣の車のみや、夜中曉分す人の乘に、聊然る事なかりけむ、好ぞ教へ習せたりしか。道に逢たりける女車の、深き所に陥し入て、得引き上で、牛飼の腹立ければ、我が従者して打せさへしければ、泥て心の隨に誠め置たるにこそ。

こゝろよそひしたる顔に打ちいひて これも他本「心よういひて貸したるに」とあ

しつめたものと感心する。途で出逢つた女車が、往來のくぼんだ處に車を陥めてしまつて、引上げられないで、牛飼がぼん／＼怒つて(どなつて)居たら、御自分の従者に手傳はせて、牛を歩かせた位だから、まして、(自分の車の事は)思ふまゝに訓戒してあるのだらう。

色好みで獨身で居る男が、昨夜は何處へ宿つたのか、曉方歸つて、まだ眠さうな様子で、硯をとり寄せ、墨を丹念に磨つて、出たために筆にまかせてなどではなく、心をこめて書いて居る、しどけ姿が、しやれて見える。白いきものゝ上に、山吹や紅などを着て居る。白い單衣の、すつかりたくたに

すき／＼しくて

り、下文に「例の牛よりも、しもごまに打ちいひて」などあれば「こゝろよそひしたる顔に」とある方、打ち合ひたり〇しもごまに いつも主人の乗る時の牛よりは下直に取扱ふさまなり〇業達朝臣 高階成忠(中宮定子の母貴子の父)の甥なり。正四位下東宮亮たり。

好色しくて、獨居する人の、夜は徒に有つらん、曉に歸りて、未だ眠た氣なる氣色なれど、硯取り寄せ、墨細やかに押し磨て事なし風に筆に任せてなどはあらず、心注で書く、まひろげ姿興しう見ゆ。白き衣どもの上に、山吹、紅などを着たる。白き單衣の甚う萎たるを、打目成つ、書き立て、前なる人にも取せず、特と立て、小舎人童の相應しきを、身近く呼び寄せて、打密語て、往る後も久く詠めて、經の然べき所々など忍やかに吟誦に爲居たり。

なつたのを、じつと見ながら書き了つて、前に居る召使の手にも渡さず、自身立つて小舎人童の氣の利いたのを、傍近く呼び寄せて、何かこそくさやきながら渡して、往つたあとまで、じつと見送りながら、經のよい處などを、口の中で誦して居る。奥の方に、御手水や、粥の支度をして促すと、歩み入つて、文机に押かゝつて、書物を見て居る。おもしろい所々は、聲に出して誦んじて居るのもよい。手を洗ひ、直衣だけ着て、六の巻を暗誦して居る。實際尊げに見える處に、近い處と見えて、先刻の使が歸つて来て、「唯今」といふ様子をすると、書を讀みかけたまゝ、その返事に氣を移して見て居るのもおもしろい。

綺麗な若い人が、直衣も、袍も、狩衣も皆なよいのを澤山着込んで、袖口が厚ぼつたく見えるのが、馬に乗つて往きながら渡す堅文を、供の男が、眼を空に向けて、仰のいて受とる様子が、おもしろい。

前の木立が高く、庭の広い家の東南の格子などを、すつかり上げたので、涼しさうにすけて見えるのに、身屋に四尺の几帳を立て、前に圓坐を置いて、三十余り位の僧の、さう見ともなくもないのが、薄墨の衣や羅の袈裟など立派に支度をして、香染の扇をつかひ、千手陀羅尼をよんで居ると、靈氣にひどく悩む人と見え、かり移す人らしい大がらの童女の、髪など美しいのが、

まへの、たちたから

奥の方に御手水、粥などとして勧誘せば、歩み入て、文机に押し掛りて、書をぞ見る。面白かりける所々は、打ち誦したるも甚興し。手洗で、直衣ばかり打着て、六をぞ空に讀む。實に甚興し程に、近き所なるべし。往つる使打氣色ばめば、直と讀み止て、返事に心入るこそ興しけれ。

いたづらにありつらん 「いたづらに獨りありつらんや」の意なり「いづこかに宿りて」の意こもりたり○事なしびに 「事なしぶりに」にて何事もなかつたふりにの意なれば、こゝには當らず、なき方よろし。例の後の人のさかしらに入れたるか。「何でもなさうに」ほどの意に解しおきたり○山吹 表薄朽葉、裏黄。春の衣なり○打まもりつゝ 思出で深きさまなり○なほしばかり 指貫のなきさまなり○六法華經の六の巻、壽量品なり○心入るゝこそ 他本「心うつすこそ罪得らむ」とあり、これも後人のさかしらに書き添へしなるべし。僧侶にもあらぬ俗人なれば、たゞ、その風情をなかしと見てよき事なり。

清げなる若き人の、直衣も、袍も、狩衣もいとよくて、衣勝に袖口厚く見たるが、馬に乗て往くまゝに、供なるをのこ、堅文を、目を空にて取りたるこそ、をかしけれ。

きよげなるわかき人の 清少が街のゆきすりに見しなるべし、繪のやうなり○たて文 杉原、鳥の子、薄墨などの全紙を用うるをいふ。半に切りたるを切り紙といひ、半に折りたるを折紙といふ。

前の木立高う、庭廣き家の、東南の格子ども上げ渡したれば、涼しげに透て見るに、母屋に四尺の几帳立て、前に圓坐を置いて、三十余ばかりの僧の、甚憎氣ならぬが、薄墨の衣、羅の袈裟など、甚鮮麗に打裝束きて、香染の扇打ち使ひ、千手陀羅尼誦み居たり。靈氣に甚う病む人にや、移すべき人として、大やかなる童の、髪など麗き、生絹の單衣、鮮麗なる袴長く着なして、膝行出て、横方に立る三尺の几帳の前に居たれば、此方さまに捻り向て、甚細う匂やかなる獨鈷を取せて、「を」と眼打ち塞て讀む陀羅尼も甚尊

生絹の單衣に新しい袴を長く着てゐざり出て、横の方に立てゝある三尺の几帳の前に坐ると、(僧は)その方にねぢ向いて、細いきれいな獨結を持たせ、「を」と眼をつぶつて讀む陀羅尼も誠に尊い。(几帳もなしに)むき出しに、女房が大勢集まつて、じつとみつめて居る。

間もなく顔へ出すと、正氣がなくなつて、僧の誦經につれて、(臉をあらはす)護法も、誠に尊い。袿を着た兄さんの細冠者などが、(童女の)後ろに居て、扇いだりする。皆な尊がつて集まつて、(見て)居るのも、正氣だつたら、どんなに氣まりがわるからう。自身は、(夢中なのだから)、苦しくもないと知りながら、その童の知り人などは、ふ

し。顯證の女房數多居て、集み目成たり。久くもあらで頼み出ぬれば、本の心失ひて、行ふ隨に、隨ひ給る護法も、實に尊し。兄の、袿したる細冠者們などの、後に居て團扇するものあり。皆尊がりて集りたるも、例の心ならば、如何に耻しと惑ん。自身は苦しからぬ事と知ながら、甚う佗び嘆たる體の心苦しさを、附人の知人などは、可愛く覺て、几帳の許近く居て、衣引き繕ひなどする程に、快しとて、御湯など北面に取り次ぐ程をも、若き人々は不安く、盤も引き下ながら、急で来るや。單衣など清げに、薄色の裳など萎えかゝりてはあらず、甚清げなり。申の時にぞ、甚う陳謝言せなどして許つ。「几帳の内にとこそ思つれ。驚しうも出にけるかな。如何なる事ありつらん」と耻しがりて、髪を振り被て入り入ぬれば、少時留て、加持少し爲て、僧如何に輕快に成り給りや」とて打ち笑たるも憚しげなり。僧「暫時侍ふべきを、時の程にも成り侍ぬべければ」と罷申て出るを、人々「暫時、法施

びんに思つて、几帳の傍に居て、(あばれ狂ふ童女の)みなりを繕つたりする。

その中に、病人の氣分がよくなつたとて、御藥湯など、北面から(出すのを)、取り次ぐ間も、若い女房達は、氣になつて、(お湯の)盤を下げながらも、いそいで(よりました)童女を見る。單衣などきれいで、薄色の裳なども、しゃんとして、きれいだ。申の時頃、靈にあやませたりして、赦してやると、童女「几帳の中に居たつもりなのに、どうして出たのだらう。どんな事をしたのか」と、氣まり悪がつて、髪を振りかけて入り込むのを、一寸留めて、加持を少しして、僧「どうです、氣分は、はつきりしましたか」と、にこ

報當參せん」など留るを、甚う急び、所に應たる上臈と思しき人、簾の許に膝行出て、上「甚嬉しく立ち寄せ給りつる驗に、甚堪へ難く思ひ給られつるを、即時癒る如に侍ば、返々悦び聞えさする。明日も御暇の際には、在させ給へ」など言つぐ。僧「甚執念き御靈氣に侍るめるを、油斷せ給ざらんなん好く侍べき。快く在させ給なるをなん悦び申し侍る」と、詞寡にて出るは、甚尊きに、佛の現れ給るところ覺れ。

まへの木立 他本「松の木立」とあるあり、松ばかりの木立といふはや、妙ならず「前の木立」とある書をとる○香染 丁子にて染めたる色。淡紅に黄を帯びたるもの○千手たらに 千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無碍大悲心陀羅尼經を略していふ、單に千手經ともいふ、陀羅尼は諷誦すべき經文の名なり○移すべき人 病氣は靈氣のつき居るものと思ひたる此の頃のならひなれば僧に祈禱させて病人よりつきものを離し他の人に移すなり、寄兎といふ。初めよりよりましたとして据ゑ置き多くの僧にて聲を合せて祈るなれば、神經作用にて、よりましたと定められたる童女はあらぬ事を口走り狂ふなるべし○横ざまに 僧の坐したる横の處になり○護法 護法神なり僧の讀經につれて護法神の臉をあらはすなり○細冠者 年若くして、まだ、からだに、ひれのつかぬをいふ。よりました童女の兄なり。冠者は元服したるをいふ○うちはする 狂ひの、しりて汗するを扇ぎやるさまなり○らうたく こゝはいたは

にこするの(童女の方では)間がわるさうだ。僧「今少しおつき申て居べきで御坐います、時の時刻になりますから」と、暇乞するのを人々「まあしーばらく。法施、報當をさし上げますから」など、とめるのを、ひどく急ぐので、場合相當の上薦らしい人が、(病人の)簾の處からみざり出て、「よくぞお立より下さいまして、おかげ様でひどいなやみも早速樂になりましたやうで、かへすゝありがたく存じます。明日もお手すきにお出でを願ひます」など言ひ次ぐ。僧「非常にしふねい御靈氣らしい御坐いますから、御油斷なさらないがよろしい。御さわやぎになつたのは、結構で御座いました」と、詞少なで立出るのが、誠に尊くて、佛が御出現になつたと思はれる。

しく思ふなれば、やゝ當らぬ用語なり○盤 藥湯の盤なり○申の時 午後四時○時のほど 例の定まりたる時の勤行をいふ「勤行の時間になるから」となり。こゝは夕方の念佛を修するをいふなるべし○法施 布施○報當 報謝○いとしふねき 俗に、もつたいをつくるなり○詞すくなにて 他事をいはず、とくかへるなり。

きれいな童の髪の長い(や)、又大童子で、髻が生えて居ても、存外髪的美いの(や)、又ひどく頑丈な男など大勢使つて、忙しさうに、彼方此方から引ぱり風に、尊崇されるのは、法師でもよい。親などが、どんなに嬉しからうと、察しられる。

清げなる童の、髪長き。又大やかなるが、髻生たれど、意外に髪麗き。又、強に恐れなるなど多て、暇無氣にて、此所彼所に尊き評あるこそ、法師も有ま欲き事なんめれ。親など如何に嬉からんとこそ推量るれ。

童 小童子○こゝかしこに云々 俗にいふ「賣れつ子」なり。

見ぐるしいもの(は)、

着物の脊筋を曲げて着て居る人。又、披衣紋をした人。下簾の汚らしい上達部の御車など。(それから)むざとした(尊い)人の前に、子供をつれて出て來たの。袴を着た童が、足駄を穿いて居るの。それは、近頃のはやり物だけれど。壺装束した者が、馳け足で歩くの。法師や、陰陽師が、紙の冠をして、袂をするの。又、色黒く瘦せた醜い女が、長い入毛をしたのも(見ともない)。髻澤山に瘦せこけた男と、晝寝したの。何を見立てに、晝間寝て居るんだらう。夜などは、姿も見えず、又、一たいに、寝る時となつて居るから、ぶきりやうだとして、起きて居やうもない(し、男が)早く起きて、往つてし

見苦しきもの

見苦しきもの、

衣の背縫片寄て着たる人。又退首したる人。下簾穢げなる上達部の御車。例ならぬ人の前に、子を率て往たる。袴着たる童の足駄穿たる。其は今様の物なり。壺装束したる者の急て歩たる。法師陰陽師の紙冠して袂したる。又色黒う瘦せ、憎氣なる女の鬘したる。髻勝に瘦々なる男と晝寝したる、何の見る効に臥たるにかあらん。夜などは容貌も見ず、又概て、然る事と成にたれば、我憎氣なりとて起き居るべきにもあらずかし。翌旦疾く起き往る見安し。夏、晝寝して起たる、甚美き人こそ今少し愛しけれ。醜容は艶めき寝脹て、好せずば頬曲みも爲つべし。互に見交したらん程の生る効なさよ。色黒き人の、生絹の單衣着たる、甚見苦しかし。伸張單衣も同く透たれど、其は醜にも見ず、臍の通たればにやあらむ。

足駄 袴など穿かぬ下賤のはくものなれば似合しからぬなり○つぼさうぞく 女の

まへばよい。夏晝寝して起きたのは、非常にきれいな人ならば、ちよいとはよいが、ぶきりやうだと、あぶらぎつて腫れたやうで、わるくすると曲つた顔をして居る。(男も女も)、お互ひに見合つた顔の、生き効のない事夥い。色の黒い人が、生絹の單衣を着たのは、誠に見ぐるしい。のし單衣も同様透きはするが、それは見ともなくもない、織りめが通つて居るから知らん。

薄暗くなつて、文字も書けなくなつた。筆も使ひはたしたから、もう止めにしやう。この草紙は、目に見たり、心に思ふ事を、人に見せるのでもないからと、退屈な里居の時に書き集めたのだから、人の爲には、不都合な言ひ過ぎ

市女笠に薄絹かけたる外出の装束なり○紙冠 紙を三角形につくりて額にあて後ろにて結ぶ、法師にて陰陽師を兼ね神前にて祓をする者、僧形の頭を紛らす爲、紙にて冠の形を付くるなり、繪にかきたる亡者の額につけたると同じ○男と「男の」とある書あれども、この方をとる。女の書きたるなれば、無意識にかく書くが自然なりさやうの男とひるねする女の氣が知れぬとなり○かたみに見かはしたらん この詞あるにて、前文の「男と」の方なる事、明かなり。いづれも男女同衾のさまをいへり○すゞし 生絲織の練らぬ絹布の名、練に對していふ。軽く薄くして紗の如きなれば色黒き人には見ぐるしきなり○のしひとへ「のし」は生糸を經とし、練糸を練として織れる絹布の名、ねりぬきともいふ、その單衣なり○ほその通りたれば たて糸と、よこ糸と同じかられば、綿の如く筋の通り居て、生絹の如くは透けず紛る方あるなるべし。膚の見ゆるといふ解はいかゞ。

物暗うなりて、文字も書れず成たり。筆も使ひ果て、是を書き果ばや。此の草紙は、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思て、徒然なる里居の程に書き集たるを、漫然、人の爲、便なき言ひ過しなど爲つべき處々もあれば、清う隠したりと思ふを、涙涙き敢すこそ成にけれ。宮(子定)の御前に、内大臣(周伊)の奉り給りし

などしたやうな所々もあるから、一生懸命隠して置いたのが、思ひの外には、あらはれてしまつた。(一たい初めに)、内大臣様が、宮様にお上げになつた御草紙を、宮様が「これ(に)何を書かうか。上様は、史記といふ文をおかゝせになつたが」など被仰つたので、「ではそれを枕に致しませう」と申上げたから、「では、上げる」とて下さつた。下手な書き方でも、何だ彼んだと澤山の紙に一杯書かうとしたけれども、わけの分らない事ばかりになつてしまつた。大たい、世の中のおもしろい事や、人がよいと感じさうな事やを、もつとより出して、(人なみに)歌の事だの、木(だの)草(だの)鳥(だの)蟲(だの)の事まで、並べたのなら「思つたほどに

ものぐらうなりて

御草紙を、宮、是、何を書まし。帝の御前には、史記といふ書を書せ給る」など宣せしを、清枕にこそは爲侍め」と申しかば、宮「然ば得よ」とて賜せたりしを、拙きを、此よや何やと、盡せず多る紙の數を書き盡さんと爲しに、甚物覺ぬ事多るや。大方是は世間の興しき事を、人の愛たしなど思べき事、仍撰り出て、歌などを、木、草、鳥、虫をも言ひ出したらばこそ、世人「思ふ程よりは悪し、心見えなり」とも謗れぬ。唯心一つに、自然思ふ事を、戯に書き付たれば、物に立ち交り、人並々なるべき耳をも聞べきものかはと思しに、「憚し」なども、見る人は宣ふなれば、甚奇くぞあるや。實に其も道理、人の憎むをも善と言ひ、譽るをも悪と言は、心の程こそ推量るれ。唯人に見けむぞ憾きや。

ものぐらう 「もの悲し」など、同じく「何だか暗くなつて」ほどの意、「薄暗くなりて」なり○上の御前には 中宮にと同時に、一條帝にも、伊周より草紙を上りしなるべし○史記 前漢の司馬遷の著、上古より漢の武帝に至るまでの歴史なり○枕にこそは 坐右に置く、とち本を枕草紙といふ事、惠心僧都が佛門の口訣を記し

もない、くだらないものだ」と悪口も言はれやうが、たゞ、自分が感じたままを、のんきに書きつけたのだから、よそへひろがつて、人並に評判されはしまいと思つたのに、「これは中々よい」など、御覽になつた方が被仰るから、へんなものだ。が、それも道理、人がいやがる事をよいと言つたり、皆なの譽める事をくさしたりするんだから、あまのじやくに見えるだらう。何にしても、人に見られたのが残念だ。

たる書にも枕草紙とあるにて知るべし、手許(枕もと)に置きて感想など記しておくの意○こよや何や 流布本には「こじや何や」とあり。されば「故事や何や」なるべけれど、こと更に故事を多く書きてあらねば、一本の「こよや」の體かなるを取る。○ねたまや この次に、「左中將のいまだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、はしの方なりし疊をさしいでしかば、この草子も、のりて出でにけり、まどひ取り入れしかども、やがて持ておはして、いと久しくありてぞかへりにし、それよりありきそめたるなめりとぞ」とある書あり、後人の附け加へしものなるべし。なき本多し。

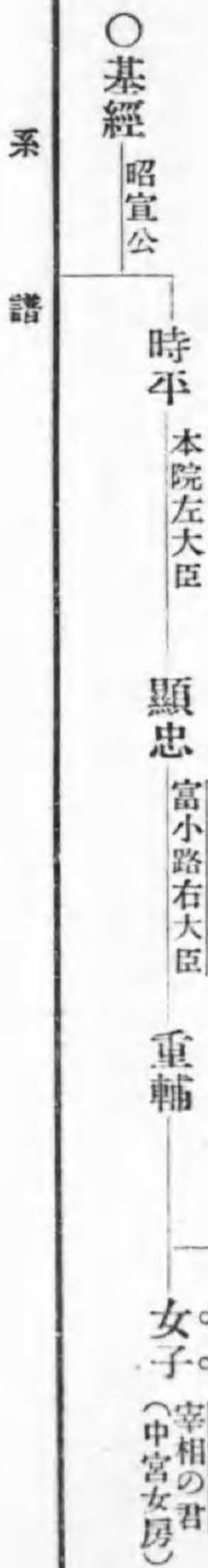
系譜

(○のつきたるは、草紙に現れたる人物、――は草紙の呼び名)

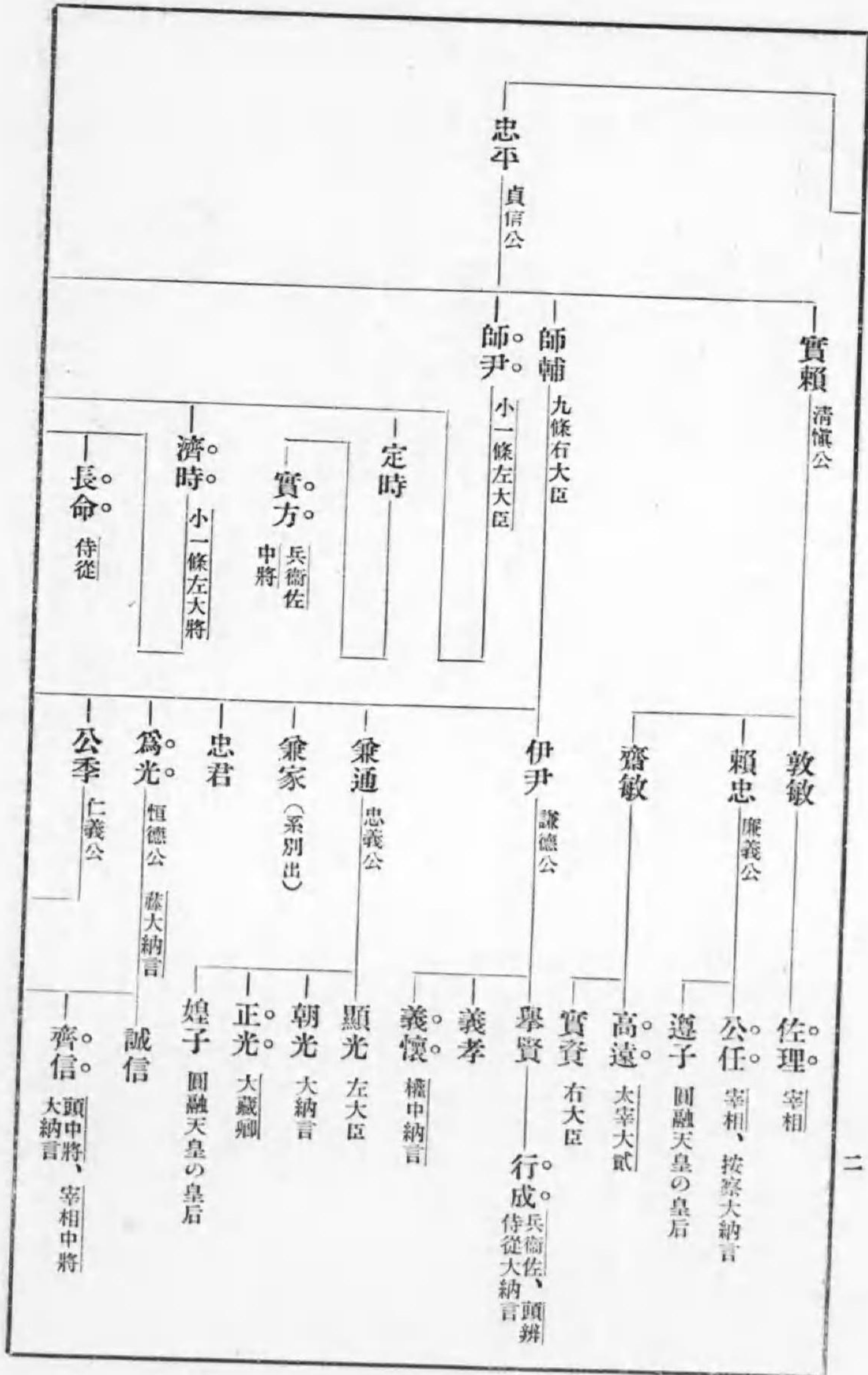
○皇室



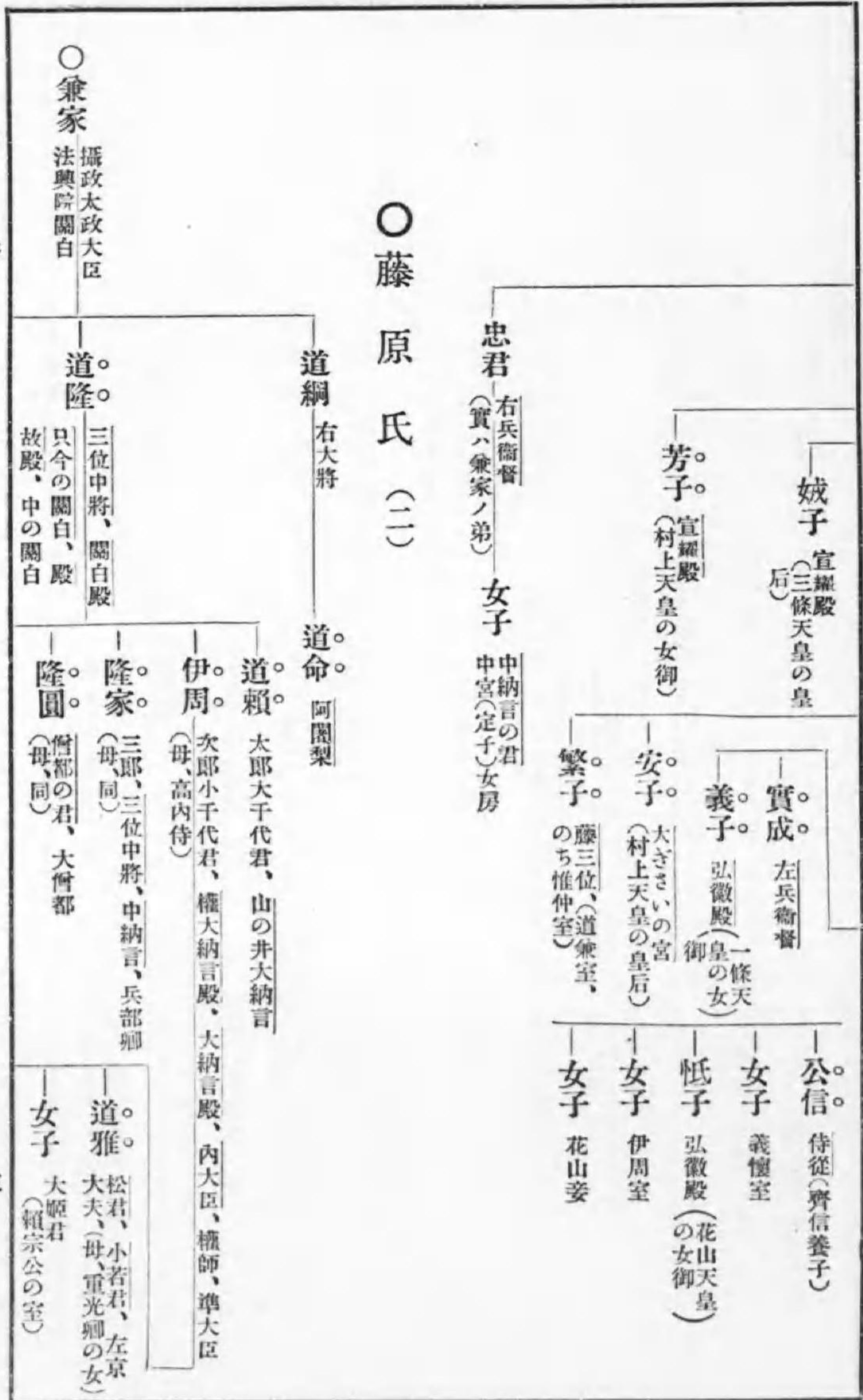
○藤原氏(一)

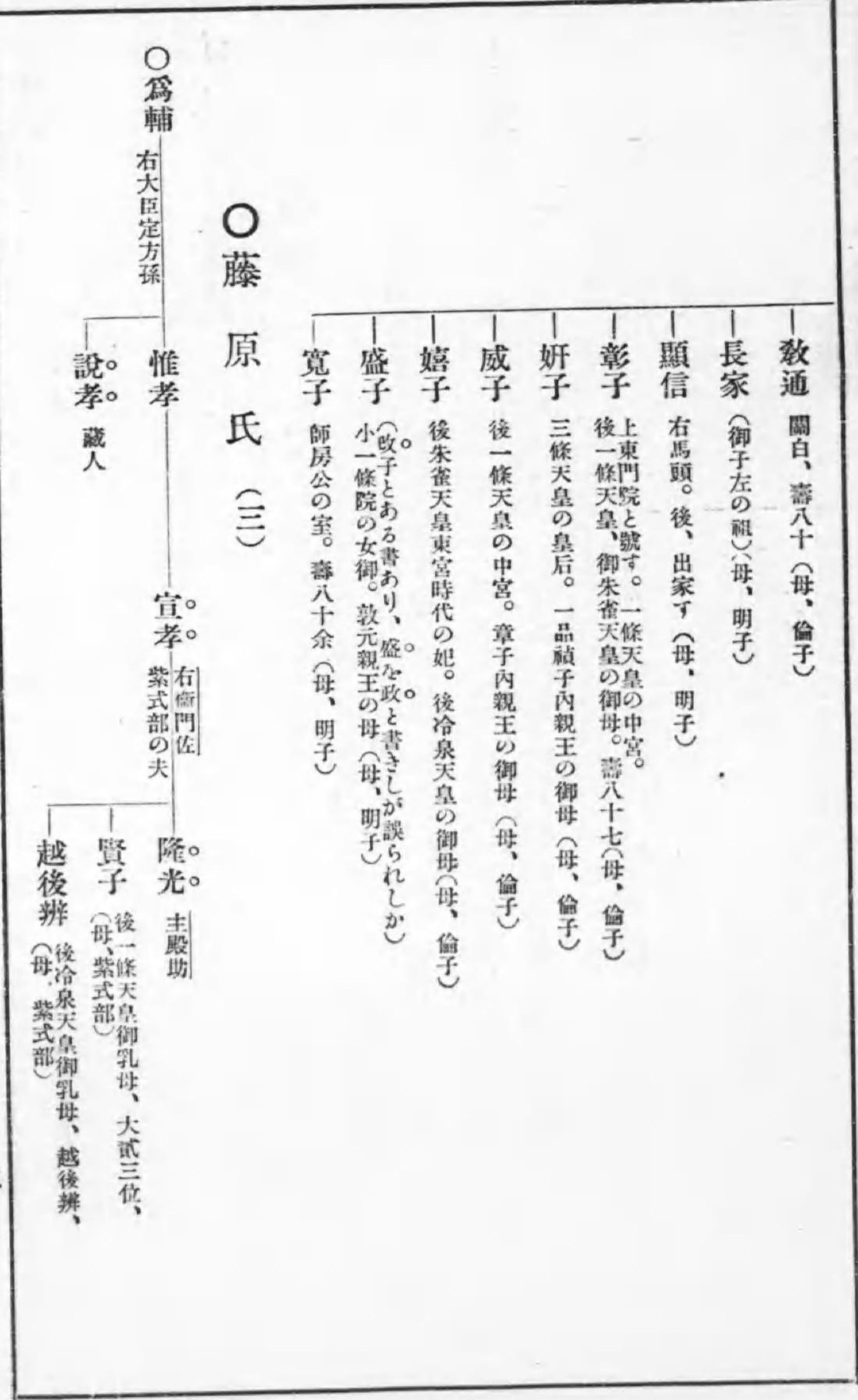
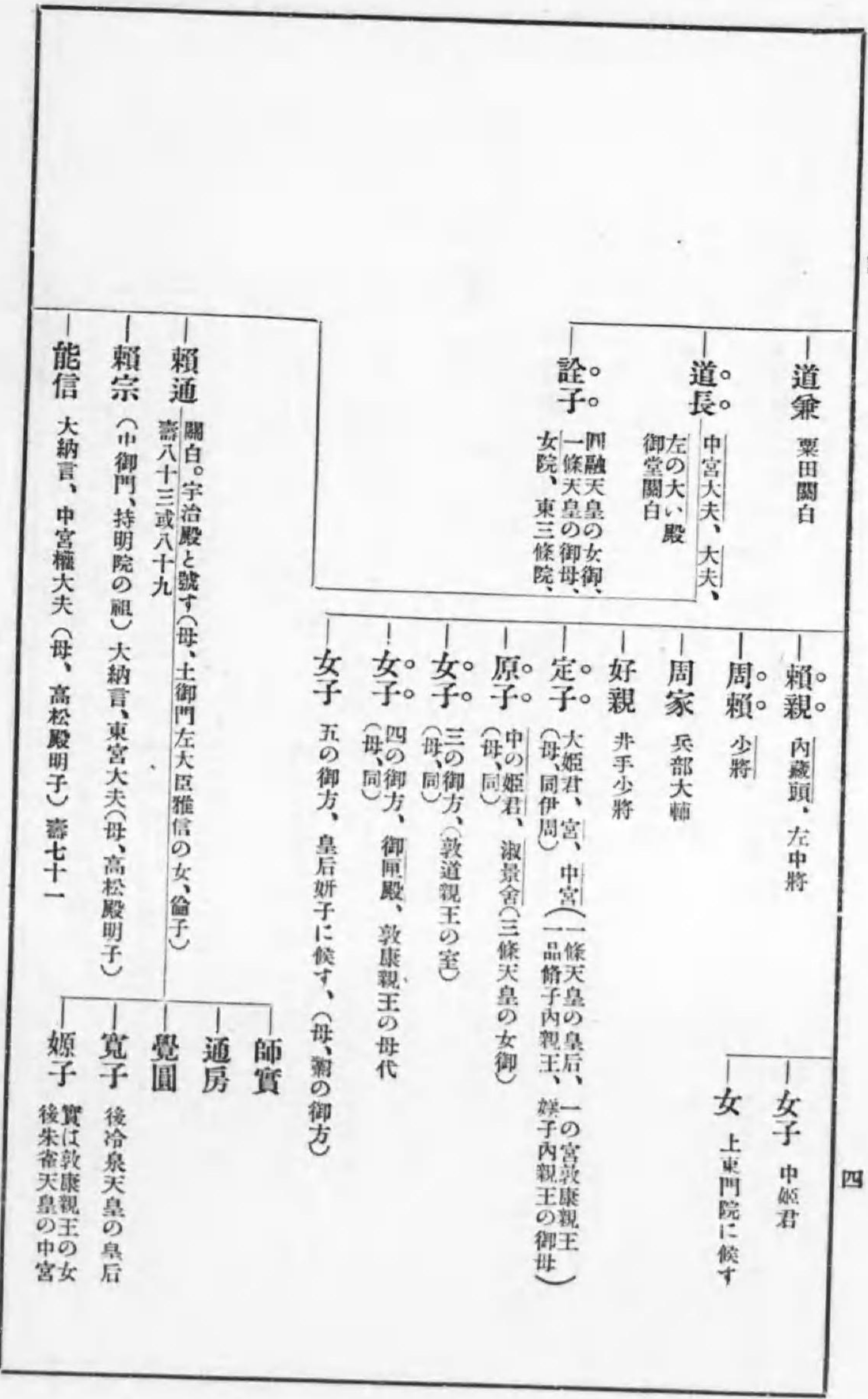


系譜



○藤原氏 (二)





○元方 大納言
 致忠
 懷忠
 保昌 (和泉式部の夫)
 輔尹 木工九、大和守
 信經 式部丞、越後守

○兼輔 堤中納言
 雅正
 爲長
 信經 式部丞、越後守

○時柄 藏人、作物所別當

○源氏

○宇多天皇
 醍醐天皇
 代明親王
 高明 西宮左大臣
 重光
 俊賢 宰相、大納言
 經房 少將、源少將、中將、中納言權帥
 明子 (高松の上、道長室)
 則理 式部丞
 女子 伊周室

敦實親王
 雅信 左大臣
 重信 右大臣
 寬朝 にむじ僧正
 時仲 大納言
 濟政 少將
 女子 隆家室
 女子 致平親王室
 女子 成信母

濟信 仁和寺僧正
 倫子 應司殿 (道長室)
 女子 隆家室

○高階氏

○師尙 右中將 (業平の子と云)
 良臣
 成忠 一條天皇の侍讀 從二位

敏忠
 業達 春宮亮

重信 右大臣
 道方 少納言
 宣方 右衛門佐、中將 源中將
 女子 隆家室

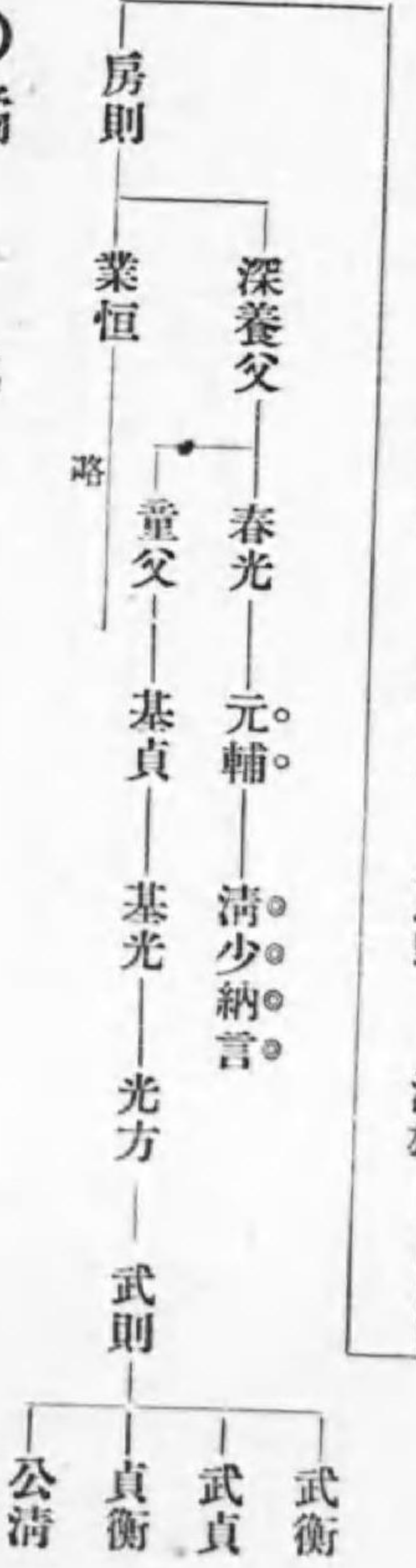
信順 右中辨
 明順 左中辨
 道順 木工頭
 積善 左少辨
 清昭 法橋
 貴子 (うへ、殿のうへ、内侍、道隆室)
 女 大江爲基室

○清原氏

○天武天皇 — 舍人親王 — 眞代王 — 有雄 — 通雄
 御原王 — 小倉王 — 夏野 — 海雄
鴨清原真人姓

○橘氏

○則光 修理亮、左衛門尉、遠江介、播磨守



○平氏

珍材 美作守
 桓武五代之孫

惟仲 左大辨、中宮大夫、中納言、帥
 惟昌 中宮大進、但馬守

○致平親王 成信 權中將、中將、大い殿の新中將
(道長養子)

○爲平親王 頼定 宮中將

○經基 清和二代の孫 滿仲

滿政 忠隆 藏人、式部丞、駿河守

○時明 方弘 藏人、阿波守

○信孝 鎮守府將軍 兼澄 加賀介

○兼資 文德五代の孫 女子 伊周室
 伊豫守 女子 成信室

○女房等

これよりは、草紙中に出づる人のみならば、特に○を附せず

馬典侍 上女房 右馬權頭時明の女 兵衛藏人 村上天皇の御時の女房 忍ぬたぎ 村上皇后の下仕

宰相の君 富小路右大臣の孫 右近内侍 上女房 右少將藤原季綱の女 馬命婦 上女房 猫の乳母

中納言の君 中宮女房 (系前出) 宰相の君 北野三位の女 辨内侍 又辨おもと 中宮女房

少納言命婦 中宮女房 新中納言 中宮女房 源少納言 中宮女房

左京の君 中宮女房 少將の君 すけまさの馬頭の女 式部のおもと 中宮女房

小左近 中宮女房	右	京 中宮女房	小兵衛 中宮女房
侍 從 春宮女房	兵部	中宮女房	命婦の乳母 御乳母の大夫の命婦 中宮女房
ぶぜん 采女	左	京 弘徽殿義子下仕 うち伏の女	みあれの宣旨 齋院女房
相尹の馬頭の女 少將の君の妹 五節舞姫	右衛門	女房か	僧都の君の御乳母のまゝ

(後に皇后となられたれども、こゝに中宮とあるは、すべて定子の事)

○僧尼

にわじの僧正 寛朝(系前出) 定澄 僧都、山階寺別當 法相宗の僧 清範 律師 法相宗の僧 常陸の介 乞食尼

○姓氏不明

さねふさ。 大辨。 藤大納言。 左中將。 三位の君。 藏人辨。 むねたか。 典藥頭重正。

参考年表 (年號のみあるは元年)

寛和 六月十八日、右大將藤原濟時(北)白河に於て八講を修す。同月廿三日、一條天皇御即位七歳○同日、右大臣兼家攝政に任ぜられ、隨身を給ふ○七月五日、御生母、藤原詮子(兼家の女)を皇太后とす。

永延 十二月、藤原兼家、太政大臣となる。

正暦 正月五日、一條天皇御元服(十一歳)○二月、内大臣藤原道隆の女、定子入内、即夜、女御となる○五月兼家關白。次で内大臣道隆之に代り、又攝政となる○七月、兼家薨す○十月、女御定子、中宮となる。

長徳 二月十二日、圓融法皇崩す。壽三十三○十二月清原元輔の女、定子中宮に奉仕し、清少納言と呼ばれる。

長徳 四月、道隆、攝政を罷め、關白となる。

二 四月三日、關白道隆薨む○同五日、内大臣伊周に隨身兵仗を賜ふ○同六日、前關白道隆出家○同十日、入道前關白正二位藤原道隆薨す○同十二日、故關白道隆の家に轉を賜ふ○同廿三日、大納言正二位藤原濟時薨す○廿四日、故關白道隆を葬る。右大臣道隆を關白となす○權大納言藤原道長に左近衛大將を兼ねしむ○五月八日、關白正二位藤原道兼薨す○六月、權大納言藤原道長に、任大臣の宣旨を賜ふ○同十九日、道長を右大臣に任ず○中宮定子内裏に入御○同廿日右大臣道長に左近衛大將を兼ねしむ○廿九日中宮、太政官朝所に移御す。○七月廿四日右大臣道長、内大臣伊周と口論す○十二月廿八日、内大臣伊周、右大臣道長を呪咀す。

二 正月十六日、内大臣伊周、權中納言藤原隆家の從者をして、花山法皇を射奉らしむ○四月一日、内大臣伊周太元法を法琳寺に修す○四月廿四日、中宮二條第に遷御○同日、内大臣伊周を貶して太宰權帥となし、權中納言藤原隆家を出雲權守となす○五月一日、

参考年表